



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(114)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(X)

なか はら さん や 遺 跡
中原山野遺跡

(鹿屋市郷之原町)

2007年2月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



出土遺物



郷之原地区航空写真（昭和49年）「国土画像情報（カラー空中写真）」

序 文

この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴って、平成17年度に実施した鹿屋市郷之原町に所在する中原山野遺跡の発掘調査の記録です。

中原山野遺跡は、昭和62年度に発掘調査が行われており、今回の調査区は、その隣接地になります。

今回の調査では、弥生時代の掘立柱建物跡の一部と考えられる柱穴が検出され、縄文時代、弥生時代の遺物も出土しました。

また、太平洋戦争中の誘導路や防空壕などの戦跡遺構が検出され、銃弾、薬莢、陶磁器などが出土しました。

これらの資料は、大隅地方に暮らした先人たちの生活の一端を明らかにする貴重な手がかりです。そして、戦後60年以上の時間が過ぎ、風化が懸念される戦跡遺構の追加資料ともなりました。

本報告書が、県民の皆様をはじめ、多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

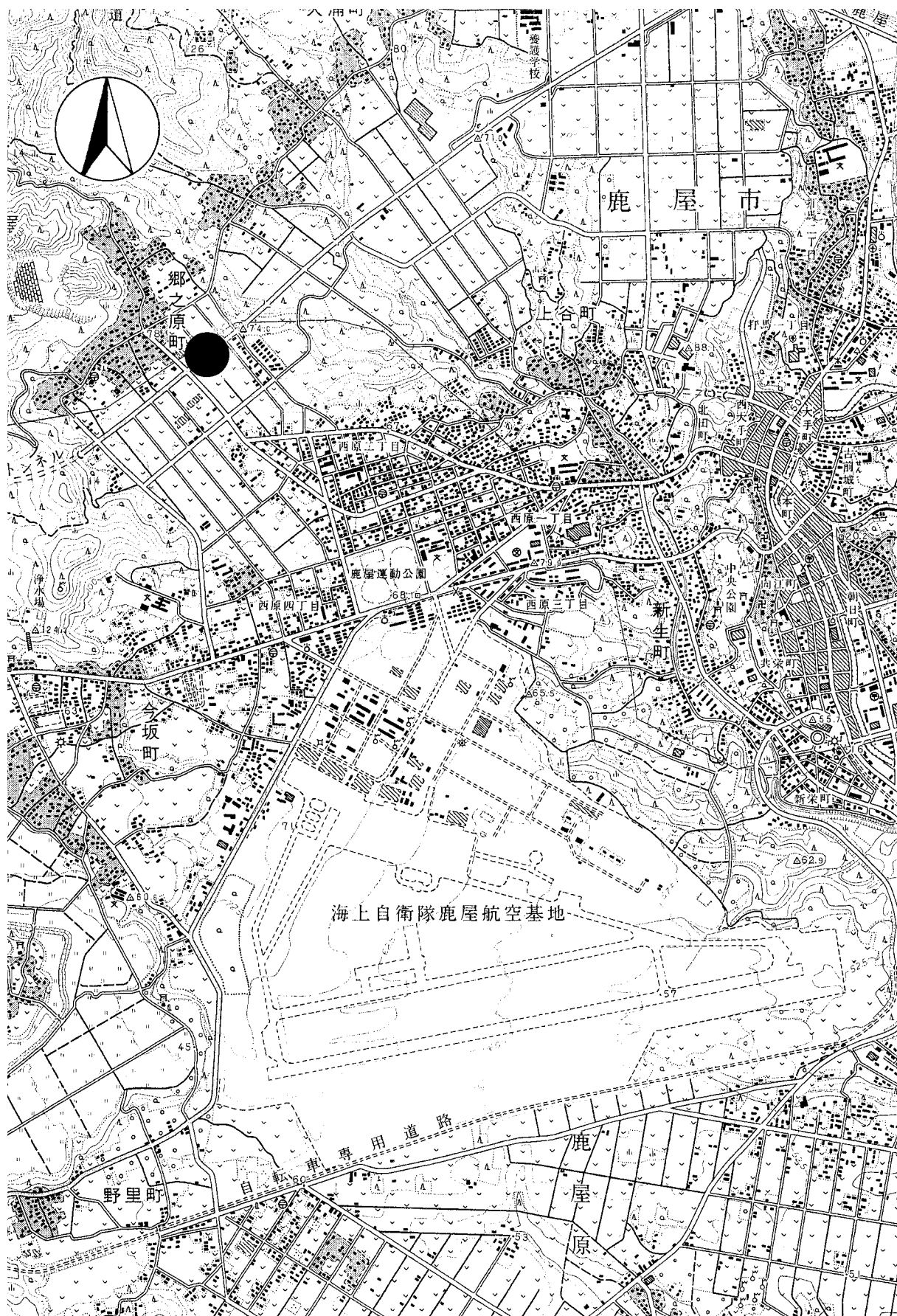
最後に、調査に当たりご協力いただいた、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会、関係各機関並びに発掘調査に参加された地元の皆様に対して厚く御礼申し上げます。

平成19年 2 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふ り が な	なかはらさんやいせき							
書 名	中原山野遺跡							
副 書 名	一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第114集							
編 著 者 名	吉井秀一郎・元田順子							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899 - 4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 0995 - 48 - 5811							
発行年月日	西暦2007年 2 月28日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		東 経	北 緯	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
なかはらさん や い せき 中原山野遺跡	か ご し ま け ん 鹿児島県 かの や し 鹿屋市 ごうのはらちょう 郷之原町	462039	12・178	130 ° 49 ' 36 "	31 ° 23 ' 19 "	本調査 20050509 ～ 20050808	1 ,060	一般国道220号 鹿屋バイパス 建設
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項	
中原山野遺跡	散布地	縄文時代前～中期 弥生時代中期後半 近代（戦跡）		掘立柱建物跡 土坑 誘導路跡 防空壕跡	貝殻条痕文土器 山ノ口式土器 打製石斧 銃弾・薬莢・鉄片 陶器・磁器		昭和62年6，7月 昭和62年10月～63年 1 月 昭和63年 1 月 昭和63年 4 月～63年 8 月 県教育委員会による発 掘調査の実施 平成 8 年 6 月 鹿屋市教育委員会によ る隣接地の発掘調査の実 施	
概 要	少量ながら縄文時代前～中期にかけての貝殻条痕文土器が出土した。弥生時代の掘立柱建物跡 1 棟と土坑 5 基が検出され、弥生時代中期後半と比定される山ノ口式土器が出土した。昭和62，63年度の調査では、同一層から花弁形住居が検出されている。 今回の調査でも、昭和62，63年度の調査と同様に、太平洋戦争中に使用された誘導路跡が検出され、新たに防空壕跡も検出された。							



第1図 遺跡位置図 (1:25000)

例 言

- 1 この報告書は，一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う中原山野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は，鹿児島県鹿屋市郷之原町字中原山野に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成は，国土交通省から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は，平成17年度に実施し，整理作業報告書作成は，平成17，18年度に実施した。
- 5 遺物番号は，通し番号とし，本文，挿図，表，図版の番号は一致する。
- 6 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）「中原山野遺跡」「西原掩体壕跡」に掲載されている遺構，及び遺物を再掲載するときには，番号の後に（中原山野遺跡）（西原掩体壕跡）と記すこととする。また，第11表～13表については，同報告書から引用した。
- 7 挿図の尺度は，各図面に示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は，海拔絶対高である。
- 9 発掘調査における図面作成及び写真作成は，調査担当者が行った。
- 10 出土遺物撮影については，吉岡康弘が行った。
- 11 「第29図 誘導路想像図」は，資料に基づいて，藤崎光洋が作成した。
- 12 本書の執筆・編集は，吉井秀一郎，元田順子が担当した。
- 13 出土した遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示，活用する予定である。
なお，中原山野遺跡の遺物注記の略号は「中原山野17」である。

目 次

第 章 発掘調査の経過	1
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査の組織	2
第 3 節 調査の経過	3
第 4 節 報告書作成業務の経過	5
第 5 節 発掘調査・報告書作成従事者	6
第 章 遺跡の位置と環境	9
第 1 節 地理的環境	9
第 2 節 歴史的環境	10
第 3 節 中原山野遺跡の層位	16
第 章 発掘調査の概要	18
第 1 節 調査の経過	18
第 2 節 発掘調査の方法	18
第 3 節 縄文時代の調査	25
1 調査の概要	25
2 土器	25
3 石器	26
第 4 節 弥生時代の調査	30
1 調査の概要	30
2 遺構	30
3 遺物	35
4 1号住居跡（中原山野）と出土遺物	37
第 5 節 近現代の調査	54
1 誘導路跡	54
2 溝状遺構と防空壕跡	54
3 出土遺物	58
第 章 まとめ	65
写真図版	71
あとがき	91

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図		第20図	1号住居跡出土遺物実測図(1)	45
第2図	肝属川流域の台地群	10	第21図	1号住居跡出土遺物実測図(2)	46
第3図	周辺遺跡位置図	13	第22図	1号住居跡出土遺物実測図(3)	47
第4図	遺跡土層断面図	16	第23図	1号住居跡出土遺物実測図(4)	48
第5図	地形とグリッド配置図	19・20	第24図	1号住居跡出土遺物実測図(5)	49
第6図	遺構配置図	21・22	第25図	1号住居跡出土遺物実測図(6)	50
第7図	土層断面図	23・24	第26図	誘導路跡と溝跡実測図	55
第8図	層遺物出土状況図	27	第27図	溝状遺構と防空壕跡配置図	56
第9図	層土器出土状況と土器実測図	28	第28図	防空壕跡実測図	57
第10図	層出土土器実測図	29	第29図	誘導路想像図	58
第11図	層出土石器実測図	29	第30図	薬莢の構造と弾丸	59
第12図	層遺構配置図と遺物出土状況図	31・32	第31図	薬莢・弾丸実測図	60
第13図	掘立柱建物跡実測図	33	第32図	鉄片実測図	60
第14図	土坑実測図	34	第33図	近現代の陶磁器類実測図	62
第15図	層出土土器実測図	38	第34図	西原掩体壕と誘導路配置図	63
第16図	層出土石器実測図	39	第35図	郷之原地区の軍隊配置図	
第17図	1号住居跡の遺物分布図	42		(昭和20年1月 原田盛雄氏作成)	64
第18図	1号住居跡の遺物出土状況図	43	第36図	肝属川流域の弥生時代の主な遺跡	67
第19図	1号住居跡実測図	44	第37図	大隅半島の主な戦争遺跡	69・70

表 目 次

第1表	鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査遺跡一覧表(1)	7	第9表	層出土土器観察表	40
第2表	鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査遺跡一覧表(2)	8	第10表	層出土石器観察表	40
第3表	周辺遺跡地名表(1)	14	第11表	1号住居跡出土土器観察表(1)	51
第4表	周辺遺跡地名表(2)	15	第12表	1号住居跡出土土器観察表(2)	52
第5表	層出土土器観察表	26	第13表	1号住居跡出土石器観察表	53
第6表	層出土石器観察表	26	第14表	肝属川流域の弥生時代の主な遺跡	66
第7表	掘立柱建物跡計測表	33	第15表	海軍鹿屋航空隊と海軍鹿屋航空基地 のあゆみ	68
第8表	土坑計測表	34	第16表	大隅半島の主な戦争遺跡	69・70

図 版 目 次

カラー図版1	出土遺物		写真図版9	誘導路跡礫敷部分(北から)	79
カラー図版2	郷之原地区航空写真			誘導路跡礫敷部分(南から)	
写真図版1	調査風景(平成17年度 東側から)	71	写真図版10	1号住居跡全景(中原山野遺跡)	80
	調査風景(昭和62年度 西側から)			誘導路跡・溝跡(中原山野遺跡)	
写真図版2	土層断面	72	写真図版11	貝殻条痕文土器(1)	81
	貝殻条痕文土器出土状況			貝殻条痕文土器(2)	
写真図版3	掘立柱建物跡検出状況	73	写真図版12	弥生土器	82
	柱穴(P1～P4)半裁状況		写真図版13	打製石斧・敲石	83
写真図版4	層遺物出土状況	74		薬莢・銃弾	
	打製石斧出土状況		写真図版14	鉄片	84
写真図版5	土坑検出状況	75		近現代の陶磁器類	
	土坑(1～4)半裁状況		写真図版15	1号住居出土遺物(1)	85
写真図版6	防空壕跡検出状況	76	写真図版16	1号住居出土遺物(2)	86
	防空壕跡完掘状況		写真図版17	1号住居出土遺物(3)	87
写真図版7	溝状遺構検出状況・薬莢出土状況	77	写真図版18	1号住居出土遺物(4)	88
	溝状遺構完掘状況(手前防空壕)		写真図版19	1号住居出土遺物(5)	89
写真図版8	誘導路跡・溝跡完掘状況	78	写真図版20	1号住居出土遺物(6)	90
	西側溝跡				
	東側溝跡				

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第１節 調査に至るまでの経過

昭和53年に、建設省九州地方建設局大隅国道工事事務所(以下大隅工事事務所、現：国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、以下大隅河川国道事務所)は、一般国道220号鹿屋バイパスの建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課(以下文化課、現：文化財課)に照会した。鹿児島県教育委員会は、これを受けて昭和54年11月に工事予定地内の遺跡分布調査を実施した。

その結果、笠ノ原から菰川地区については、王子遺跡をはじめ4遺跡が発見され、昭和56年度から昭和59年度にかけて鹿児島県教育委員会によって発掘調査が実施された。

大浦・郷之原地区については、昭和59年4月に第二次調査として分布調査を実施し、中原山野遺跡・前畑遺跡を含む7か所の遺物散布地を確認した。大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、大隅工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、当該地域内遺跡の範囲と性格を把握するために確認調査を実施することとし、文化課(現：文化財課)が、担当することとなった。

確認調査は、昭和60年4月22日から5月25日に実施され、その後昭和60年10月以降、本調査を実施することとなった。

確認調査が散布地点の遺跡の有無を確認するだけに留めていたので、本調査は、建設予定地内の遺跡の範囲を限定する調査(二次確認調査)を実施しながら全面調査に移るという方法で実施した。工事に長期間を要する橋梁部分などについては、その部分の本調査を先行して実施することとした。

鹿児島県教育委員会が実施した発掘調査の概要は、第1、第2表(鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧表(1)、(2))に示したとおりである。

中原山野遺跡は、昭和62年6月15日から7月14日、昭和62年10月19日から昭和63年1月26日に道路建設工事を施工する南側2車線部分についてのみ発掘調査を行い(以後、「前回の調査」と記す)、将来的に拡幅が予定されていた北側2車線部分(現在の緑地帯)については発掘調査が実施されなかった。

今回は、大隅河川国道事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づいて、中原山野遺跡と隣接する前畑遺跡(計4,900㎡)の、北側2車線の道路拡幅部分について、平成16年5月9日から平成16年10月28日まで、県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

中原山野遺跡(1,060㎡)については5月9日から8月8日まで発掘調査を実施した。

整理作業及び報告書作成作業は、平成17、18年度に県立埋蔵文化財センターで行った。

第2節 調査の組織

発掘調査・整理作業（平成17年度）

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	上今 常雄
調査企画者	"	次 長 兼 総 務 課 長	有川 昭人
"	"	次 長 兼 調 査 第 一 課 長	新東 晃一
"	"	調 査 第 二 課 長	立神 次郎
"	"	主任文化財主事兼調査第二課 第 二 調 査 係 長	牛ノ濱 修
"	"	主 任 文 化 財 主 事	繁昌 正幸
調査担当者	"	文 化 財 主 事	吉井秀一郎
"	"	"	元田 順子
事務担当者	"	主 幹 兼 総 務 係 長	平野 浩二
"	"	主 査	寄井田正秀

報告書作成（平成18年度）

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長（～7月31日）	上今 常雄
		（8月1日～）	宮原 景信
作成企画者	"	次 長 兼 総 務 課 長	有川 昭人
"	"	次長兼南の縄文調査室長	新東 晃一
"	"	調 査 第 二 課 長	立神 次郎
"	"	主任文化財主事兼調査第二課 第 二 調 査 係 長	牛ノ濱 修
"	"	主 任 文 化 財 主 事	宮田 栄二
作成担当者	"	文 化 財 主 事	吉井秀一郎
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総 務 係 長	寄井田正秀
"	"	主 査	蒲地 俊一
報告書作成検討委員会	平成18年11月8日	宮原所長以下9名	
報告書作成指導委員会	平成18年11月1日	新東次長以下3名	
企画担当者		前迫 亮一・高岡 和也	

第3節 調査の経過

昭和62年度に実施された前回の調査同様に，工事用センター杭№407と№410を基準に，10m × 10m間隔のグリッド網を設定し，C・D - 1～14区において全面調査を行った。

昭和62年度の調査時と調査環境が変わり，バイパス沿いに店舗や民家等が建設され，調査区が店舗等への進入路や市道で分断されていた。

また，今回の発掘調査の予定区域の中央に，バイパスに並行して排水溝が建設されていたので，撤去に時間を要した。また，進入路や市道の調査については，遺構や遺物の検出・出土状況から判断し，調査は行なわなかった。調査の経過は週毎に日誌抄で略述する。

5月9日

発掘作業開始（道具搬入，重機による表土剥ぎ）

5月10～13日

C - 7・8・12・13区	歩道側の一部表土剥ぎ
C - 8区	層の溝状遺構検出
C - 12区	層から土器出土

5月16日から20日

C - 7・8・12・13区	～ 層の掘り下げ
C - 12区	土層断面写真撮影
C - 13区	～ 層の土器等遺物の平板実測と取り上げ

5月23日～27日

C - 7・8区	～ 層の掘り下げ
	C - 12区の平板実測

5月26日から7月3日まで前畑遺跡の調査のため一時調査中止

7月6日より重機によるU字溝除去及び表土除去作業開始

7月11日～14日

中原山野全面調査開始

C - 8区	層の溝状遺構等精査・写真撮影・実測
D・C - 10区	表土除去，～ 層の掘り下げ
D・C - 11区	表土除去，～ 層の掘り下げ
	層の遺物取り上げ
D・C - 13区	～ 層上面まで掘り下げ
	，層の遺物出土，及びピット検出

D・C - 14区	～ 層の掘り下げ，遺物の取り上げ
7月19日～29日	
D・C - 3～5区	表土除去
C - 7・8区	層検出の防空壕，溝状遺構の写真撮影と実測
D・C - 10区	， 層の掘り下げ
	層の平板実測と遺物の取り上げ
D・C - 11・12区	層の遺物取り上げ
	層上面ピット検出と写真撮影
D・C - 13区	～ 層上面まで掘り下げ
	， 層から遺物出土
	層上面検出の掘立柱建物跡，写真撮影
D・C - 14区	～ 層の掘り下げ，平板実測・遺物取り上げ
D・C - 7～14区	調査区位置図作成
7月25日～28日	
D・C - 3～5区	c 層の戦跡遺構(誘導路)検出
	写真撮影，平断面実測
C - 8区	～ 層の掘り下げ
	c 層で竪穴状遺構検出
	写真撮影と実測
D・C - 10区	， 層の掘り下げと遺物平板実測，遺物取り上げ
D・C - 11区	層上面からピット検出，写真撮影・実測
	層の掘り下げ
D・C - 13区	層検出の掘立柱建物跡，精査
	層の掘り下げ
D・C - 14区	土層断面の実測
D・C - 3～5区	調査区位置図作成
8月1日～5日	
D・C - 3・4区	層以下の掘り下げ
	平板実測，遺物取り上げ
D・C - 7・8区	～ 層掘り下げ
	平板実測，遺物取り上げ
D・C - 11・12区	層，掘り下げ・土層断面写真撮影・実測
D・C - 13区	層掘り下げ平板実測・遺物取り上げ
	掘立柱建物跡，精査・写真撮影・実測

柱穴，断ち割り・写真撮影・実測

8月8日から11日

D・C - 11・13区

土層断面実測及び調査区終了状況写真撮影

第4節 報告書作成業務の経過

中原山野の発掘調査報告書作成業務は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成17年11月から平成18年11月まで行った。月ごとの作業工程は次に示すとおりである。

平成17年度

平成17年11月	遺物注記，遺物分類，遺物接合，図面整理
平成17年12月	遺物分類，遺物選別，遺構トレース
平成18年1月	土器実測，拓本
平成18年2月	土器実測，拓本，計測
平成18年3月	石器実測，土器トレース，写真撮影

平成18年度

平成18年4月	遺物実測，拓本，遺物復元，遺構・遺物トレース
平成18年5月	遺物実測，拓本，遺物復元，遺構・遺物トレース
平成18年6月	遺物実測，拓本，遺物復元，遺構・遺物トレース
平成18年7月	遺物実測，拓本，遺物復元，遺構・遺物トレース
平成18年8月	遺構・遺物トレース，原稿執筆
平成18年9月	遺構・遺物トレース，原稿執筆，写真撮影
平成18年10月	原稿執筆，トレース，レイアウト，写真撮影
平成18年11月	入札，文章校正
平成18年12月	校正
平成19年1月	校正，遺物・図面整理及び収納
平成19年2月	校正，遺物・図面整理及び収納

第5節 発掘調査と報告書作成業務の従事者

発掘調査従事者（平成17年度）

荒川リツ子	有村幸次	内田忠則	尾迫和幸	面高時紀
川井田祐子	川野喜興美	川原時夫	熊迫正弘	児島治
佐々木イツ子	芝原ツミ子	下村シヅ子	鈴木しまよ	武元正子
谷本一美	富松フキ	中塩屋貞夫	長濱邦弘	那須みづえ
西門純行	西ノ原ムツ	橋口スエ子	浜谷敬子	東孝二
東中ムツ子	久永六雄	比地黒美千代	前原百合子	松崎クミ子
宮田順子	八木聡	吉元春義	脇健一	

整理・報告書作成業務従事者（平成17年度）

児玉節子 後藤万里子 榮素子 大王美代子

整理・報告書作成業務従事者（平成18年度）

岩下亮子 小園裕子 児玉さつ子 西村律子 野間尚美



整理・報告書作成業務従事者（平成18年度）

第1表 鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	所在地 標高(m)	調査面積 (㎡)	調査期間	調査員	時代	概要	巻次
1	王子	鹿屋市王子町 (72m)	12,000	確認 S56.12 全面 S56.12 ~ S59.3	立神・中村(耕) 出口・立神・峯崎・ 山口・日高	縄文 弥生(中期後葉 ~後期初頭)	集石、石坂式土器 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構 山ノ口式土器(甕・壺・鉢)、磨製石鏃・樹皮製叩石・砥石・土製勾玉・ 刀子・鉄滓 ※県教育委員会1985「王子遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』34	
2	西葦川	鹿屋市西葦川町	160	1次 S57.8~9 2次 S58.8~9	長野 長野	縄文 古墳 中世	集石、前平式土器 高坏・埴・成川式土器 白磁碗・青磁片・土師器皿 ※県教育委員会1985「西葦川遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』34	
3	薬師堂	鹿屋市西葦川町	100	全面 S58.8	立神・山口	古墳	成川式土器(壺・高坏) ※県教育委員会1985「薬師堂遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』34	
4	榎田下	鹿屋市大浦町		全面 S61.5~6	新東・前迫・上田	縄文	甕式・曾畑式・指宿式・市来式・石鏃・石斧・磨石・石皿 ※県教育委員会1989「榎田下遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』48	
5	中ノ原	鹿屋市大浦町 (約70m)		確認 S60.4~5 全面 S61.6~7 S61.10 ~ S63.1	新東・井上・宮田 新東・前迫・上田 新東・前迫・上田	縄文 弥生(中期末~ 後期初頭) 中世~近世	竪穴住居跡・集石・土坑、石坂式・甕式・曾畑式・指宿式・納曽式・南 福寺式・入佐式・石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・磨石 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・古道・溝状遺構、山ノ口式土器(甕・壺・ 鉢)・土師器坏 ※県教育委員会1989「中ノ原遺跡(I)」『県埋蔵文化財発掘報告書』48 ※県教育委員会1990「中ノ原遺跡(II)」『県埋蔵文化財発掘報告書』52	
6	中ノ丸	鹿屋市大浦町 (約70m)		確認 S60.4~5 全面 S61.2~3 S61.7~10	新東・井上・宮田 新東・前迫 新東・前迫・上田	縄文 弥生(中期末~ 後期初頭) 中世~近世	甕式・曾畑式・指宿式・市来式・石鏃・石斧・磨石・石皿 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝・土坑・溝状遺構、山ノ口式・砥 石・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・古道、須恵器・土師器・青磁 ※県教育委員会1989「中ノ丸遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』48	
7	川ノ上	鹿屋市大浦町		全面 S61.9~10	新東・河野	中世	供養塚2 ※県教育委員会1989「川ノ上遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』48	
8	中原山野	鹿屋市郷之原町 (約70m)		確認 S60.4~5 全面 S62.6~7 S62.10 ~ S63.1	新東・井上・宮田 新東・前迫 新東・前迫	縄文 弥生(中期終 末期) 近代	集石、下剥峯式・平椅式・スクレイパー・磨石・台石 竪穴住居跡、山ノ口式土器(大甕・甕・壺・鉢・台付鉢)・砥石 戦跡遺構(掩体壕跡・誘導路跡) ※県教育委員会1990「中原山野遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』52	

第2表 鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	所在地 標高(m)	調査面積 (㎡)	調査期間	調査員	時代	概要	巻次
9	前畑	鹿屋市郷之原町 (約70m)		確認 全面 S60 4～5 S62 6 ～ S63 3 S63 4～9	新東・井上・宮田 新東・前迫 新東・梅北・中村・ 八木澤	縄文 弥生(中期後 半終末期) 近世 近代	集石、石坂式・押型文・平府式・塞ノ神式・石鏃・石匙・石斧・石皿 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝・溝状遺構、山ノ口式・須久 式・磨製石鏃・打製石鏃・砥石・台石 近世墓、古銭・鉛玉・ガラス玉 戦跡遺構(掩体壕跡・誘導路跡) ※県教育委員会1990「前畑遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』52	
10	飯盛ヶ岡	鹿屋市上野町 (107m)		確認 全面 S62 9～10 H元 4 ～ H2 3	牛ノ濱・旭	縄文 弥生(中期末) 古代	集石・土坑、石坂式・平府式・塞ノ神式・春日式・市来式・石匙・管玉 竪穴住居跡、山ノ口式土器・磨製石鏃 土師器 ※埋文センター 1993「飯盛ヶ岡遺跡」『県埋文センター発掘報告書』3	
11	榎崎A	鹿屋市郷之原町		確認 全面 S62 9～10 S63 5 ～ H元 3	旭・牛ノ濱 旭・八木澤・梅北・ 中村(和)	旧石器 縄文 弥生 古墳 古代	礫群、細石刃・細石刃核・削器・搔器・楔形石器 集石、前平式・石坂式・桑ノ丸式・下剥峯式・押型文・塞ノ神式・曽畑式 下城式土器 溝状遺構、成川式土器 周溝墓・掘立柱建物跡・土坑、須恵器・土師器・滑石製品・焼塩壺・砥石 ※県教育委員会1992「榎崎A遺跡」『県埋蔵文化財発掘調査報告書』63	
12	榎崎B	鹿屋市郷之原町		確認 全面 S62 9～10 H2 4 ～ H3 3 H3 4～6	牛ノ濱・旭 青崎・宮田・ 大久保・関・藤崎・ 熊崎・青崎・宮田・ 吉内	旧石器 縄文 古墳 古代	礫群・ビット、細石刃核・細石刃・磨製石斧・削器 集石・土坑、塞ノ神式・石鏃・石斧・黒川式土器・磨石・石皿 竪穴住居跡、成川式土器 掘立柱建物跡・溝状遺構、須恵器・土師器・刀子・土錘 ※埋文センター 1993「榎崎B遺跡」『県埋文センター発掘報告書』4	
13	西丸尾	鹿屋市白水町	6,000 (2,000)	確認 全面 H元 H2 5 ～ H3 1	中村(耕) 宮田・関・藤崎	旧石器 縄文	礫群、ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器・尖頭器・削器・彫器・磨 石・敲石・細石刃・細石刃核 配石遺構・集石、前平式・塞ノ神式土器・石鏃 ※県教育委員会1992「西丸尾遺跡」『県埋蔵文化財発掘調査報告書』64	
14	西丸尾B	鹿屋市白水町	2,000	確認 全面 H3 3年度 H4 6～7	青崎・児玉 鶴田・湯之前・ 熊崎	旧石器 縄文 古墳	土坑、剥片 集石、前平式・石坂式土器・石皿・石斧 成川式土器 ※埋文センター 1994「西丸尾B遺跡」『県埋文センター発掘報告書』9	

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鹿屋市は九州南東部の大隅半島の中央部に位置し、古来より交通の要所として半島の政治、経済、文化の中心的役割を担ってきた。昭和16年から市政を施行していたが、平成18年1月に、輝北町、串良町、吾平町と合併し、人口が10.6万人の都市となった。

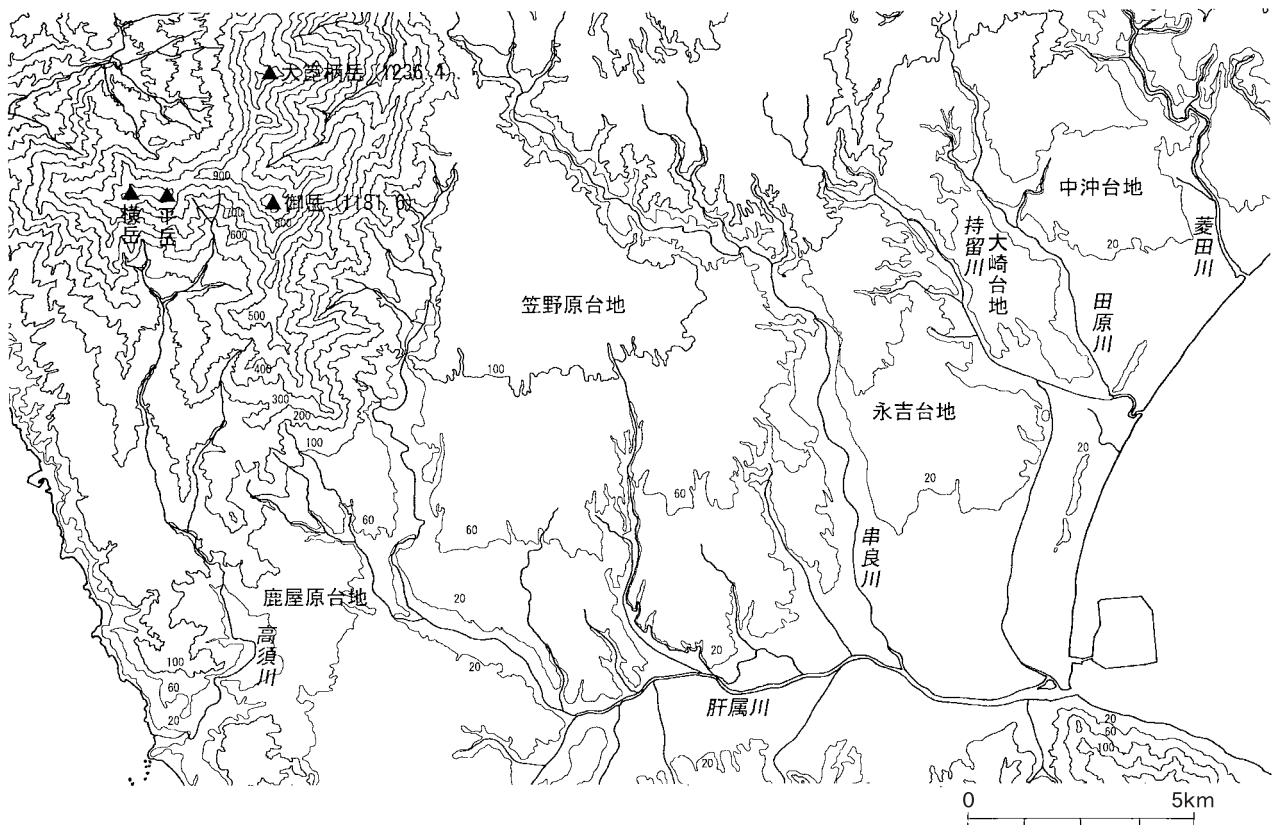
市街地の北部に高隈山系がそびえ、大^{おお}籠^の柄^{がら}岳(1,236m)を主峰に横岳、御岳など1,000m級の山系が連なっている。中原山野遺跡は鹿屋市郷之原町に所在し、高隈山系より錦江湾へと流れる高須川と、太平洋に注ぐ肝属川の支流に挟まれた標高約70mの平坦なシラス台地上に立地する。

鹿屋市の地質は、四万十層群とそれに貫流する高隈山花崗岩等で構成される。花崗岩の周囲の堆積岩は熱変成を受けてホルンフェルス化している。小規模な鉱床が小薄町から郷之原町にかけて多数形成されており、そのいくつかは銅山として実際に稼働されていた記録も残る。高隈山地山麓は急峻で深い森林に覆われているが、東部から北部にかけては、入戸火砕流堆積物による標高約50～170mのシラス台地が広がっている。シラス台地は、鹿児島県本土全域および宮崎県南部・熊本県南部の広い地域にシラスと呼ばれる白色の軽石混じりの火山噴出物が堆積して形成された台地で、その中でも特に大規模なものは鹿児島湾奥北部にある溝辺台地と、鹿児島市西部から伊集院にかけての台地、および大隅半島中央部の本地域の台地群である。

また、遺跡の北西部には高隈山系の端部がせり出しており、台地上は北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。この台地は内部を貫流する河川により大小いくつかに区分することができる。大田・河内(1965)は、鹿屋市街地を流れる肝属川以西の台地を鹿屋原台地、肝属川と串良川に挟まれる台地を笠野原台地、串良川以東の台地を野方台地としたが、米谷清二(1971)は串良川と持留川に挟まれる台地を永吉台地、持留川と田原川に挟まれる台地を大崎台地とし、この他の台地もあわせて大隅中央台地群とした。

この区分によれば、本遺跡は鹿屋原台地に位置する。この台地は鹿屋市街地の西部から南部に位置し、北側の郷之原から海上自衛隊基地のある野里を経て南側の大始良にかけて広がり、面積は約24km²である。郷之原付近の海拔は約70m、大始良付近の海拔は約50mで、全体として北から南に傾いているが、その平均傾斜は1%程度できわめて平坦となっている。しかし、地域住民によると、郷之原町が、現在のような平坦地の続く地形になったのは、戦前の鹿屋航空基地関連施設の建設や、戦後の土地整備基盤事業等に伴う造成によるもので、それ以前は2～3mの起伏が連続した地形であったという。

また、高隈山地を源流に、花里町、上野町、高須町を流れ、鹿児島湾(錦江湾)に注ぐ高須川までは、直線距離で約1.5km、同じく高隈山地を源流に、鹿屋市、肝付町、東串良町を流れ、志布志湾に注ぐ肝属川支流までは、直線距離で約0.5kmと近く、水に恵まれた場所に位置しているといえる。



第2図 肝属川流域の台地群

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

西丸尾遺跡ではナイフ形石器文化期の礫群や尖頭器などの遺構・遺物が検出されている。また、榎崎B遺跡では台形石器やナイフ形石器が出土した。両遺跡は細石刃文化期の遺構・遺物も検出されているが、榎崎A遺跡，中野西遺跡にも同文化期の遺構・遺物が検出されている。また笠野原台地縁辺部でも木屋堀遺跡で黒曜石製のチップが出土している。

2 縄文時代

草創期の遺跡としては南町の伊敷遺跡が著名である。薩摩火山灰の下部より，隆帯文土器と石斧が検出された。また上楠原遺跡では貝殻による施文のある土器および無文土器が出土し，西丸尾遺跡でも遺構・遺物が検出されている。また，山ノ上B遺跡ではサツマ層直下で逆茂木痕のある落とし穴が，中野西遺跡では無紋土器が出土している。

早期になると，中野西遺跡で口唇部外縁に貝殻頂部による押圧文を施した岩本式土器に類似する土器が出土している。また榎崎遺跡，西丸尾遺跡，上楠原遺跡では前平式土器，手向山式に類似する押型文土器，塞ノ神式土器と集石が出土している。岡泉遺跡では前平式土器と山形押型文が，岩之上遺跡と野里小西遺跡で石坂式・吉田式土器と集石6基が出土している。打馬平原遺跡では土坑6基，集石27基と石坂式・吉田式・前平式・塞ノ神式・押型文土器や環状石斧等各種の石器が出土している。谷平遺跡では，集石2基，土坑1基，石坂式土器のほか各種

の土器が出土している。前畑遺跡では多くの集石遺構とともに平栴式土器と塞ノ神式土器・押型文土器が出土したが、平栴式土器の壺形土器が検出されている。また谷平遺跡や松の岡遺跡では桑ノ丸式土器・辻タイプ・下剥峰式土器等の早期中葉の土器が出土している。笠野原台地縁辺部でも、石仏頭遺跡で吉田式土器と平栴式土器が出土している。このように早期の資料が豊富である。

前期の遺物が出土した遺跡としては、神野牧遺跡、榎田下遺跡、中ノ原遺跡、榎木原遺跡、中野西遺跡、松山田西遺跡があげられる。それぞれに集石、曽畑式土器、轟式系統の土器が出土している。

中期に該当する遺跡は、榎木原遺跡、飯盛ヶ岡遺跡で春日式土器と阿高式土器が、神野牧遺跡で深浦式土器が、中野西遺跡と松山田西遺跡では春日式土器と船本式土器が出土している。

後期になると、榎田下遺跡で市来式土器が、中ノ原遺跡で指宿式、市来式、西平式土器が、榎木原遺跡では岩崎上層式土器、市来式土器等が出土している。また鎮守ヶ迫遺跡では指宿式土器が出土している。柴立・小薄遺跡でも後期の遺物が報告されている。また山之頭迫遺跡では同時期と思われる古道が検出されている。

晩期の遺跡が出土した遺跡としては、神祓川遺跡群の丸岡・水ノ谷・宮の脇遺跡、榎木原遺跡、中ノ原遺跡、中原山野遺跡、松山田西遺跡等があげられる。水ノ谷遺跡では上加世田式土器の時期に比定される6基の円形竪穴住居跡や黒川式土器に伴う孔列文土器など多くの石器・土器が報告されている。また、榎木原遺跡、立神遺跡で入佐式土器・黒川式土器を、中ノ原遺跡では入佐式土器を中心として晩期の遺物が出土している。また谷平遺跡では突帯文系土器が出土している。

上記のとおり、鹿屋市には縄文時代の遺跡が多数存在している。

3 弥生時代

榎木原遺跡や、上祓川遺跡群の1つである水ノ谷遺跡からは、前期から中期にかけての土器が出土している。榎木原遺跡では、西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯を持つ壺などが出土し、大隅半島における、他の地域との交流を考えるうえでの貴重な資料といえる。王子遺跡は、中期末から後期初頭の竪穴住居跡が27基検出された集落跡である。同じ台地上の縁辺部にあたる石仏頭遺跡でも竪穴住居跡と柱穴が検出されている。また近隣の大浦、郷之原台地上の中ノ原遺跡や前畑遺跡でも同時代の遺構・遺物が検出され、中ノ丸遺跡では円形周溝跡が検出されている。下牧遺跡では前期と中期～後期の遺物が大量に出土している。高付遺跡では中期から古墳時代にかけての河内・瀬戸・東九州地方の影響をうかがわせる資料が出土している。

4 古墳時代

大隅半島の志布志湾沿岸や肝属川流域は、高塚古墳や地下式横穴墓が多数確認されており、東串良町の唐仁古墳群だけでも、前方後円墳5基、円墳134基を数える。鹿屋市では、中野西遺跡で、土壇墓2基が検出され、短刀と鉄鏃が出土している。

また、小野原A遺跡では竪穴住居跡が検出されて、松山田西遺跡では竈のある竪穴住居跡が検出されている。そのほか小野原A遺跡では古墳時代の古道が検出されている。

5 古代

日本書紀によると和銅3年(710年)に日向国の隼人、曾君細麻呂に外従五位下を授けるとの記録があり、さらに和銅6年(713年)大隅国が設置される。養老4年(720年)に隼人の叛乱があり、また天平12年(740年)に藤原広嗣の乱にも隼人が参加しているが、このような数度の抵抗を経ながら、やがて大隅地方を含む南九州は律令政治に組み込まれていく。

平安時代の遺物が出土した遺跡として、飯盛ヶ岡遺跡、榎崎A・B遺跡、宮の脇遺跡等がある。宮の脇遺跡では、青銅製の帯金具が出土し、古代官位制を示す貴重な資料として注目される。立神遺跡では墨書土器が数点出土している。

6 中世

中世の大隅半島では、肝付氏やその一族、祢寝氏、富山氏、大始良氏、平岡氏等が割拠していた。下大隅郡・鹿屋院・串良院・肝付郡・祢寝院・吾平荘等に分かれていたが、天正年間までに島津氏によって統一されている。現在の鹿屋市の中央部に位置していた鹿屋院は、肝付一族の萩原氏、続いて同じく肝付一族の鹿屋氏が治めていた。

鹿屋市内には、鷹栖城跡、亀鶴城跡、大始良城跡、横山城跡、獅子目城跡、西俣城跡、松尾城跡などの山城跡が残る。

7 近世

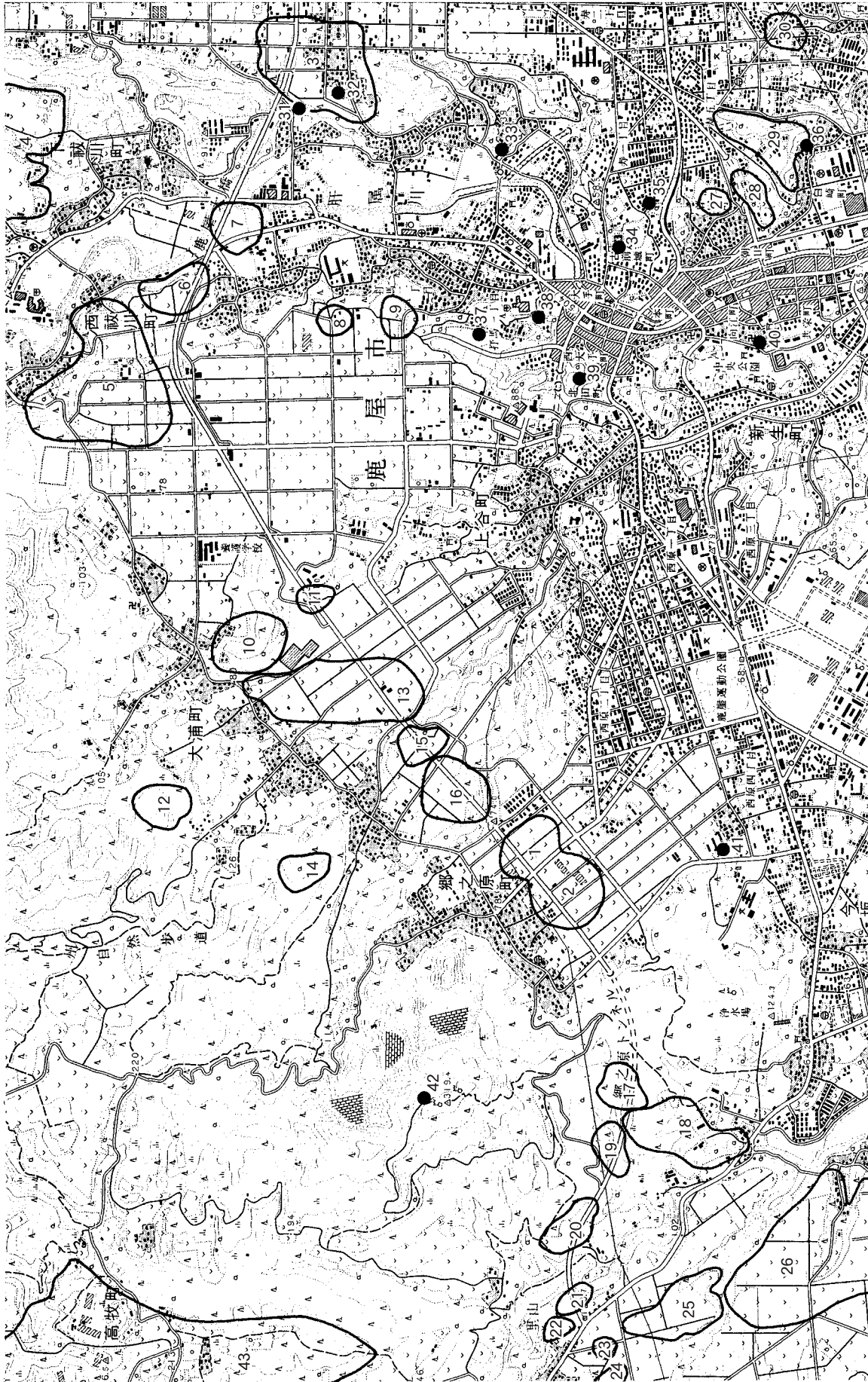
薩摩藩では、藩内を城下(内城 鹿児島)と外城に分けて配置し、城下に居住している武士を城下士、または家中と呼び、地方の外城に居住する武士を外城衆中(のちに郷士)と呼んでいた。郷士は、農業に従事していた。

中原山野遺跡周辺の旧鹿屋市内には、花岡郷、鹿屋郷、高隈郷、大始良郷が設けられていた。

花岡郷には「一所持」の家格の花岡島津家が置かれ、一郷を領地として治めていたが、他の郷には、それぞれ地頭が置かれていた。しかし、ほとんどの地頭は鹿児島に居住し藩の役目を務めており、任地には地頭代を置いていた。

8 近代

昭和16年に鹿屋町、大始良村、花岡村、高隈村が合併し、鹿屋市が発足した。鹿屋市には、南九州最大の海軍鹿屋航空基地が置かれ、多くの特攻機が出撃した。前回の調査では掩体壕跡、誘導路跡、溝跡などの戦跡遺構が検出されている。



第3図 周辺遺跡位置図 (1 : 25000)

第3表 周辺遺跡地名表(1)

番号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	時 代	主 な 遺 構 ・ 遺 物	備 考	データベース番号
1	中原山野	鹿屋市郷之原町中原山野	台地	縄文（早・晩）、弥生、古墳、近代（戦跡）	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、山ノ口式	県埋文報 52）、市埋文報 45）	12・128・0
2	前畑	” 郷之原町前畑	台地	縄文、弥生、古墳、近世、近代（戦跡）	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、平桁式、山ノ口式	県埋文報 52）、市埋文報 18）25）36）	12・129・0
3	王子	” 王子町王子	台地	縄文、弥生（中）	弥生中期集落跡、山ノ口式	県埋文報 13）34）、市埋文報 29）48）67）	12・25・0
4	堀之牧遺跡群	” 被川町堀之牧	台地	弥生（中）、古墳		県埋文報 23）	12・60・0
5	神野牧	” 西桜川町神野牧	台地	縄文、弥生	石器、石匙、土器片	県埋文報 20）23）、市埋文報 14）	12・35・0
6	薬師堂の古墳	” 下中原前	台地	弥生（後）、古墳	円墳 3 基	別名「薬師堂」 県埋文報 34）	12・90・0
7	西桜川	” 西桜川町	低地	縄文、弥生、古墳、歴史	土器片	県埋文報 25）34）、市埋文報 23）	12・65・0
8	打馬	” 打馬町	台地	古墳	土器片	県埋文報 23）	12・36・0
9	平原古墳	” 打馬町平原	台地	古墳	墓石 5 基、五輪塔 1 基	県埋文報 23）	12・37・0
10	大浦	” 大浦町	台地	縄文	地下式横穴、縄文土器	県埋文報 23）48）、市埋文報 16）	12・38・0
11	榎田下	” 大浦町榎田下	台地	縄文（早・後）	集石、竈式、曽畑式、阿高式、市来式、石籬	県埋文報 48）	12・125・0
12	耳取ヶ丘	” 大浦町耳取ヶ丘	傾斜地			県埋文報、市埋文報	12・92・0
13	中ノ原	” 大浦町中ノ原	台地	縄文、弥生、古墳	竪穴住居跡、石坂式、竈式、山ノ口式	県埋文報 48）51）52）102）、市埋文報 34）35）46）	12・126・0
14	郷之原	” 郷之原町	山麓	縄文、古墳	土器片、石器	県埋文報 23）	12・39・0
15	中ノ丸	” 大浦町中ノ丸	台地	縄文、弥生、歴史	竪穴住居跡、円形周溝、市来式、山ノ口式	県埋文報 48）102）	12・127・0
16	川ノ上	” 大浦町松橋川の上	独立丘陵	古墳	土器片	県埋文報 23）48）	12・40・0
17	飯盛ヶ丘	” 上野町飯盛ヶ丘	台地	縄文、弥生、古墳、近世、古代	竪穴住居跡、集石、石坂式、平桁式、塞ノ神式	県埋文報 63）、県センター埋文報 3）	12・130・0
18	高橋	” 上野町	傾斜地	弥生、古墳	土器片	県埋文報 25）	12・77・0
19	榎崎 A	” 郷之原町榎崎	台地	旧石器、縄文、弥生、古墳、歴史	周溝墓、前平式、石坂式、押型文、須恵器	県埋文報 63）	12・131・0
20	榎崎 B	” 郷之原町榎崎	台地	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代	前平式、ナイフ形石器、打製石斧、墨書土器	県埋文報 63）、県センター埋文報 4）、市埋文報 33）	12・132・0
21	西丸尾	” 白水町西丸尾	台地	旧石器、縄文、古墳、古代	礫群、配石遺構、集石、前平式	県埋文報 64）	12・133・0
22	西丸尾 B	” 白水町西丸尾	台地	旧石器、縄文、古墳、古代		県センター埋文報 9）	12・178・0

第4表 周辺遺跡地名表(2)

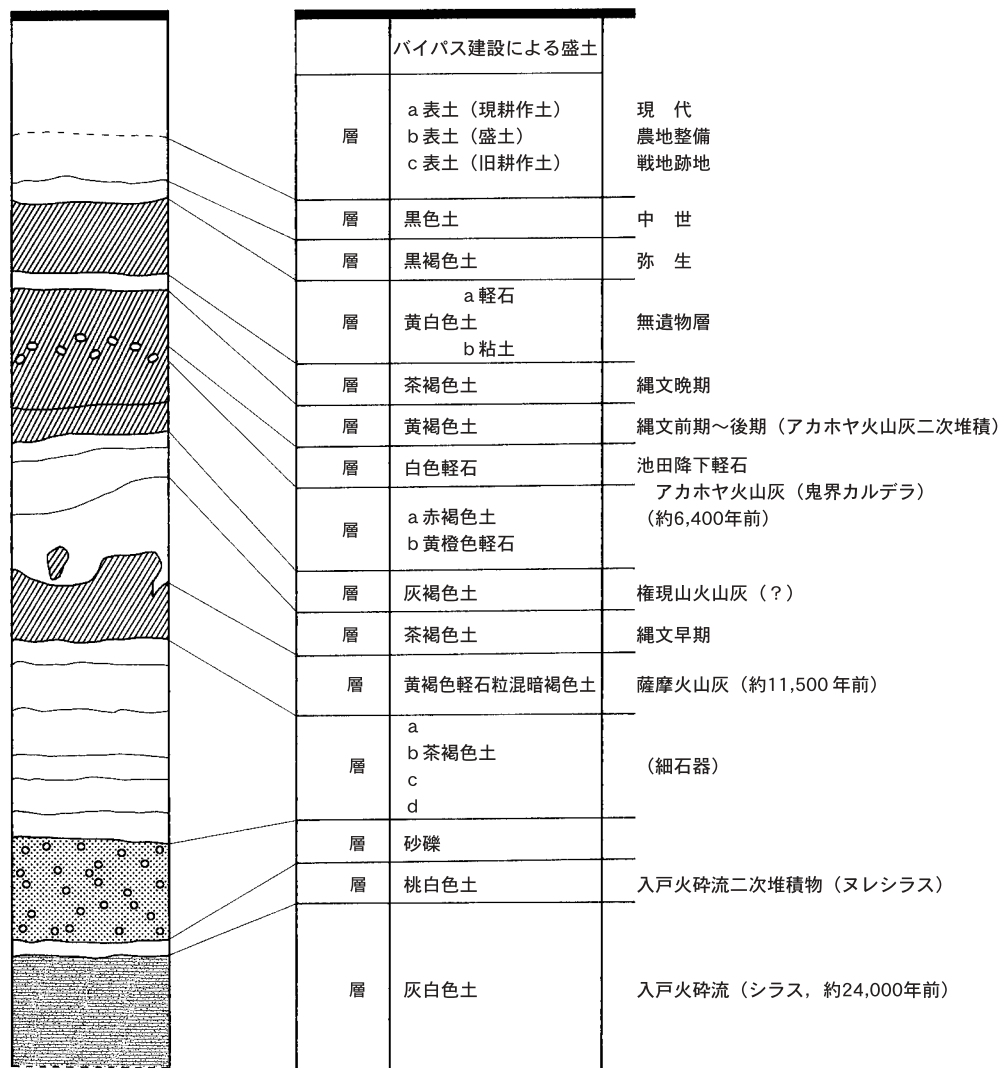
番号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	時 代	主な遺構・遺物	備 考	データベース番号
23	白水 A	鹿屋市白水町	台地	古墳，歴史	土師器，成川式		12・135・0
24	萩ヶ峰 A	〃 白水町	台地	古墳，歴史	土師器，成川式		12・136・0
25	小野原 B	〃 小野原町	台地	古墳，歴史			12・171・0
26	小野原 A	〃 小野原町	台地	縄文，弥生，古墳，歴史	土器片	県埋文報(25)，市埋文報(61⅓65⅓68⅓70)	12・76・0
27	曾田 A	〃 曾田町	台地	古墳		県埋文報(23)	12・66・0
28	曾田 B	〃 曾田町	台地	古墳	土器片	県埋文報(23)	12・67・0
29	白崎	〃 白崎町	台地	古墳	土器片	県埋文報(23)	12・68・0
30	寿六丁目	〃 寿六丁目	台地	古墳	土器片	県埋文報(24)	12・69・0
31	天神社跡	〃 王子町		不詳			12・239・0
32	八幡神社跡	〃 王子町		不詳		「鹿屋市史」	12・223・0
33	鹿屋元城跡	〃 王子町山中	台地	中世(鎌倉～南北朝)		県埋文報(43)	12・176・0
34	古前城跡	〃 古前城町	台地	中世(鎌倉中～南北朝)		県埋文報(43)	12・95・0
35	住吉神社跡	〃 古前城町		不詳		「鹿屋市史」	12・224・0
36	白崎城跡	〃 白崎町	台地	中世(南北朝～戦国)		県埋文報(43)	12・96・0
37	打馬平原	〃 打馬町平原	台地	縄文(早・前)，近世		市埋文報(8)，土地造成のため消滅	12・166・0
38	豊岳山医王院富岡寺跡	〃 打馬町		不詳		「鹿屋市史」	12・184・0
39	鹿屋城跡	〃 北田町	台地	弥生，古墳，歴史		県埋文報(43)，市埋文報(50⅓54⅓57)	12・93・0
40	池上山安養寺跡	〃 向江町		近世(安土桃山)(1597)		「鹿屋市史」	12・185・0
41	久慈城跡	〃 西原四丁目	丘陵	中世(南北朝初～戦国)		県埋文報(43)	12・97・0
42	世井神社跡	〃 郷之原町		創建天文23年(1554)		「鹿屋市史」	12・225・0
43	小薄町遺跡群 (有武・小薄)	〃 小薄町，有武町，高牧町	丘陵	縄文(早・前・後)，古墳		県埋文報(23)	12・41・0

第3節 中原山野遺跡の層位

層位は、前回の調査と同じ層区分を使用した。調査区はほぼ平坦で、郷之原台地の中心に位置している。戦前の鹿屋航空基地関連施設や戦後の土地整備基盤事業等により、広い範囲で層まで削平を受けている。

また、調査により層面は、4 m程度の標高差で緩やかな丘と谷が繰り返す起伏に富む地形であったことがわかった。そのうち2区から7区にかけては、丘陵部にあたるため層アカホヤ上面まで削平をうけている。一方、9区から13区は谷にあたるため、層が1.2m以上堆積している。層序は層から層(シラス)まで第4図のように区分できる。

層は、灰褐色腐植土だが近世・近代・戦後の3つに大別できる。2区から4区にかけては誘導路のため、戦後の盛土しかみられないが、9区から14区にかけては良好に堆積している。



第4図 遺跡土層断面図

b層は、盛土の他砂利やコンクリート塊の層がみられ、農地整備事業時のものである。 c層からは鉄片や薬莢・統制食器等が出土した。

層は、古代～中世と思われる、わずかに光沢のある黒色土で白色の軽石を含む。約20cmから50cmの厚さで堆積しているが無遺物層である。

層は、含水率の高い軟らかい黒色土である。地形の起伏によって約20cm～40cmの厚さで堆積している。

層は、直径約5cm程度の淡黄褐色軽石層で、起伏の底にあたる9区から11区には最大厚40cm程度で堆積しているが、12～14区では、層と層の間に10cm程度の褐色土層として確認できる程度である。

層は、茶褐色土で約20cm堆積し、下部は下層のアカホヤの影響を受ける。層と層が弥生時代遺物包含層である。層は茶褐色土で強く締まったアカホヤの二次堆積層である。中原山野遺跡では、下層に層にあたる池田降下軽石が浮遊した状態で堆積している。

a層は、赤褐色土層でアカホヤ二次堆積層である。

b層は、黄橙色軽石層で、アカホヤ・幸屋火砕流などと呼ばれる火山灰（約6,400年前）の一次堆積物とみられる。

層は、権現山火山灰層とされているが、今回の調査区内から検出されなかった。

層は、茶褐色粘質土である。前回の調査では縄文時代早期後葉の遺物が出土している。

層は、白い直径1mm程度の白色の粒を含む強く締まった黒褐色土に、黄色軽石が混じる層である。軽石は薩摩火山灰（約11,500年前）に伴うものである。

層は、暗茶褐色粘質土である。

層は、黄味を帯びた白色の砂礫層である。

層は、桃白色の二次シラス（ヌレシラス）である。層はシラスである。

～層は、入戸火砕流堆積物（約24,000年前）である。

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第１節 調査の経過

中原山野遺跡は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴って、昭和62年度に県教育委員会が発掘調査を実施した。また、供用開始後の平成8年に周辺の店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を鹿屋市教育委員会が実施した。

これらの発掘調査については、『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52) 一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書()』『中原山野遺跡』『西原掩体壕』、『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(45)』『中原山野遺跡』で報告されている。

今回の発掘調査は、バイパス拡幅工事に伴う中原山野遺跡北側の拡幅予定部分で行った、発掘調査である。

第２節 発掘調査の方法

１ グリッド設定及び調査範囲

グリッドの設定は、前回の調査との継続性を損なわないため、前回の調査時にグリッド設定の基準として用いた工事用センター杭を、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所が復元した。

前回の調査同様に、復元した工事用センター杭、№407と№410を基準にして、10m×10m間隔のグリッド網を設定し、C・D - 1～14区において発掘調査を行った。

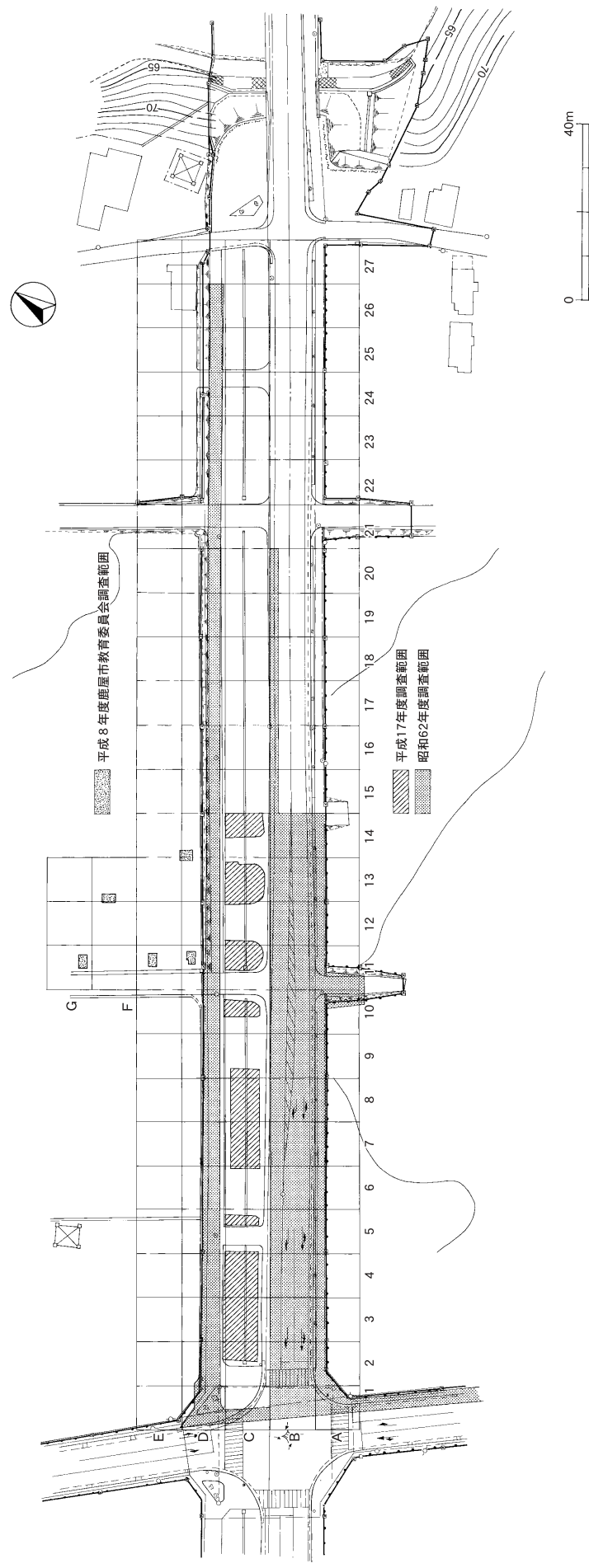
前回の調査時とは異なり、現在はバイパス沿いに店舗等が建設され、店舗や宅地への進入路、市道、情報ボックス等で、調査区が分断されている。また、調査区内には、供用しているバイパスに並行して、排水用の溝が設置され、植栽も植え込まれていた。排水用の溝や植栽を撤去しながら調査を行ったが、進入路や市道部分の調査については、遺構の検出と遺物の出土状況をふまえて協議を行うこととした。今回については、進入路や市道にかかる遺構が検出されなかったため、進入路部分の調査は行われなかった。

２ 調査の方法

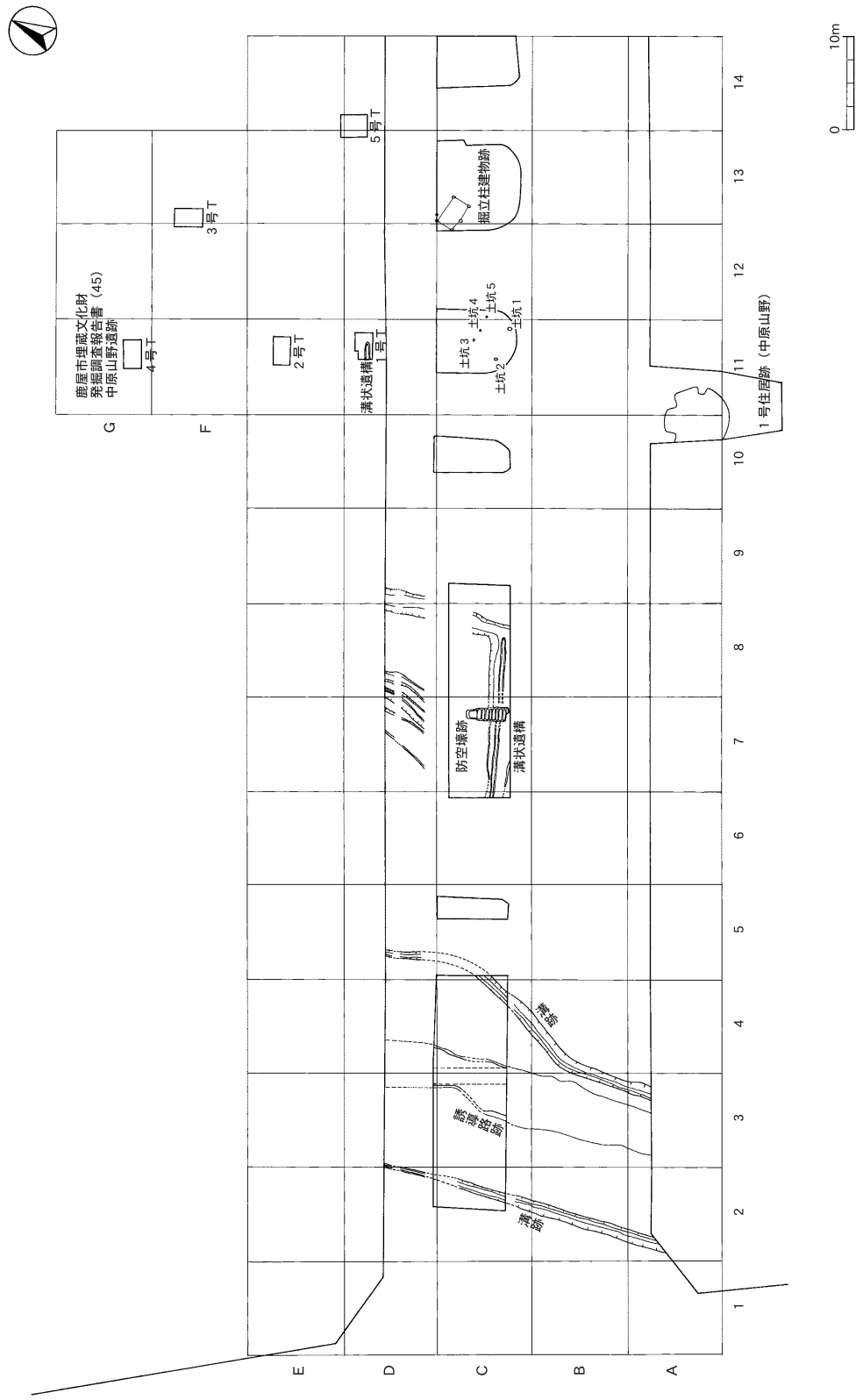
重機(バックホー)で緑地帯となっていた部分の盛土、及び旧表土を除去した後、人力(山鍬・ジョレン・ねじり鎌・移植コテ等)で調査した。

排出土は、調査範囲が狭いため、進入路や市道で分断されている調査区ごとに排出土仮置き場を設けた。そして、バックホーでダンプにすくい上げて、排出土置き場に運搬する方法をとった。

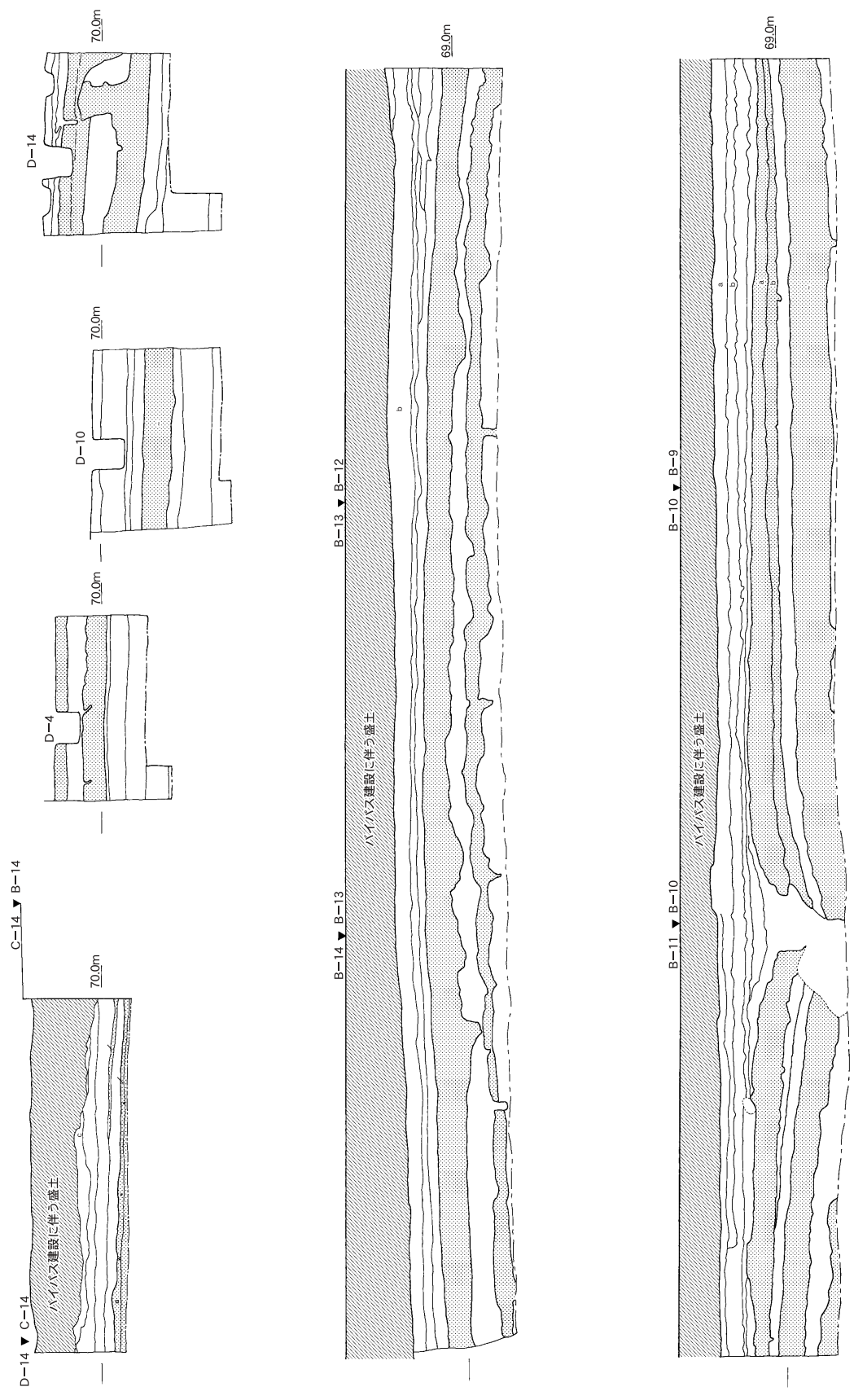
また、調査区が交通量の多いバイパスに隣接しているために、安全対策としてバイパス側にガードレールを設置した。さらに、跳ね石防止と乗用車の突入防止策として、路面からガードレールの隙間を塞ぐ高さまで土嚢を積み上げた。調査区内の歩道は通学路であるので、調査区の周りに丸太杭を打ち込み、標式ロープで転落防止や進入防止の安全対策をとり、小・中学校へは、事故防止への協力を依頼した。



第5図 地形とグリッド配置図



第6図 遺構配置図



第7図 土層断面図

第3節 縄文時代の調査

1 調査の概要

縄文時代の調査は、上層の近代の調査と弥生時代の調査終了後に行った。

縄文時代の包含層は、前回の調査で早期に該当する 層(アカホヤ火山灰層下層)と晩期に該当する 層が確認されていたが、今回の調査で新たに、 層から貝殻条痕文土器の底部が検出されたが、口唇部や口縁部は出土しなかった。他に貝殻条痕文土器が6点出土し、石器は敲石が1点出土した。

なお、前回の調査でA・B - 1・2区で検出された、早期の遺構・遺物については、今回の調査区内では検出されなかったため、早期の遺物の分布は、今回の調査区の範囲外にあるものと考えられる。

2 土器(第9, 10図)

1は、尖底で底部から胴部までがつぶれた形で出土した。周囲に掘込み等は見られなかったため、地表面に置かれた状態で放置されたものと推定される。外面の色調はやや艶のある暗褐色で、部分的に黒褐色となっている。底部から胴部まで、貝殻腹縁を使用したと思われる粗い条痕で調整されている。

内面は褐色で、貝殻腹縁を使用したと思われる横位と斜位の条痕で調整されている。断面に接着の痕跡が残されており、幅が約5.5cmの粘土帯を積み重ねる輪積みで製作されたことがわかり、内面側の接着部分に条痕調整が観察される。このことから化粧土で覆われる前の段階に貝殻腹縁を用いて条痕調整されたと思われる。接着部分の先端は丸く仕上げられ、接着後、その両面から化粧土が施され、その後に条痕文が施されていると思われる。接着部分の器厚が薄く、内面からおさえた際に条痕が消されていることが観察できる。

その他の出土土器の総数は6点である。いずれも胴部であるが、6と7は、底部に近い部分と思われる。その全てを図化し掲載した。尖底の条痕文土器と思われる。

2から5は、C - 13区から出土した。2は、外面が若干光沢を持つ黒褐色で、下半分が灰褐色の土器である。外面は、左上方から右下に向かって条痕による地文が見られる。地文は粗く、極微量ながら煤が付着している。

内面はわずかに黄味を帯びる褐色、ほぼ横位に貝殻腹縁を用いた調整がみられ、条痕に混じって右から左へ、横ナデが見られる。断面の中心部は、淡灰褐色である。胎土はよく水簸されており、石英、角閃石、長石を含み、砂礫は少ない。

3は、条痕文土器である。2と非常に似ており、同一個体の可能性もある。外面は黒褐色で、下部は褐色である。

4は、2と同一個体と思われる。わずかだが外面全体に煤が付着している。

5は、2と同一個体と思われる。

6と7は、C - 14区から出土した。共に、内・外面ともやや黄味を帯びた淡褐色で、内面下部は縦位に調整されている。また、断面は黒褐色で、胎土は石英、角閃石を含む。全体が屈曲しているので、底部に近い部分と思われる。

7は、外面が淡茶褐色で縦位の条痕で調整されている。内面は黒褐色で、横位と斜位の条痕で調整されている。断面は黒褐色である。

3 石器（第11図 8）

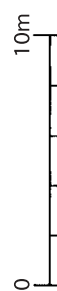
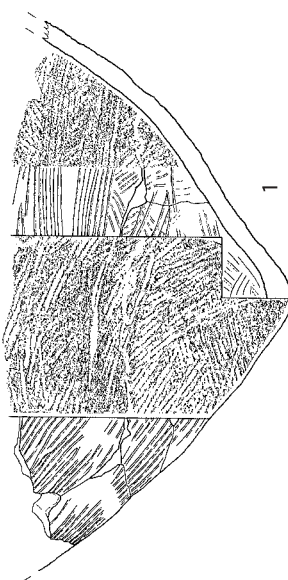
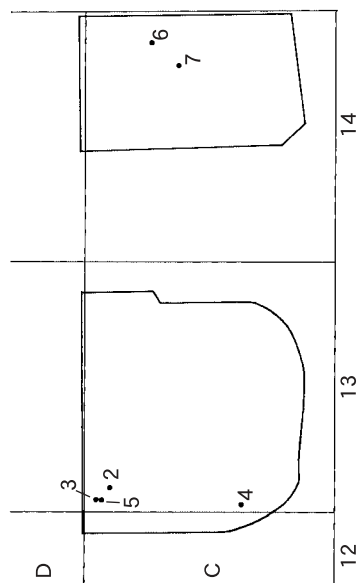
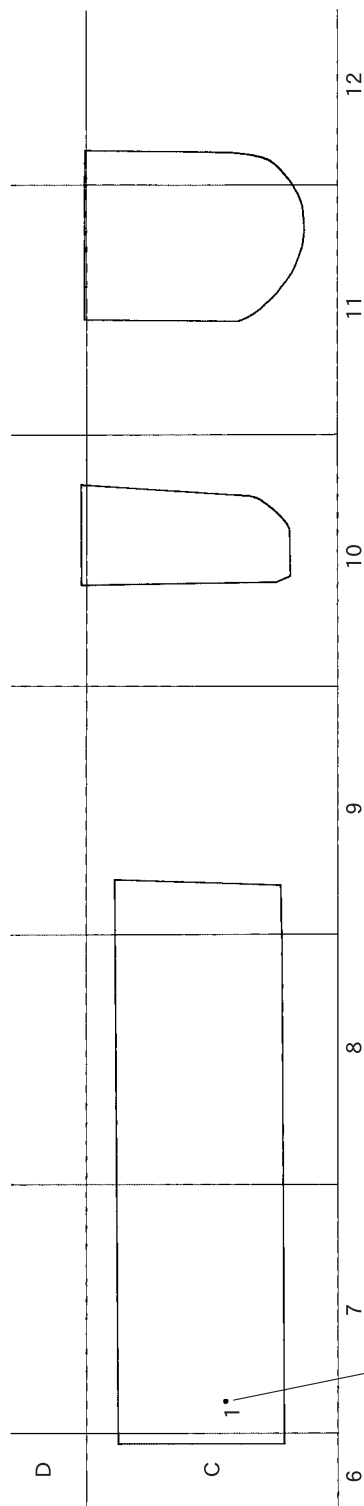
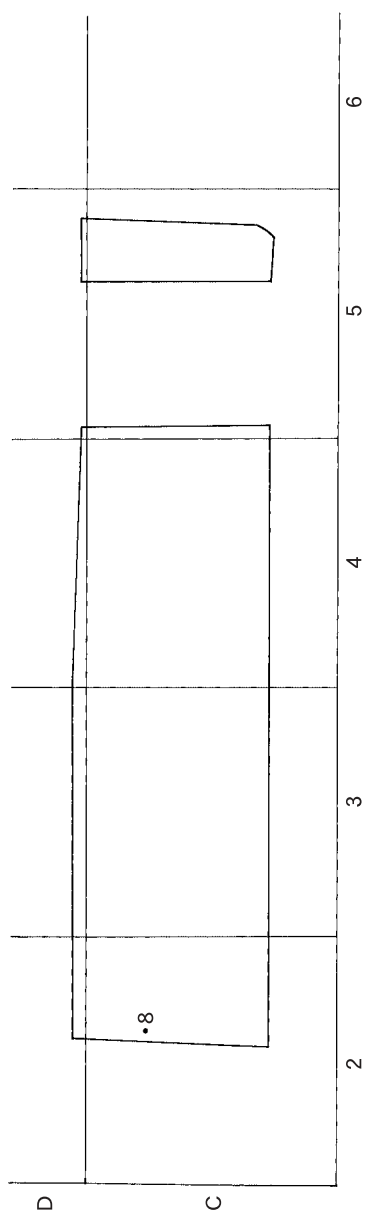
8は敲石である。ホルンフェルスを石材とし、原礫をほとんど加工しないまま、その先端部を敲打に使用している。

第5表 VI層出土土器観察表

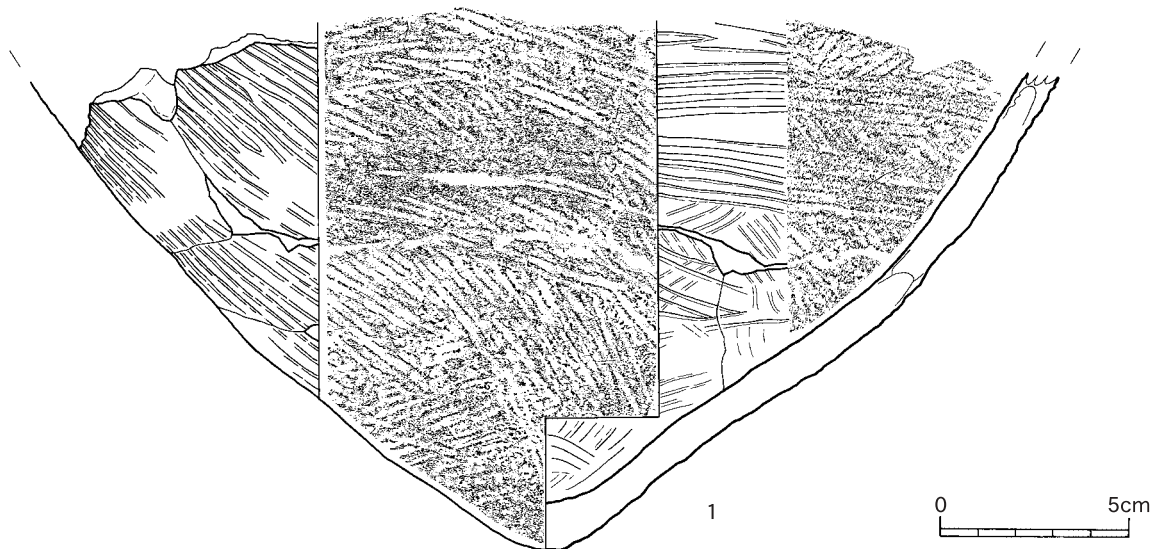
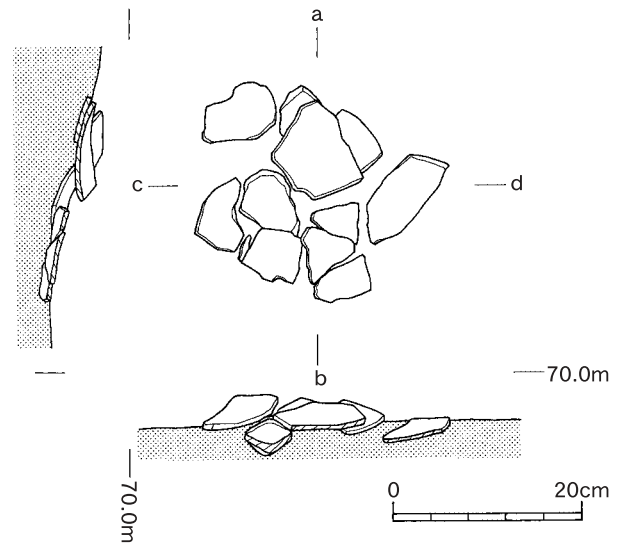
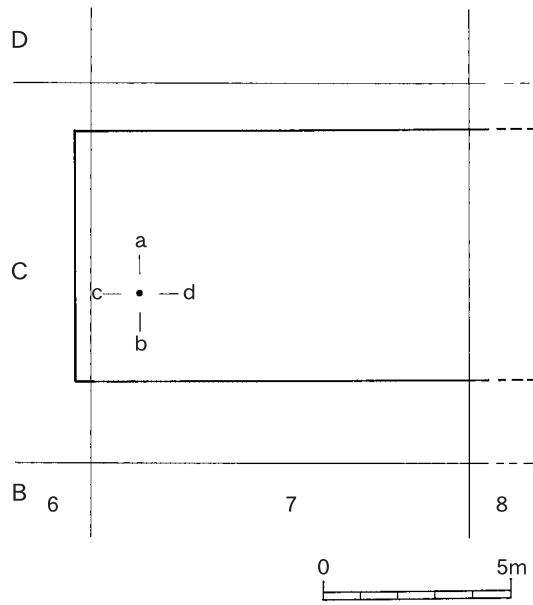
番号	注記 番号	区	層	部位	焼成	外面 色調	内面 色調	断面 色調	外面 調整	内面 調整	胎 土	備考
1	29-1~29-12 31	C - 7		胴部～ 底部	良好	黒褐色	暗茶褐色～茶 褐色	淡茶褐色	条痕文	条痕・ ナデ	石英・角閃石・雲母・ 小礫	
2	145	C - 13		胴部	良好	黒褐色	暗茶褐色～茶 褐色	淡茶褐色	条痕文	条痕・ ナデ	石英・角閃石・雲母・ 小礫	
3	147 148	C - 13		胴部	良好	黒褐色	茶褐色	淡茶褐色	条痕文	条痕・ ナデ	石英・角閃石・雲母・ 小礫	接合資 料
4	142	C - 13		胴部	良好	黒褐色	茶褐色	淡茶褐色	条痕文	条痕・ ナデ	石英・角閃石・雲母・ 小礫	
5	144	C - 13		胴部	良好	黒褐色	茶褐色	淡茶褐色	条痕文	条痕・ ナデ	石英・角閃石・雲母・ 小礫	
6	121	C - 14		胴部	良好	淡茶褐 色	灰褐色～黒褐 色	黒褐色	条痕文	条痕・ ナデ	石英・白色小礫	
7	123	C - 14		胴部	良好	淡茶褐 色	黒褐色	黒褐色	条痕文	条痕・ ナデ	石英・白色小礫	

第6表 VI層出土石器観察表

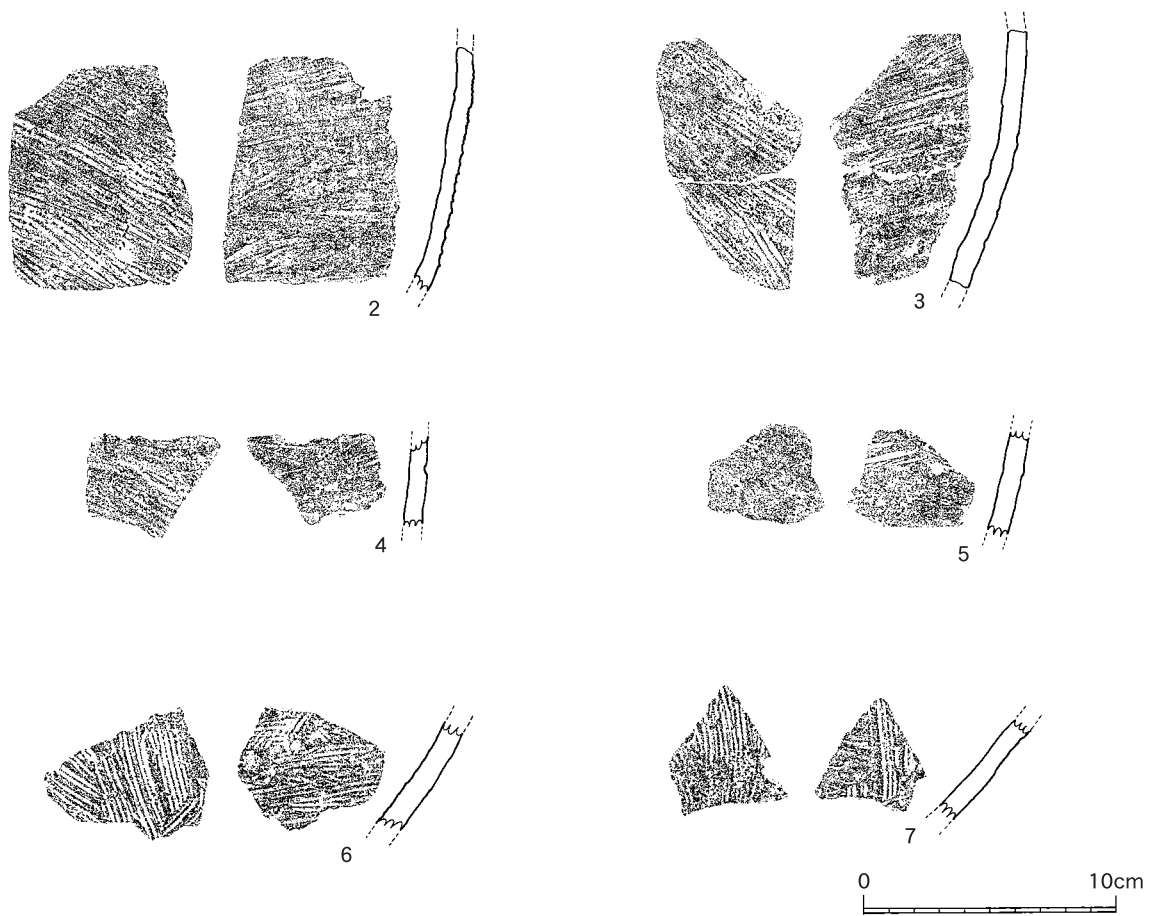
番号	注記 番号	区	層	器種	最大長(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	石 材
8	182	C - 2		敲石	9.0	5.85	3.7	287.13	ホルンフェルス



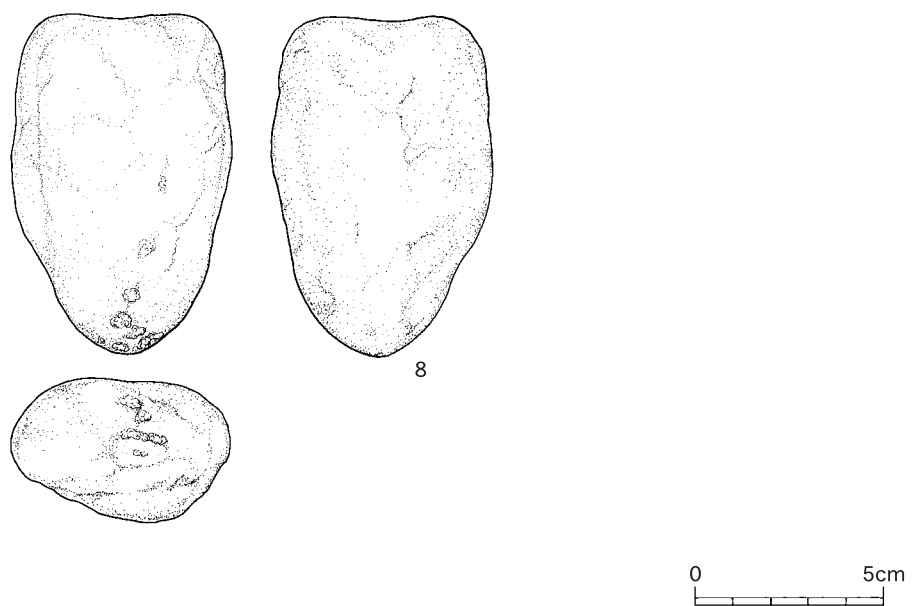
第 8 図 VI層遺物出土状況図



第9図 VI層土器出土状況と土器実測図



第10図 VI層出土土器実測図



第11図 VI層出土石器実測図

第4節 弥生時代の調査

1 調査の概要

調査は、C - 2 ~ 14区にかけて調査区の中央に、バイパスと並行して建設されている排水溝の北側部分の緑地帯から調査を開始することとし、排水溝が撤去された後、調査区全域に調査範囲を広げることとした。

重機で表土を除去した後に、人力による掘削を行った。C - 6 ~ 9区、C - 10区、C - 11 ~ 12区、C - 12 ~ 13区、C - 14区とも弥生時代の遺物包含層が残されており、C - 11 ~ 12区からは、土坑が5基、C - 12 ~ 13区からは、掘立柱建物跡と考えられる柱穴が5基と土坑1基が検出された。なお掘立柱建物跡の柱穴1基(P6)は、排水溝の撤去前に検出されたので、結果的に1基のみでの写真撮影・実測を行うこととなった。

排水溝が撤去された後、調査区内の緑地帯全域に調査範囲を広げた結果、弥生時代包含層から遺構検出面にかけて、戦跡遺構により一部削平されていることが判明した。おもにC - 9 ~ 13区にかけて、弥生時代中期の山ノ口式土器が出土した。掘立柱建物跡と土坑5基を検出し、検出状況の写真撮影や実測などを行い、弥生時代の調査を終了した。

なお、C - 2 ~ 5区については旧地形が丘陵部だったため、層まで削平を受けており、遺構は発見できなかった。

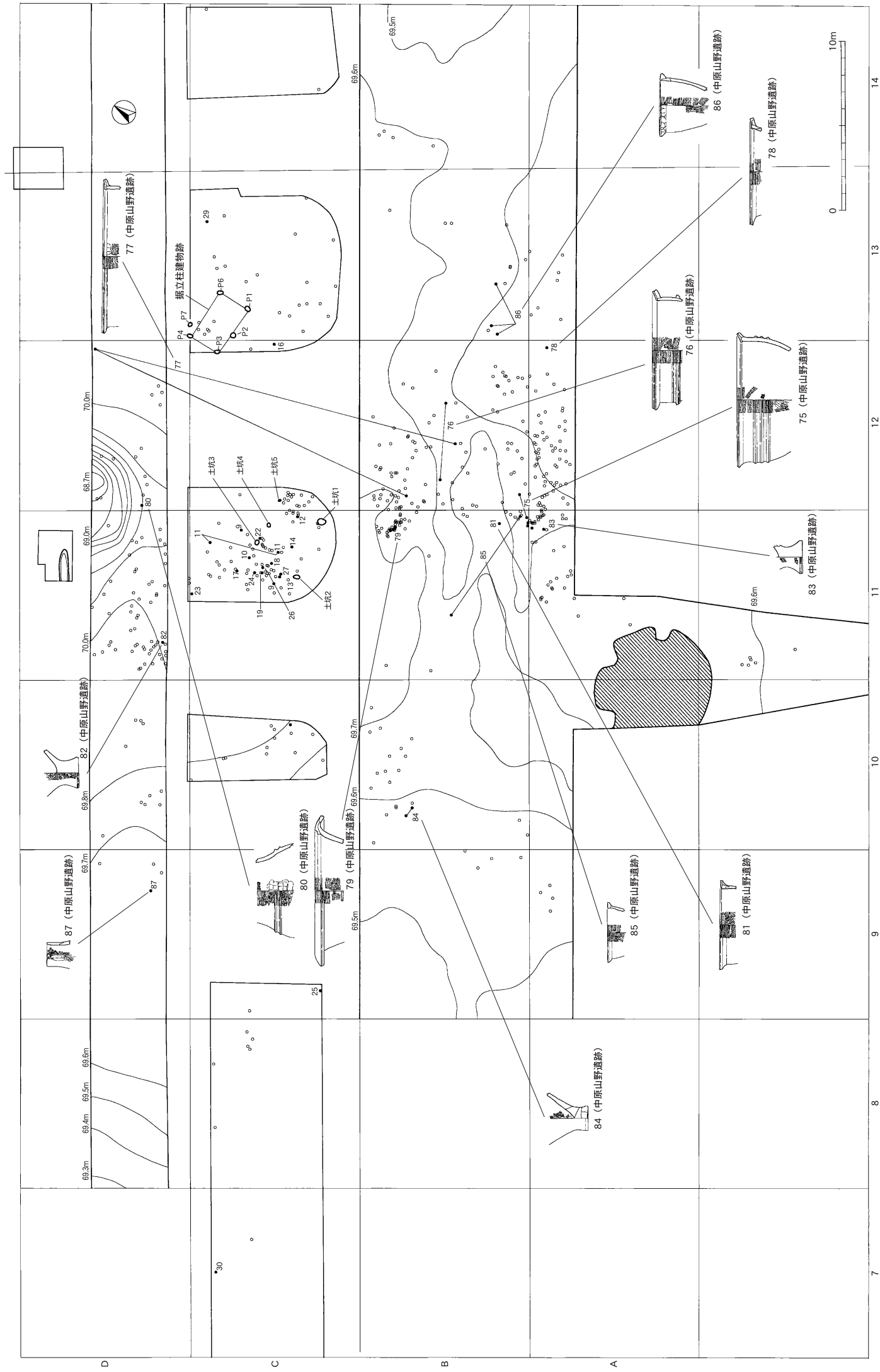
2 遺構

(1) 掘立柱建物跡(第13図、第7表)

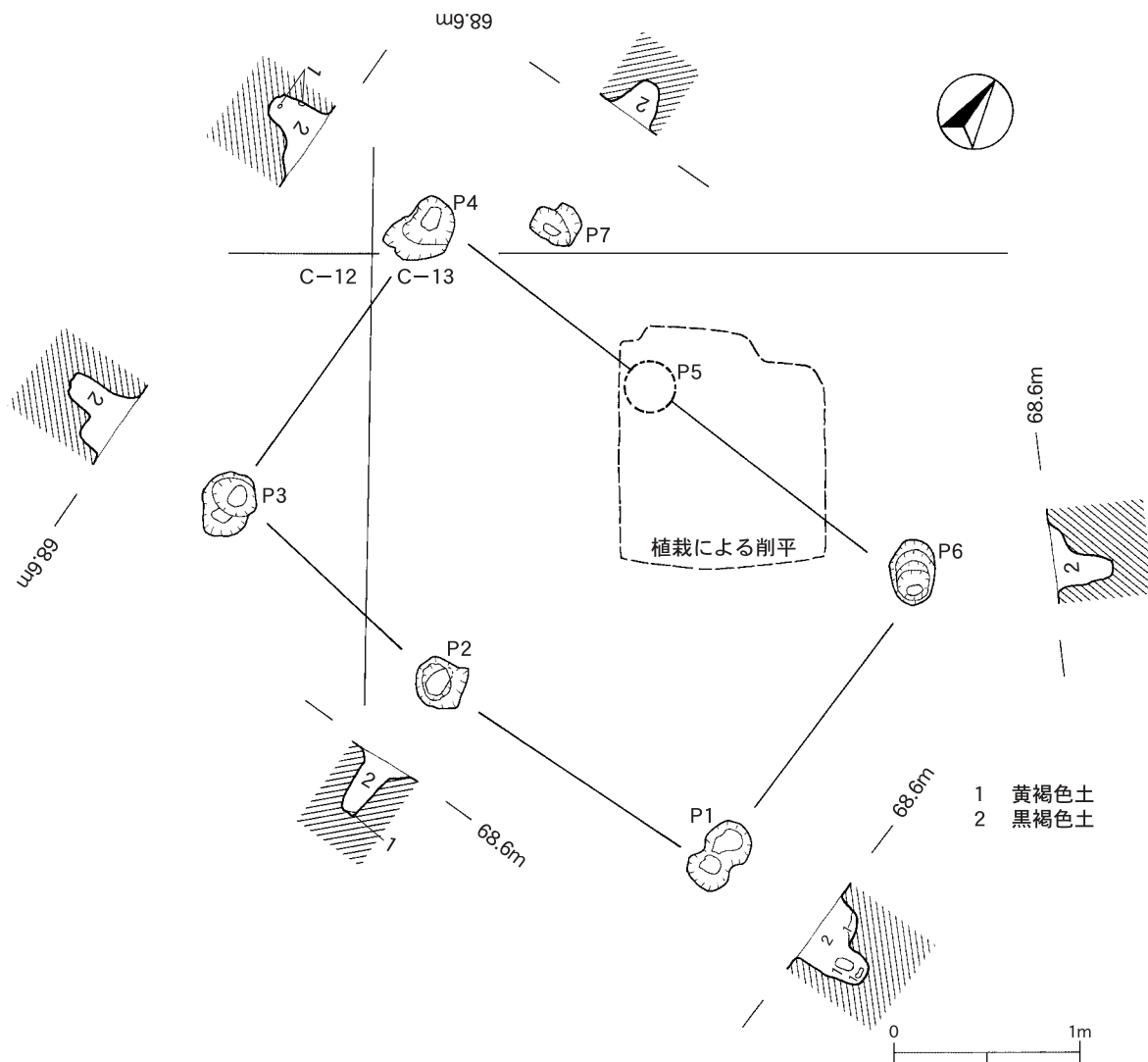
C - 13区から1間×2間の掘立柱建物跡1基を検出した。軸方向はN - 72° - Eである。P5にあたる部分は植栽の為に削平を受けていた。P7を除く柱穴の平均は長径37.4cm、短径28cm、深さ34cmである。P2とP7は円柱状の断面形をもつが、P1・P3・P4・P6の断面形は片方に段を持つ。P7は他の柱穴に比べて長径27cm、深さ21cm若干小さく浅い。柱穴の埋土は黒褐色土に若干のアカホヤ層の塊を含む。梁間の平均は186.5cm、桁間の平均は162.5cmである。

(2) 土坑(第14図、第8表)

C - 11・12区で5基の土坑を検出した。検出面はいずれも層上面である。土坑1の埋土は層の黄白色のパミスである。検出時の平面形は楕円形をしていたが、約30cmの深さで平面の底部に達したあと、北側に直径約10cm、深さ約8cmの円形の落ち込みがある。土坑2も検出時は楕円形をしていたが、約2cmの深さで円形の底部に達したあとに、やはり北側に直径約20cm程度の円形の掘り込みを持つ。埋土は2層に分かれており、上層は層の黄白色パミスで、下層は茶褐色土である。土坑3の平面形は直径約30cmの円形で、断面形はボウル状である。埋土は層のパミスである。土坑4の平面形は約20cmの円形で断面形は逆円錐形である。埋土は層のパミスである。土坑5は浅い窪み状である。埋土は層のパミスである。5基とも平面形、検出面からの深さ、及び土坑の配置から遺構の可能性も検討したが、特定には至らなかった。



第12図 Ⅲ層遺構配置図と遺物出土状況図



第13図 掘立柱建物跡実測図

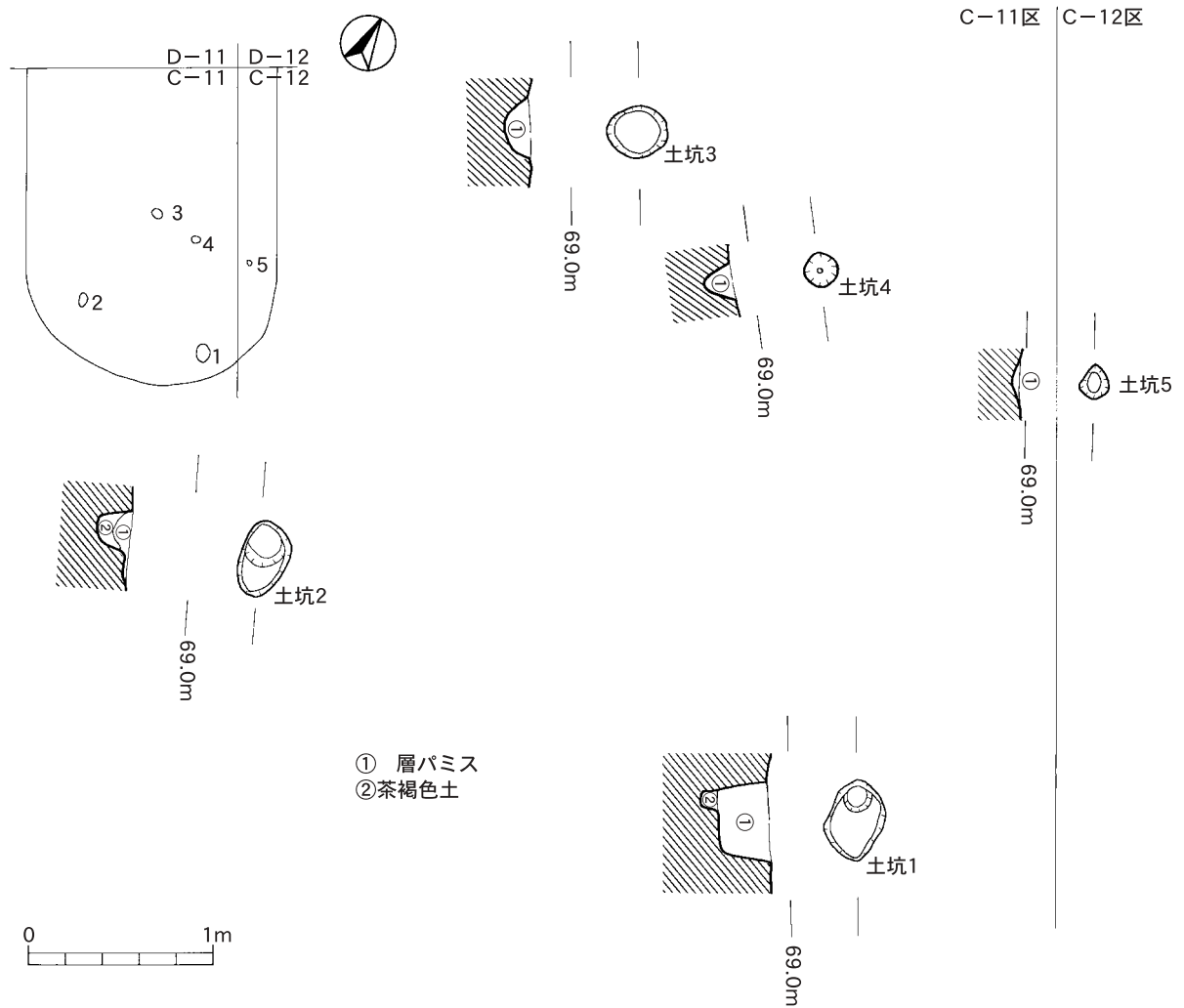
第7表 掘立柱建物跡計測表

1 柱穴計測表 (単位: cm)

柱穴番号	柱穴痕		
	長径	短径	深さ
P 1	40	25	36
P 2	28	27	36
P 3	39	30	36
P 4	40	24	28
P 5	削平		
P 6	36	34	34
P 7	27	21	24

2 柱間心心距離計測表 (柱間単位: cm)

	柱穴番号		柱間
桁行方向	P 1 ~ P 2		176
	P 2 ~ P 3		149
		P 1 ~ P 3	324
		P 4 ~ P 6	323
梁間方向	P 1 ~ P 6		188
	P 3 ~ P 4		185



第14図 土坑実測図

第8表 土坑計測表

	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
土坑 1	45	34	39
土坑 2	41	27	20
土坑 3	33	29	15
土坑 4	21	20	19
土坑 5	20	17	4

3 遺物

(1) 土器（第15図 9～28）

C・D - 9～14区から、131点の土器が出土した。そのうちの20点を実測し掲載した。

9は、甕の口縁部から胴部突帯の部分まで残存している。外面は暗茶褐色でわずかに光沢が見られるが横ナデによる調整のみである。突帯の下わずかに残った部分に刷毛ナデが左上方向から右下方向に向かってみられる。内面は茶褐色から灰褐色である。口縁部付近に横位のナデ調整があるが、口唇部との接着した痕跡が観察できる程度に残る。胴部内面は丁寧に調整され、その痕跡を残さない。口縁部上面は左から右へナデがみられる。胴部上部には3条の突帯が観察される。突帯と胴部は、接着されたあとに胴部を含む全体に横ナデを施すことで接着部分が消されている。横ナデによって突帯断面は先端部分が丸くなっている。胎土には、細かな金色の雲母が内外面に観察できる。

10～13は、甕の口縁部である。

10は、口縁部は内側にわずかに張り出すが、意識して張り出すように整形したのではなく、口唇部と胴部の接着時にその接着部分を押しつけたため、結果的にできた調整痕と思われる。そのため、ところどころ張り出しが見られない部分がある。口縁の屈曲部から口唇部端部までの器厚は変わらず、口唇部には端部に一条の沈線を廻らすことによる凹みがみられる。全体にナデ調整が施されている。外面口縁部から胴部に至る屈曲部にわずかに煤を残す。外面は淡茶褐色、内面と断面中央部は明茶褐色である。

11は、外面と内面とも横ナデ調整が施されている。口縁から器厚を変えずに口唇部端部に至る。口唇部には凹みがみられる。内面と口縁部上面は明茶褐色である。口縁部下面はやや暗い淡褐色で、全体にナデ調整が施されている。

12は、胎土を含めて全体が明茶褐色である。口縁部内面の張り出しはほとんどみられず、口唇部を貼り付けた際の接着部の痕跡を残す程度である。口唇部は肥厚した上で端部に向かって、断面三角形を呈する。口縁部外面は調整と思われる条痕が見られる。全体的に調整は粗雑である。

13は、口縁から器厚を変えずに口唇部端部に至る。口唇部には凹みがみられる。内面や口縁部上面は淡茶褐色である。口縁部下面から胴部以下は暗茶褐色である。全体に横位のナデ調整が施されている。口縁部内面には張り出しがみられるものの、その直下に口唇部を貼り付けた際の、指ナデ・指押さえが観察できる。胎土には白色から赤色の石英や、雲母・角閃石を含む。

14～20は、甕の胴部突帯部分である。

14は、胎土も含め、外面は明褐色、内面は明茶褐色である。器面上に不定型の石英と雲母がみられる。石英の最大径は約3.5mmである。突帯を含め外面全体に横位のナデ調整が見られる。突帯は摩滅が激しく形状は判然としないが、約6mmの間隔で突帯が貼り付けられている。

15の外面は黒褐色、内面は明茶褐色である。突帯は他に比べて先端部が尖り、3条貼り付けられ、約6mm～8mmの間隔で貼り付けられている。各突帯下部との胴部直下に煤が付着

している。内面には、横位のナデが見られる。両面に細かい金色の雲母が多く観察される。

16の外面は暗茶褐色、内面は明茶褐色で2本の突帯がほぼ間隔を置かずに貼り付けられている。

外面は突帯も含めて横位の、内面は斜位の刷毛ナデが見られる。突帯下部には煤が付着している。両面に細かい金色の雲母が多く観察される。断面には透明・白色から赤色の不定型な石英粒を多量に含む。石英粒の最大径は3mm程度である。胎土内に黒色の雲母や砂礫等を含む。

17は、全体が淡褐色である。外面は横ナデが観察されるが、内面の調整は観察できない。突帯の頭頂部は、幅が広く10mmを測り、高さのない突帯である。胎土は金色の雲母、不透明白色から赤味を帯びる石英、その他の砂礫を含む。

18は、突帯が2本残る。外面は暗茶褐色で内面と断面は淡茶褐色である。外面には突帯を含めて横ナデで調整されているが、内面はさらに丁寧に調整されており調整痕は観察できない。突帯は約4mm間隔で貼り付けられている。外面は金色の雲母以外の鉱物類はみられないが、内面に多量の石英・長石が観察できる。外面下端にわずかに煤が残る。

19は、1本の突帯が残る。全体は淡褐色で、横ナデで調整されている。突帯は頭頂部がナデ調整によって丸くなっている。胎土は雲母、石英・長石と白色粒等を含む。

20は、2本の突帯が残る。全体が淡褐色で、横ナデで調整されている。突帯は約4mmの間隔で貼り付けられている。

21は、甕の脚部である。裾の端部には凹みがみられる。底面の接地面に凸凹は見られない。胎土には、雲母と石英・長石が含まれる。全体が赤みを帯びた褐色である。

22・24は、壺の口縁部である。

22は、口縁部上面が丸みを帯びている。口縁部端部には凹みがみられる。全体が丁寧な横ナデで調整されている。外面・内面は明茶褐色で口唇部端部はやや灰色を帯びる。胎土には、角閃石・石英と微量の雲母を含む。

24は、広口壺の口縁部である。口縁部は器厚をほとんど変えないまま立ち上がり、大きく外反している。口縁部には凹みがみられる。全体が丁寧な横ナデで調整されている。外面、内面ともに明茶褐色で、部分によって黒味を帯びるが、断面中央は灰褐色である。胎土は、石英が多く、細かい雲母も含まれている。

23は、壺の肩部である。先端部が鋭く整形された三角突帯が約7mmの間隔を置いて2条残る。外面は、突帯も含めてミガキがみられる。外面は暗茶褐色、内面は淡褐色で胎土はやや灰色味を帯びる。胎土には石英・雲母が含まれる。

25は、全体が白色に近い黄褐色である。胎土に大量の石英と雲母を含む。先端部が鋭く整形された三角突帯が約5mmの間隔を置いて2条残る。外面は突帯も含めて横位ナデが施される。

26は、壺の肩部である。先端部が鋭く整形された三角突帯が約4.5mmの間隔を置いて2条残る。外面は突帯も含めて横位ナデが施される。内面は丁寧に整形され、ナデの痕跡が明確に確認できない。外面は暗茶褐色で、内面と断面は淡褐色である。

27と28は、M字状突帯がみられる胴部である。

27は、M字状突帯が残る。1 3mm幅の突帯を胴部に貼り付けたあとに横位に約4 mm幅で凹みを廻らせてある。突帯の断面形は上部が急角度に立ち上がり最大に張り出し、丸く凹んだ後に、緩い曲線で胴部に接着する。外面は突帯も含めて全体に横ナデがみられる。内面は指で押さえた跡がみられる。外面は暗茶褐色、内面は明茶褐色、断面は淡褐色である。胎土は金色の雲母と石英多量に含む。

28は、1 2mm幅のM字状突帯がみられる。突帯を胴部に貼り付けたあとに横位に約4 mm幅の凹みをめぐらせている。外面・内面は明茶褐色である。胎土には雲母と石英と黒色の粒を含む。

(2) 石器（第16図 29～30）

C - 7～14区から出土した、2点の石器を図示した。

29と30は、打製石斧である。29は、C - 13区から出土した。ホルンフェルス製で、両面の一部に節理面を残す。平面形は扁平だが、周縁全体が両面からの敲打による整形がなされている。柄部は、両面とも中心部に摩滅痕が観察される。

30は、C - 7区から出土した黒色の頁岩製の打製石斧である。柄部から刃部に至る部分が斜めに折断されている。側縁部を両面からの敲打で整形している。特に左側の最も幅の狭い部分と基部に敲打痕を残す。両面中央部と側縁部に摩滅が観察される。

4 1号住居跡（中原山野遺跡）

今回の調査では、C - 13区から掘立柱建物跡一棟を検出した。前回の調査では花卉形住居跡が1基検出されている（「中原山野遺跡」1号住居跡）。

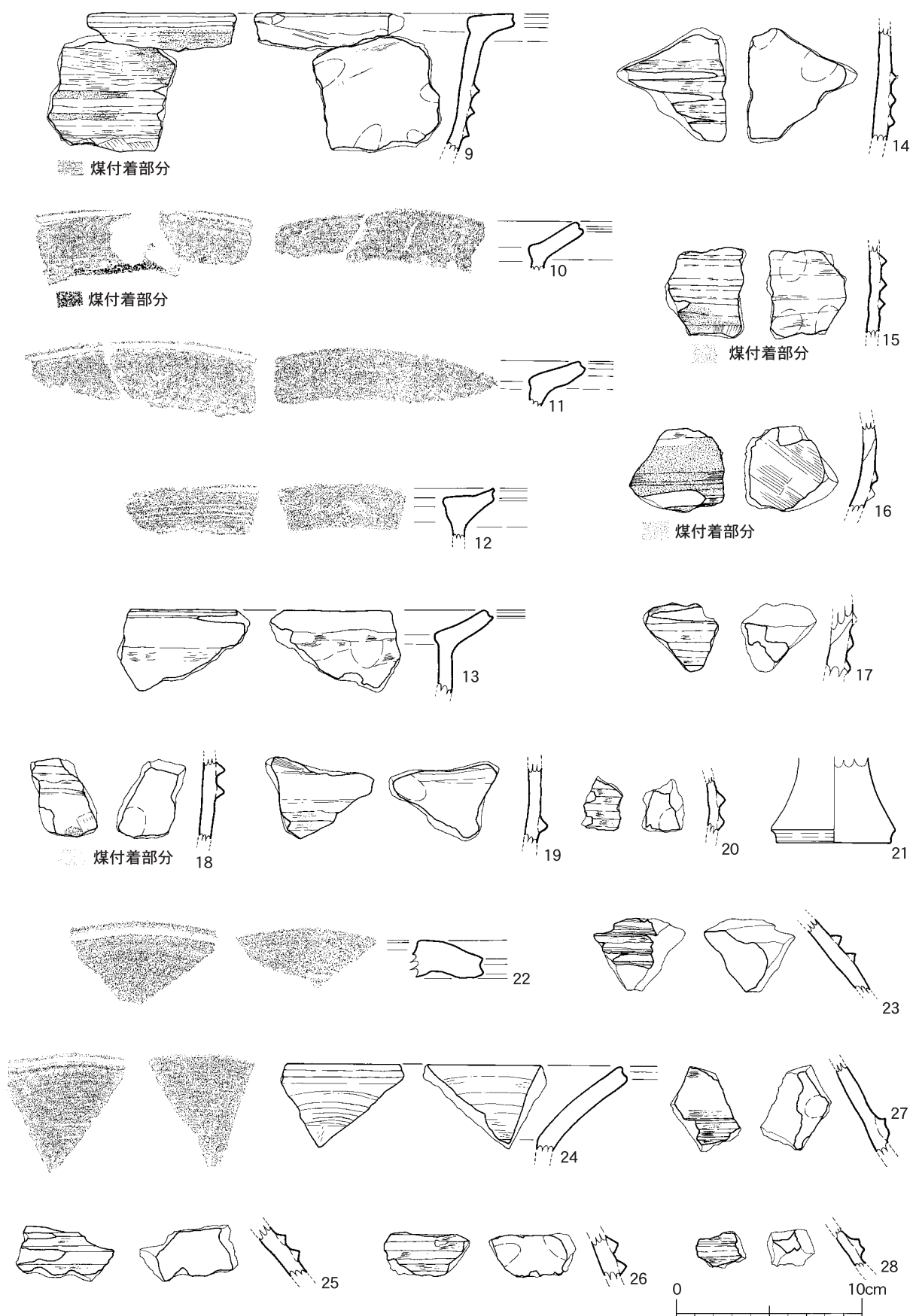
今回の調査で検出された、掘立柱建物跡と時期が重なる可能性も考えられるので、平成2年度版「中原山野遺跡」の調査報告書から、1号住居跡の遺物分布図・遺物出土状況図、1号住居跡実測図、1号住居跡出土遺物実測図及び1号住居跡から出土した遺物の観察表を再掲載することとした。

(1) 1号住居跡（第17図～19図）

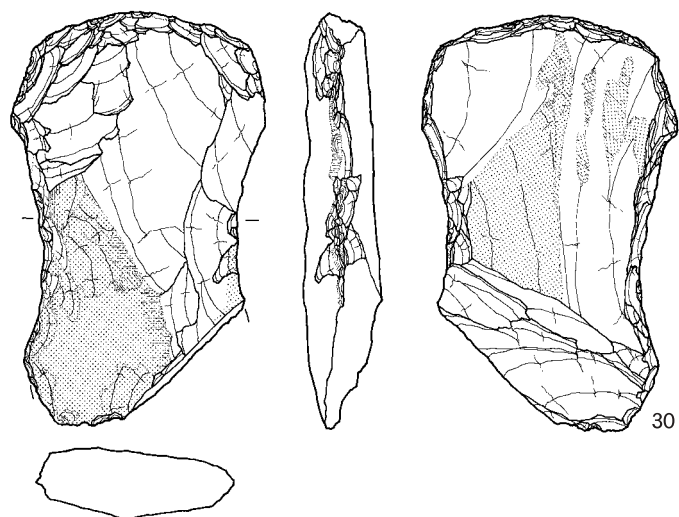
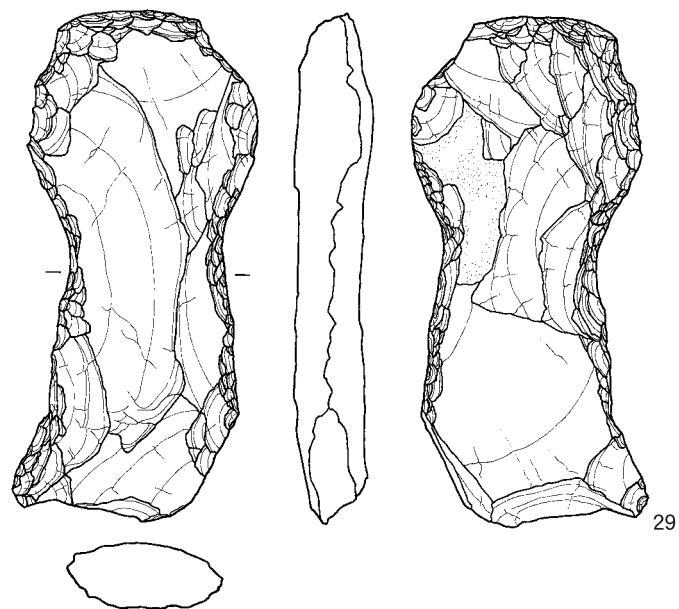
1号住居跡は、ほぼ円形のプランで検出され、西側は一部用地外に延びる。住居跡は、層の火山灰堆積層に掘り込まれ、この火山灰堆積層の下部を床面にしている。

検出面での住居跡の平面プランの直径は、6.90mから7.20mを測り、約7 m程度の規模である。住居跡の周壁は、北西側と北東側と東側の三ヶ所に住居跡の内側へ伸びた間仕切りをつくる。いわゆる花卉形住居跡のタイプに属する。

住居跡の床面は、中央が掘りコタツ状に一段低くなるタイプである。一段低い中央床面の深さは、約20cmを測る。そして、この中央の一段低くなった床面の隅には五本の主柱が位置している。主柱間の距離は、P 1～P 2は2.20m、P 2～P 3が2.05m、P 3～P 4が2.00m、P 4～P 5が1.80m、P 5～P 1が2.25mを測る。各柱穴は、ほぼ均一に配置している。



第15図 III層出土土器実測図



第16図 Ⅲ層出土石器実測図

第9表 Ⅲ層出土土器観察表

番号	注記 番号	区	層	遺物	部位	外面 調整	内面 調整	外面色調	内面色調	断面色調	胎 土	備考	
9	78・109・ 112	C - 11		甕	口縁部 ～胴部	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色	茶褐色	淡茶褐色	石英・雲母・白 色礫・黒色礫	三角突帯	煤付着
10	82 一括	C - 11		甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	淡茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	石英・雲母		
11	72	C - 11		甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	石英・雲母・ク サリ礫		
12	54	C - 11		甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	石英・雲母		
13	107	C - 11		甕	口縁部	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・雲母		
14	62	C - 11		甕	胴部	横ナデ	横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	石英・雲母	三角突帯	
15	一括	C - 8		甕	胴部	横ナデ	横ナデ	黒褐色	明茶褐色	茶褐色	石英・雲母	三角突帯	煤付着
16	134	C - 13		甕	胴部	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	明茶褐色	石英・雲母	三角突帯	煤付着
17	13	C - 8		甕	胴部	横ナデ	横ナデ	淡褐色	淡褐色	淡褐色	石英・雲母	三角突帯	
18	101	C - 11		甕	胴部	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・雲母	三角突帯	煤付着
19	95	C - 11		甕	胴部	横ナデ	横ナデ	淡褐色	淡褐色	淡褐色	石英・雲母	三角突帯	
20	一括	C - 11		甕	胴部	横ナデ	横ナデ	淡褐色	淡褐色	淡褐色	石英・雲母	三角突帯	
21	157	C - 10		甕	脚部	横ナデ	横ナデ	赤褐色	赤褐色	淡褐色	石英・雲母	充実脚	
22	75	C - 11		壺	口縁部	横ナデ	横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	灰褐色	石英・雲母		
23	88	C - 11		壺	肩部	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色	淡褐色	灰褐色	石英・雲母	三角突帯	
24	162	C - 11		壺	口縁部	横ナデ	横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	灰褐色	石英・雲母	広口壺	
25	180	C - 9		壺	胴部	横ナデ	横ナデ	黄褐色	黄褐色	灰色	石英・雲母	三角突帯	
26	94	C - 11		壺	肩部	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色	淡褐色	淡褐色	石英・雲母	三角突帯	
27	113	C - 11		壺	胴部	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	淡褐色	石英・雲母	M字突帯	
28	一括	C - 11		壺	胴部	横ナデ	横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	茶褐色	石英・雲母	M字突帯	

第10表 Ⅲ層出土石器観察表

番号	注記番号	区	層	機種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備考
29	17	C - 13		打製石斧	13.6	5.9	1.9	204.75	ホルンフェルス	
30	33	C - 7		打製石斧	11.0	6.7	2.0	154.67	頁岩	

住居跡中央には、1.40m×0.90mの楕円形の掘り形をもつピットが存在する。そして、ピット内はさらに二つのピットに分かれる。ピットの深さは、床面から約0.50m～0.60mを測る。ピット内の埋土には、灰が多量に存在しており、炉穴の可能性が強い。

柱穴の規模は、P 1 は径55cm×深さ60cm、P 2 は径50cm×深さ50cm、P 3 は径60cm×深さ70cm、P 4 は径75cm×深さ75cm、P 5 は径50cm×深さ60cmを測り、いずれも規模は大きい。

周壁から延びる間仕切りは、約0.7mから0.8m程度、住居跡内部への張り出し、また、この三か所の間仕切りの延長上には住居跡の柱穴が位置している。この間仕切りに囲まれた部分は、一種のベッド状遺構となる。検出面の間仕切り上部から床面の格差は、25cm～30cmを測る。間仕切り間の距離は、P 2～P 3の間は約2.60m、P 3～P 4間が2.70mとほぼ同幅を測る。これは住居跡の柱穴の均等な配置に対応したことが考えられる。P 5に対応する間仕切りは無く、この部分で西側に傾斜したわずかな段をつくる。これは、間仕切りが存在したものが住居跡内のその後の利用の仕方に取り払われた可能性が考えられる。柱穴P 1に対応する間仕切りは周壁が用地外に延びるため不明である。

(2) 1号住居跡の出土遺物（第20～26図、第11～13表）

住居跡内の出土遺物は、土器や石器など多彩で多い。特に、柱穴P 3とP 4の付近から周壁にかけて集中している。

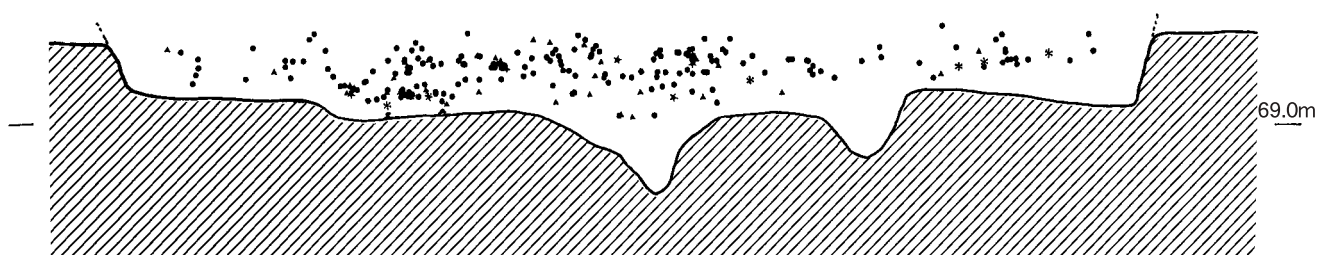
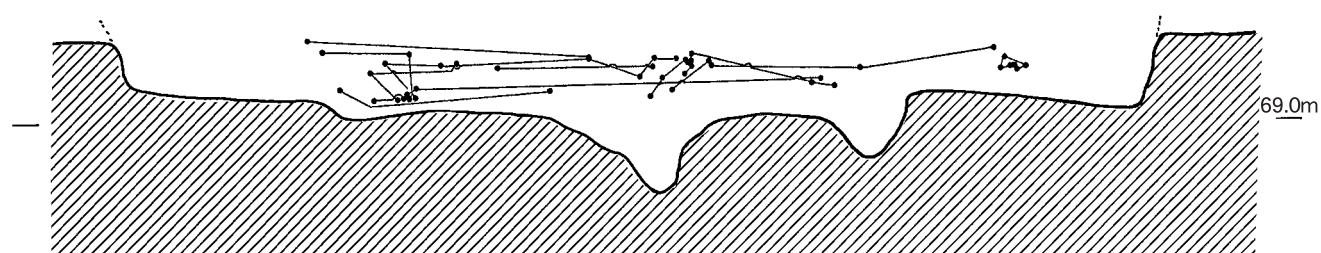
また、出土遺物と共に、比較的大きな炭化木が存在している。柱穴P 4から南東に向いて検出された炭化木は、大木で主柱の可能性が高い。一種の消失家屋であろう。

出土土器は、大甕、甕、壺、台付き鉢など多種の器形がみられる。石器は、スクレイパー、軽石製品、凹石、台石、砥石などである。そのほか、特異な遺物に、柱穴P 3付近から土製の投弾が出土している。

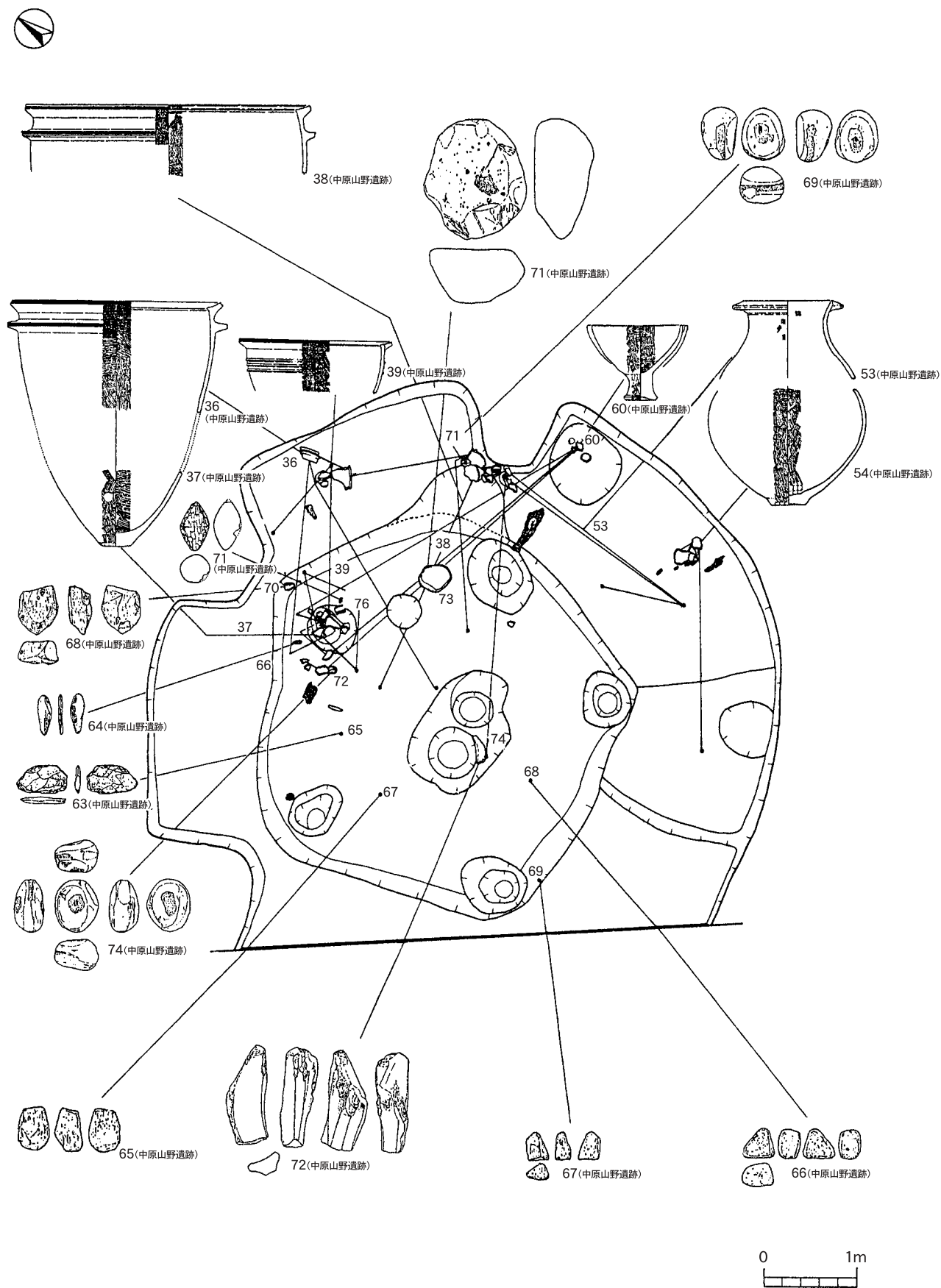


- 土器・土製品
- ▲ 石器
- * 軽石
- * 炭化木

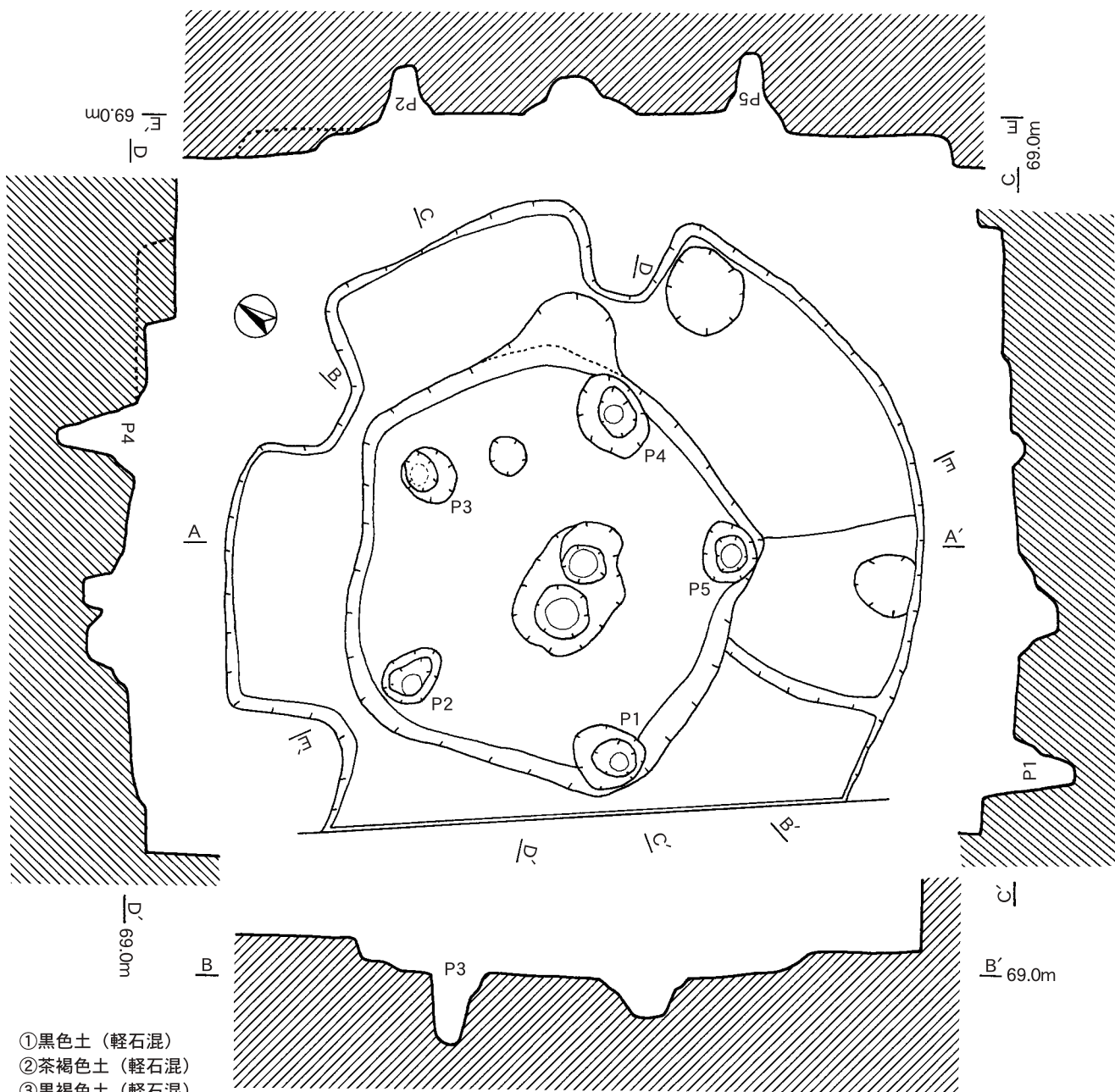
0 1m



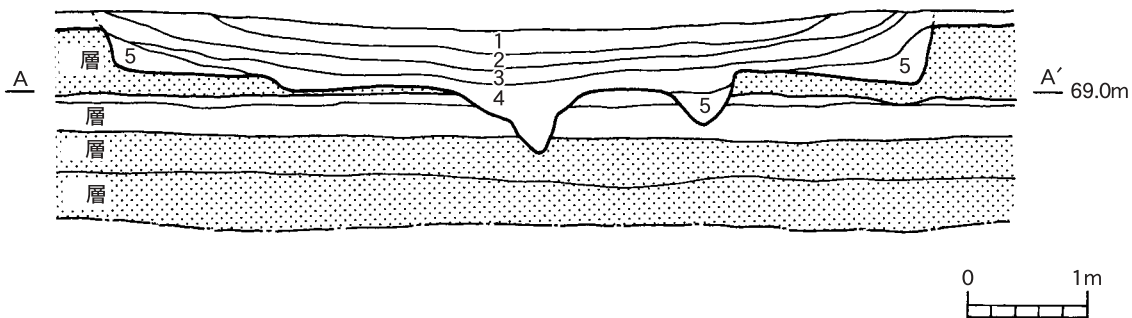
第17図 1号住居跡の遺物分布図



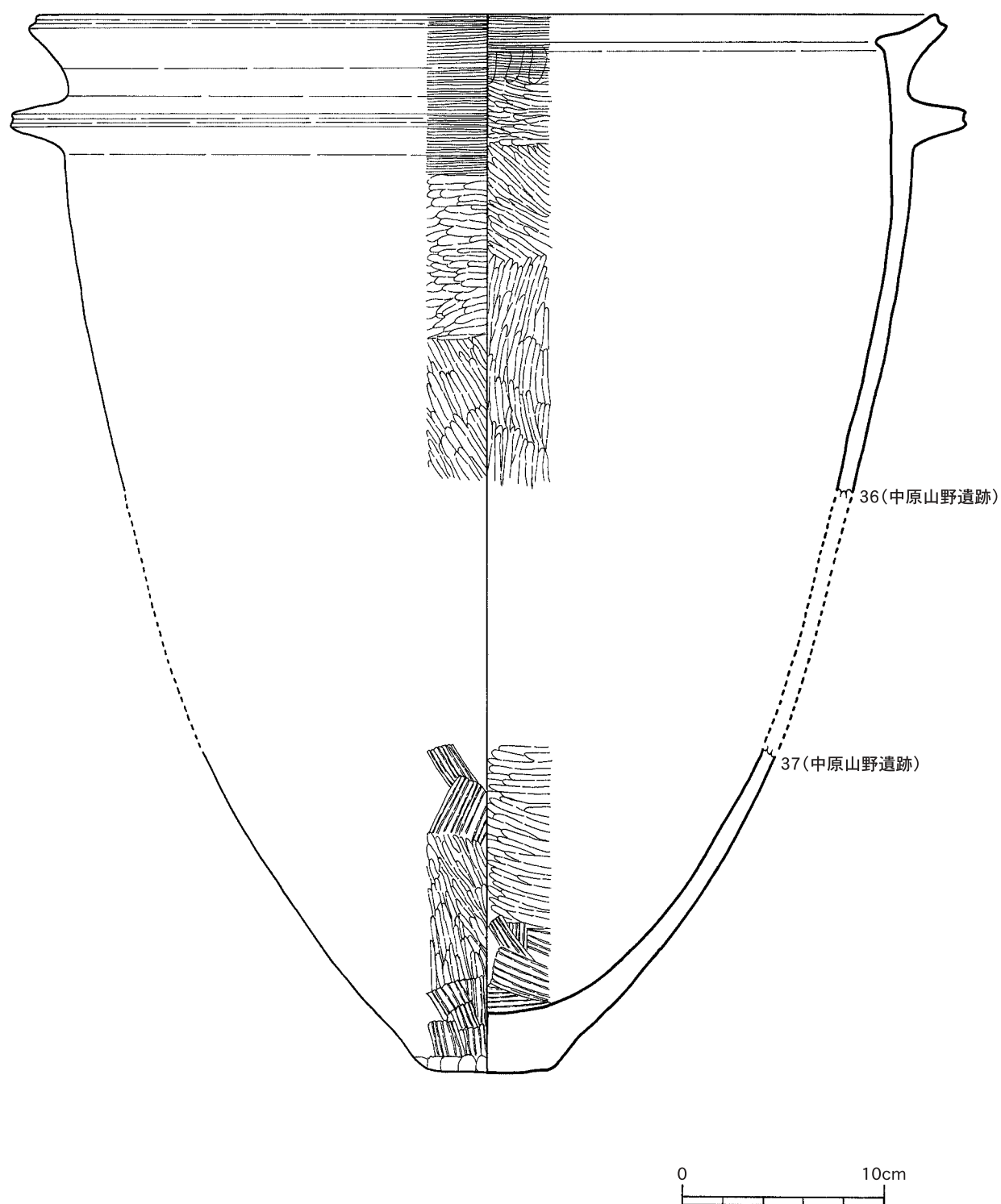
第18図 1号住居跡の遺物出土状況図



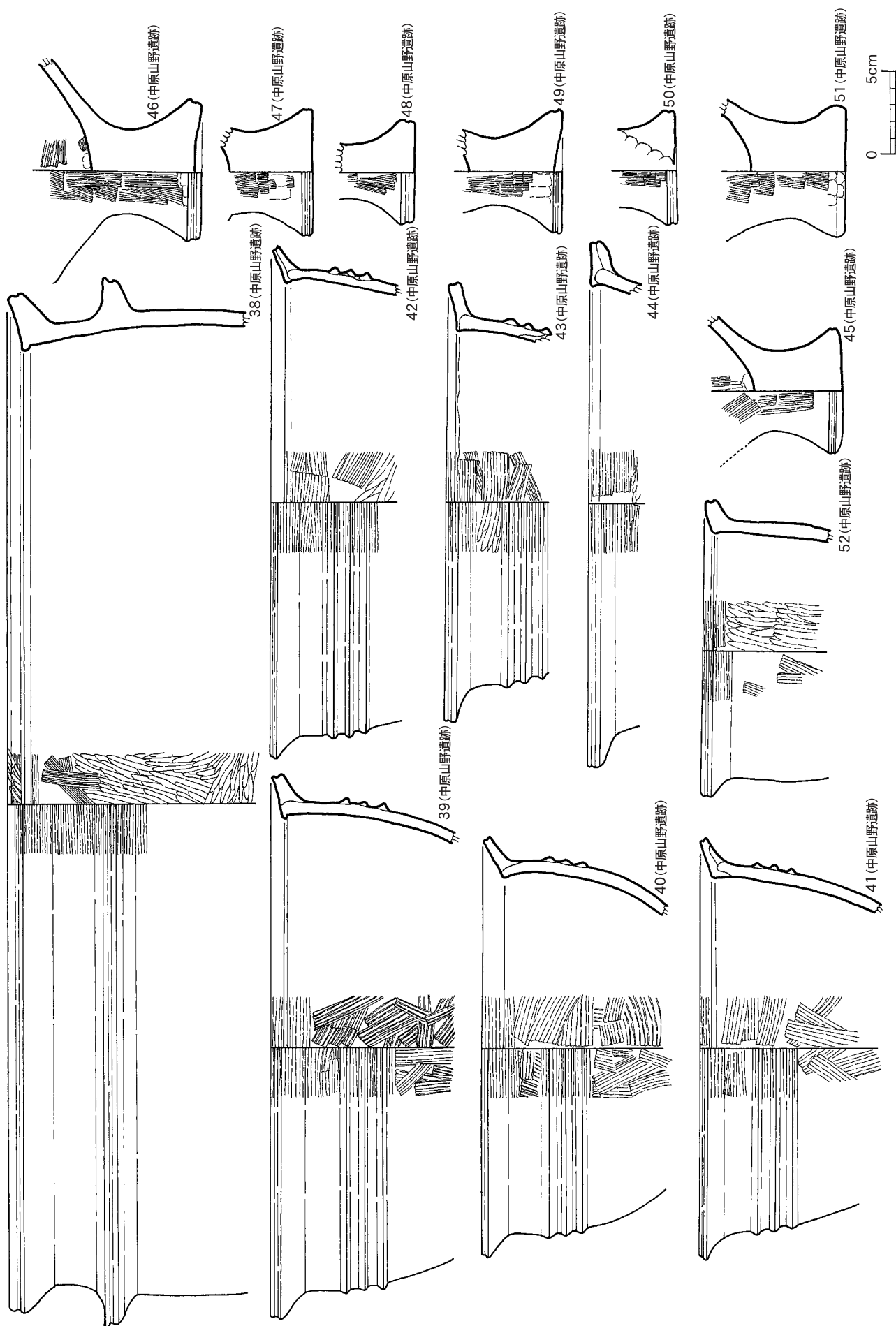
- ① 黒色土（軽石混）
- ② 茶褐色土（軽石混）
- ③ 黒褐色土（軽石混）
- ④ 茶褐色土（軽石混）
- ⑤ 黄褐色土（焼土・軽石混）



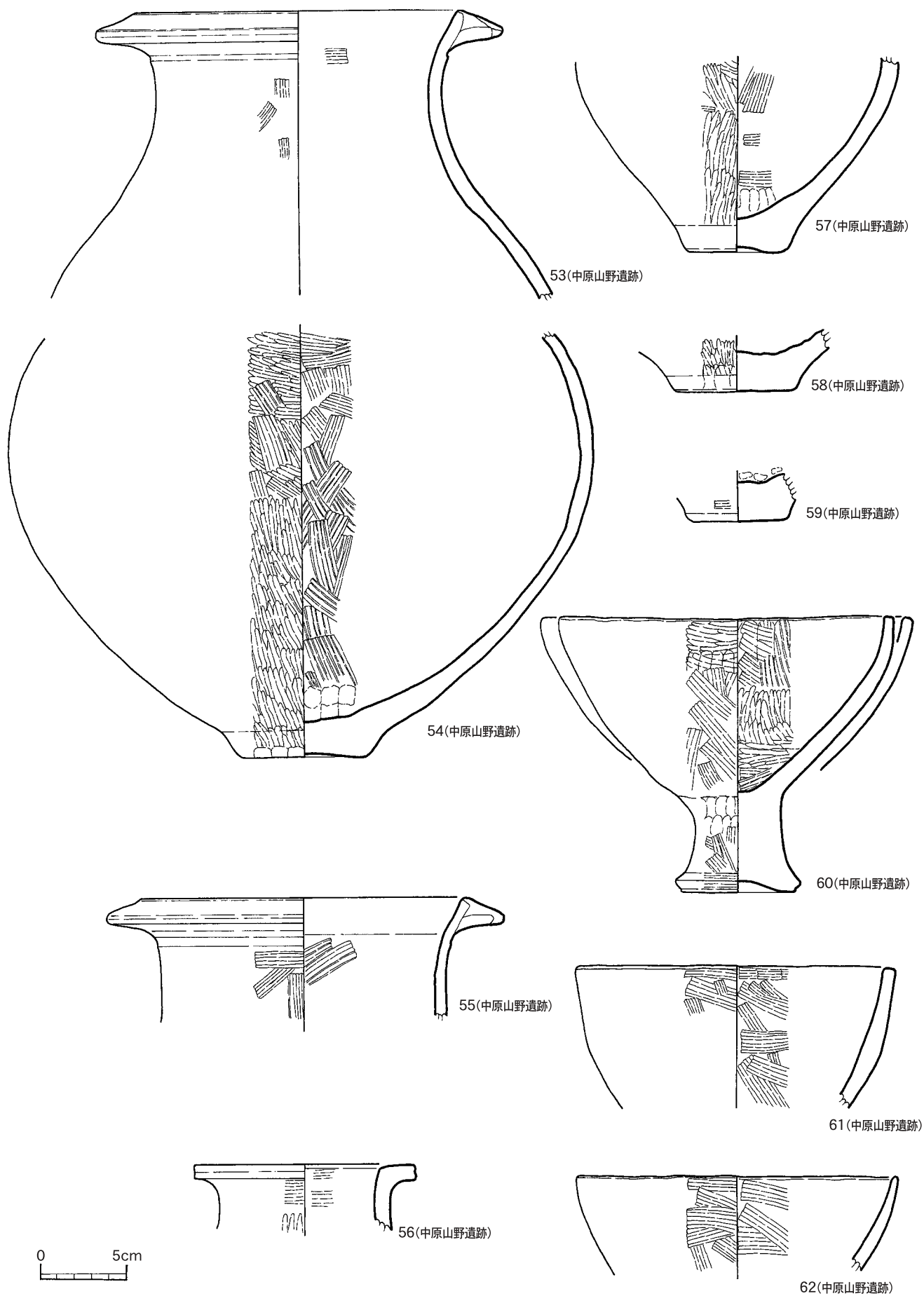
第19図 1号住居跡実測図



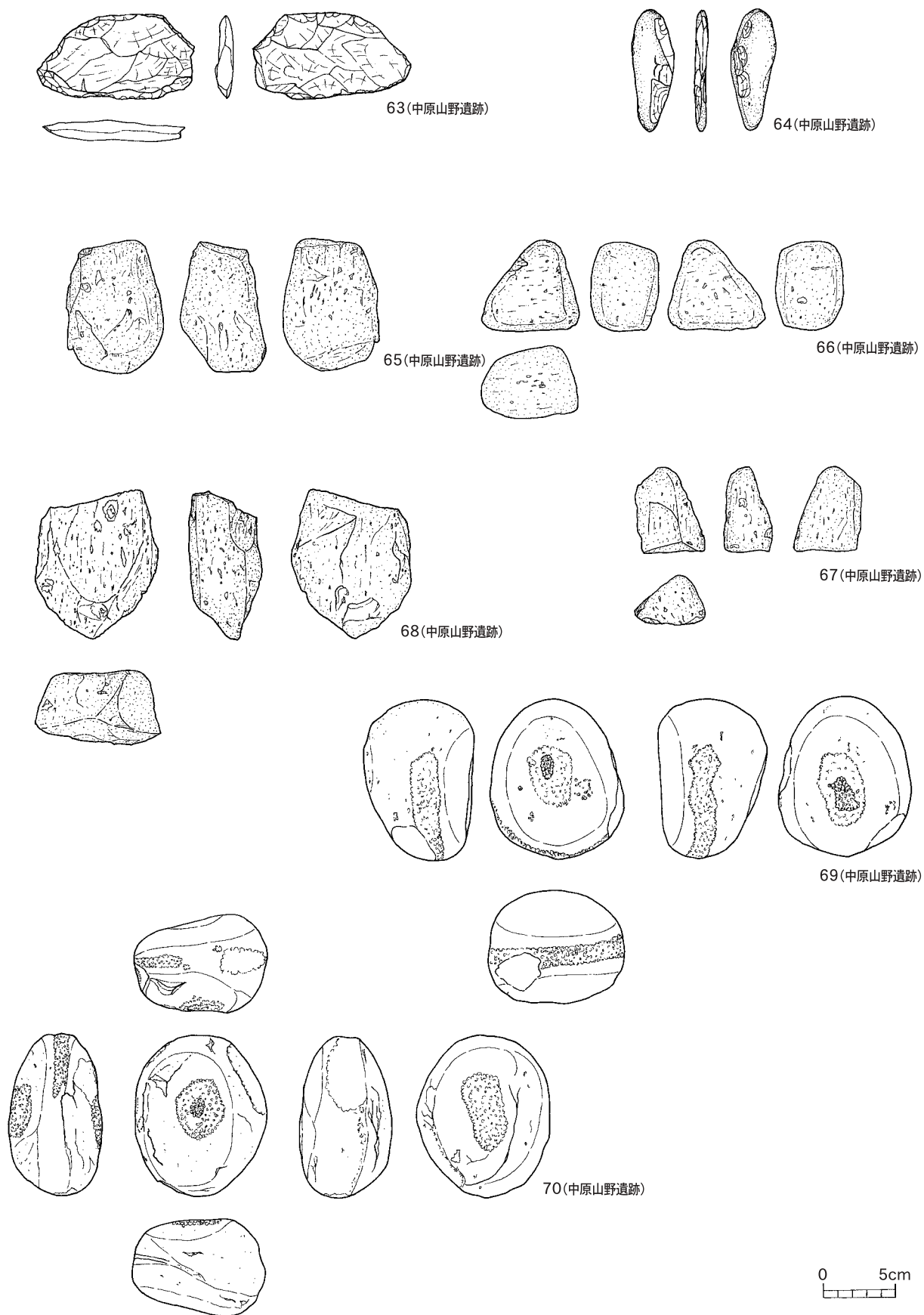
第20図 1号住居跡出土遺物実測図(1)



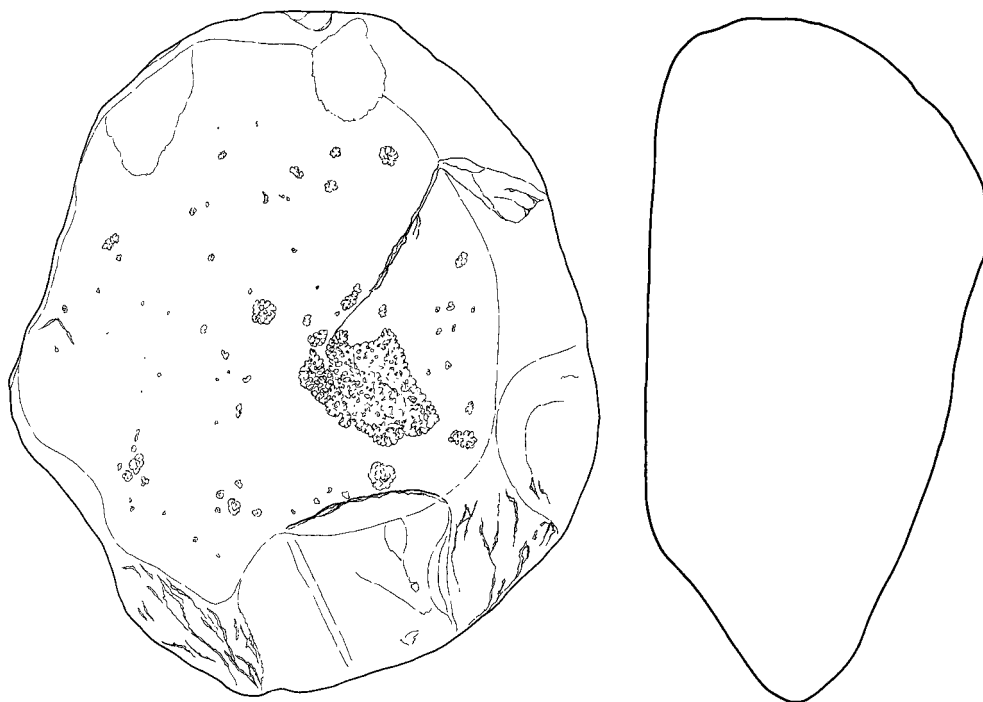
第21図 1号居住跡出土遺物実測図(2)



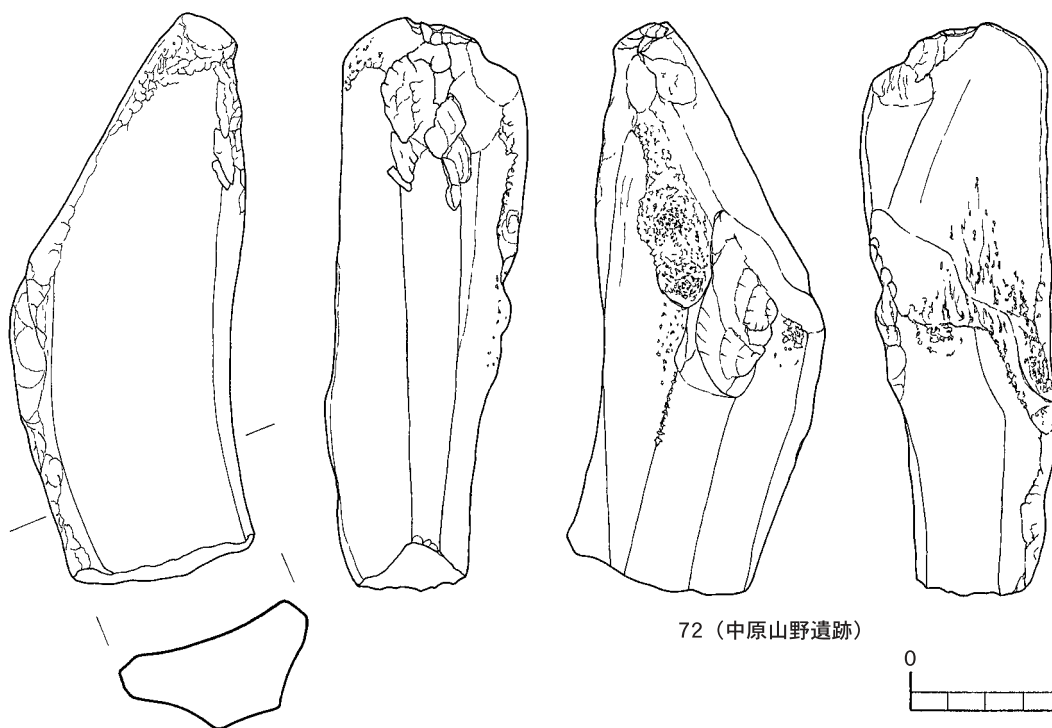
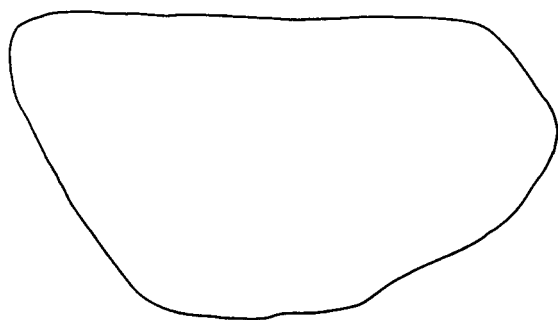
第22図 1号住居跡出土遺物実測図(3)



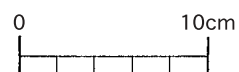
第23図 1号住居跡出土遺物実測図(4)



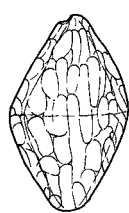
71 (中原山野遺跡)



72 (中原山野遺跡)



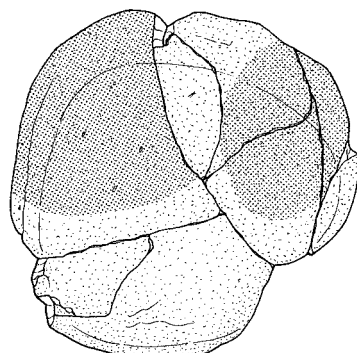
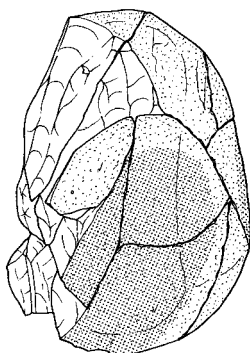
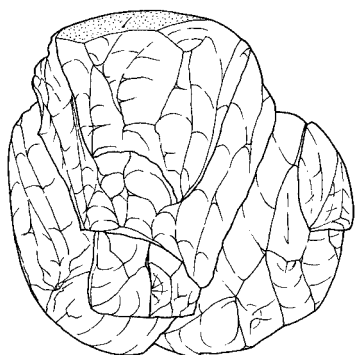
第24図 1号住居跡出土遺物実測図(5)



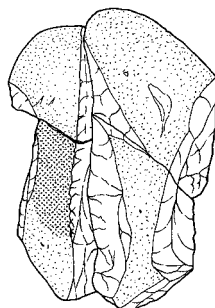
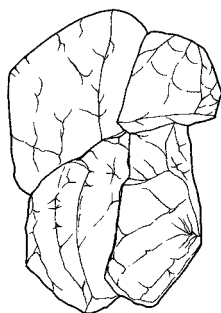
73 (中原山野遺跡)



0 2cm



74 (中原山野遺跡)



0 10cm

第25図 1号住居跡出土遺物実測図(6)

第11表 1号住居跡内出土土器観察表(1)

番号	種別	標高(m)	区・層	器種	部位	法量(cm)	胎土	調整	焼成	色調	備考
36	弥	69.29	他	甕	復元	口径44.0 復元高52.0	石英・長石 黒雲母	外 内 ミガキ ハケ→ナデ	良好	外 内 暗黄褐色～黒褐色 暗黄褐色～橙褐色	36・37は大型の甕形土器である。形態・胎土が類似するところから同一個体とした。口縁部はわずかに内湾し、端部は「く」字状に外反する。口縁部端面は、凹めて仕上げる。底部は平底で、外方へ大きく立ち上がり胴部へ続く外面は、口縁部から貼付突帯まで横位のていねいな刷毛ナデの整形が施され、それ以下の突帯から底部までへう磨きで整形される。煤が付着している。
37	弥	69.36	他	甕	復元	底径6.4 復元高52.0	石英・長石 黒雲母	外 内 ミガキ ハケ→ナデ	良好	外 内 茶褐色 黒褐色	
38	弥	69.35	他	甕	口縁部	口径61.3	石英・長石 黒雲母	外 内 ナデ・ハケ目 粗いハケ目	良好	橙褐色	大型の甕形土器。形態は36とほとんど同じ。
39	弥	69.455	他	甕	口縁～ 胴部	口径32.4	石英・長石 黒雲母	外 内 ナデ・ハケ目 粗いハケ目	良好	茶褐色～暗茶褐色	39～51は、甕形土器である。39～43は甕形土器の口縁部に外反するタイプで頸部には三条程度の貼付突帯文を巡らす。39・40のように胴部は球状に丸みをもって張るものと、42・43のように直線的な胴部がある。口縁部と突帯文間は横位のていねいな刷毛ナデ整形が施されるが、その他の部分は、縦・横・斜位の粗い刷毛目がみられる。底部は、楕部が若干広がり、底部が底面が充実した胸台である。一般的には底面は平坦な平底を呈するが、46・49のように上げ底状の凹面をつくるものもある。底部楕部の端部は面取がおこなわれ、凹縁状の凹みがある。中には51のように面取をせず丸く仕上げるものもある。44は、口縁部は平坦に外方に拡張するが、細片のため定かでない。52は、口縁部を「く」字状に外反させるタイプであるが、口径は18cmと小さく鉢状の器形を想定させる。39・41・52には煤が付着している。
40	弥	69.2	他	甕	口縁～ 胴部	口径24.8	石英・長石 黒雲母	外 内 ナデ・ハケ目 粗いハケ目	良好	茶褐色～暗茶褐色	
41	弥	69.495	他	甕	口縁～ 胴部	口径24.6	石英・長石 黒雲母	外 内 ナデ・ハケ目 粗いハケ目	良好	外 内 黒褐色 暗茶褐色	
42	弥	69.1	1号住	甕	口縁～ 胴部	口径30.2	石英・長石 黒雲母	外 内 ナデ・ハケ目 粗いハケ目	良好	外 内 黒褐色 暗茶褐色	
43	弥	69.195	1号住	甕	口縁～ 胴部	口径26.0	石英・長石 黒雲母	外 内 ナデ・ハケ目 粗いハケ目	良好	外 内 暗茶褐色 暗茶褐色	
44	弥	69.56	1号住	甕	口縁～ 胴部	口径26.4	石英・長石 黒雲母	外 内 ハケ目 ハケ目	良好	外 内 暗茶褐色 暗茶褐色	
45	弥	69.34	1号住	甕	底部	底径7.5	石英・長石 黒雲母	外 内 底 ナデ・ハケ目 ナデ・ハケ目 ナデ	良好	外 内 暗黄褐色 暗黄褐色	
46	弥	69.4	他	甕	底部	底径8.8	石英・長石 黒雲母	外 内 底 ナデ・ハケ目 ナデ・ハケ目 ナデ	良好	外 内 暗茶褐色 暗茶褐色	
47	弥	69.745	他	甕	底部	底径7.8	石英・長石 黒雲母	外 内 底 ナデ・ハケ目 ナデ・ハケ目 ナデ	良好	外 内 暗黄褐色 暗黄褐色	
48	弥	69.245	1号住	甕	底部	底径6.0	石英・長石 黒雲母	外 内 底 ハケ目 ナデ	良好	外 内 暗茶褐色 暗茶褐色	
49	弥	69.365	1号住	甕	底部	底径7.5	石英・長石 黒雲母・砂粒	外 内 底 ヘラケズリ・ナデ ナデ目・ナデ	良好	外 内 底 暗黄褐色 暗茶褐色 暗黄褐色	
50	弥	69.245	1号住	甕	底部	底径7.0	石英・長石 黒雲母	外 内 底 ハケ目・ナデ ナデ	良好	外 内 底 暗茶褐色 暗茶褐色 暗黄褐色	
51	弥	69.38	他	甕	底部	底径8.0	石英・長石 黒雲母	外 内 底 ハケ目・ナデ ナデ	良好	外 内 底 暗黄褐色 暗黄褐色 暗黄褐色	
52	弥	69.39	1号住	甕	口縁～ 胴部	口径18.0 復元高16.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	外 内 底 ハケ目・ナデ ハケ目・ナデ	良好	外 内 底 暗褐色 暗黄褐色 暗黄褐色	

第12表 1号住居跡内出土土器観察表(2)

番号	種別	標高(m)	区・層	器種	部位	法量(cm)	胎土	調整		焼成	色調		備考
53	弥	69.205	他	1号住	壺	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ目 内ハケ目	ハケ目	剥落	外 暗黄褐色 内 "		53～59は、壺形土器である。53・55・56は口縁部片で、54・57～59は底部片である。53・55の口縁部は、頸部から直線的に立ち上がり、わずかに外反して逆「L」字状の拡張部をつくる。拡張部は、先端が丸みをなす三角状のタイプである。56は、頸部から直線的に立ち上がり口縁は逆「L」字状に外反する。口縁は13cmと小さく、小型壺の器形であろう。口縁部は丁寧な刷毛ナデ整形仕上げで、頸部は刷毛仕上げである。54・57～59は、壺形土器の底部である。底径は、5.6～8.0cm程度の小型の底部である。小さい底部から外反し、立ち上がり、胴部は球状に膨らむ。胴部は刷毛目仕上げで、それ以下底部付近はへう磨き整形が施される。
54	弥	69.35	他	1号住	壺	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ目 内ミガキハケ目	ミガキハケ目	良好	外 茶褐色～暗茶褐色 内 黒褐色～暗黄褐色		
55	弥	69.305	他	1号住	壺	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ目 内ハケ目	ハケ目	剥落	外 暗黄褐色 内 暗茶褐色		
56	弥	69.51	他	1号住	壺	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母	外ハケ目 内ハケ目	ハケ目・ナデ	良好	外 茶褐色 内 暗茶褐色		
57	弥	69.23	他	1号住	壺	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母	外ハケ目 内ミガキハケ目	ミガキハケ目・ナデ	良好	外 暗黄褐色 内 暗茶褐色		
58	弥	69.255	他	1号住	壺	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ目 内剥落	ハケ目・ナデ	良好	外 暗茶褐色 内 "		60～62は、鉢形の器形を呈する。60は完形品であるが、鉢に脚台を付けた特殊な器形を呈する。口径は18cm×21cmを測り、平面形は楕円形を呈する。器高は、16cm程度の高さを測る。底部から外反して立ち上がり、口縁部付近は、わずかに内湾し、口縁端部は平坦におさまる。60の脚部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底面は、上げ底状のわずかな凹面をつくる。壺形土器の底部に類似する。61・62には、煤が付着している。
59	弥	69.14	他	1号住	壺	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ目 内ユビナデ	ハケ目	良好	外 茶褐色～暗黄褐色 内 茶褐色～暗黄褐色		
60	弥	69.275	他	1号住	鉢	復元	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ目 内ハケ目	ハケ目・ナデ	良好	外 茶褐色～暗黄褐色 内 暗茶褐色		
61	弥	69.21	他	1号住	鉢	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母	外ハケ目 内ハケ目	ハケ目・ナデ	良好	外 茶褐色 内 暗茶褐色		
62	弥	69.145	他	1号住	鉢	口縁～ 胴部	石英・長石 黒雲母	外ハケ目 内ハケ目	ハケ目・ナデ	良好	外 暗茶褐色～暗褐色 内 暗褐色		

第13表 1号住居跡内出土石器観察表

番号	品種	出土区	標高 (m)	石材	最大長 (長径) (cm)	最大幅 (cm)	重さ (mg)	備 考
63	横刃形石器	1号住	69.345	粘板岩	5.9	10.9	108.27	63は、粘板岩製の横刃形のスクレイパーである。
64	パンチ	1号住	69.120	粘板岩	8.4	2.9	23.00	64は、細長い扁平な自然礫であるが、横位置に剥離が施される。
65	軽石製品	1号住	69.320	軽石	11.3	6.8	85.38	65～68は、軽石である。部分的に擦り面が観察される。
66	軽石製品	1号住	69.110	軽石	6.3	6.9	48.97	
67	軽石製品	1号住	69.150	軽石	11.3	8.5	87.75	
68	軽石製品	1号住	69.355	軽石	6.0	4.8	17.58	
69	凹石・敲石	1号住	69.150	安山岩	11.1	9.3	1070.00	69・70は、凹石、敲石である。69は、安山岩を使用した凹石であるが、敲石にも利用している。表裏とも、浅く広い凹みが存在する。側縁には、敲打痕がみられる。70は、半花崗岩を使用した凹石であるが、敲石にも利用している。表には浅く広い凹みが存在し、裏面にはわずかに凹んだ敲打痕が残る。側縁には敲打痕がみられる。
70	凹石・敲石	1号住	69.175	半花崗岩	11.2	9.3	865.00	
71	台石	1号住		砂岩ホルンフェルス	36.1	31.0		台石で、柱穴P3の北側に出土した。平坦面は、滑らかになって、部分的に敲打痕が確認される。
72	砥石	1号住		砂岩	30.0	11.6	3600.00	砥石で住居跡の中央ピット内からの出土である。よく利用され5面から6面にかけて研ぎ面がみられる。
73	投弾	1号住	69.150	土製	5.1	3.2	37.06	土製の投弾で、紡錘形（ラグビーボール状）を呈するが、最大径はほぼ中央に位置し、硬く焼きしめられ、先端の一部と最大部の一部が剥離欠損している。
74	礫（接合）	1号住	69.120	砂岩	13.0	12.8	1510.00 340.00	破碎礫である。この破碎礫は、人工的に打撃を加えて破碎した痕跡はみられない。住居跡の中央部の床面を中心に出土した破碎礫が、接合されたものである（第25図）。本来は一個体のものであるが、破碎礫が若干不足するため二個体となっている。接合礫を観察すると、火を受けた痕跡が強く残っている（第25図の網目部分）。つまり、火力で破碎した可能性が高い。

第5節 近代の調査

前回の調査と同様に、バイパス建設時の盛土に続いて、旧表層を掘り下げたところで、太平洋戦争中に建設された誘導路跡と、路面の排水用と考えられる溝跡、階段状の竪穴からなる防空壕跡が検出された。さらに、薬莢、銃弾などの軍需品に加え、陶器、磁器、ビン類などの日用品も出土した。

これらの遺構は、海軍鹿屋航空基地に付属する施設として建設されたものである。太平洋戦争中に一時的に使用されたものである。これらの施設については、戦時中の出来事を記憶している地域の人々が語り伝えるのみで、前回の調査以前は、公式な記録がほとんど無かった。しかし、前回の調査で、戦跡遺構(誘導路、溝、竪穴)が検出され、今回の調査結果は追加資料としての役割を持つ。

1 誘導路跡と溝跡(第26図、第29図)

誘導路は、航空機を爆撃から守るための掩体壕と滑走路を結ぶ道路である。当時を知る地域の住民によると、出撃の際は主に人力で移動させていたそうである。中原山野遺跡と、隣接する前畑遺跡では調査区を横切る形で検出されている。

中原山野遺跡では、誘導路跡がC - 2 ~ 5区から検出された。両側に溝を備え、一部碎石を敷いた道路である。ほぼ北を向いて走り、C - 4・5区で道幅が20m ~ 22mへと広がる。

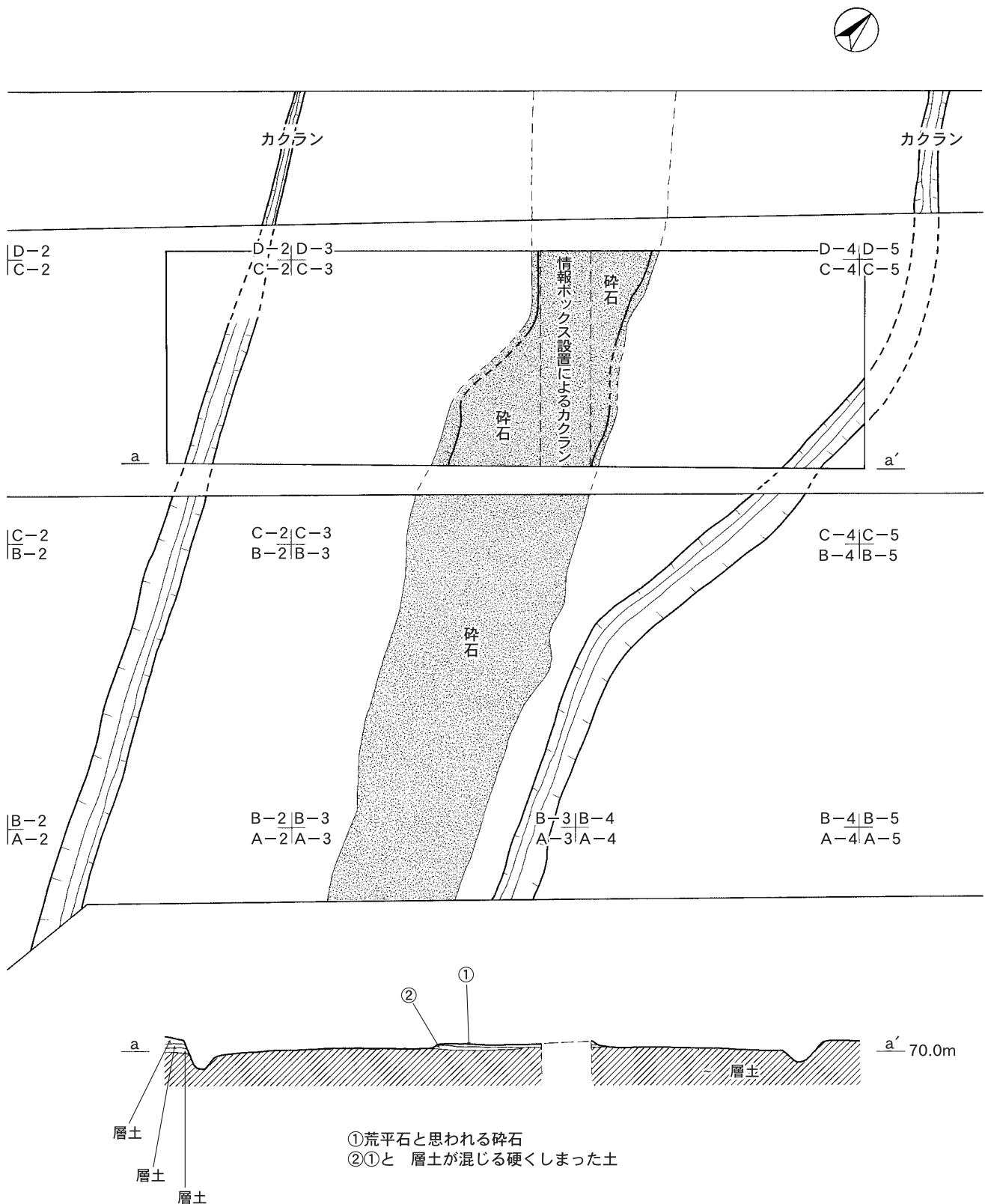
しかし、国道220号鹿屋バイパス建設時の情報ボックス設置の際に、碎石を敷き詰めていた部分の一部が、攪乱されている。

両側の溝跡は、検出面からの深さは約1.2m ~ 1.3mを測り、路面からの深さは0.6m ~ 0.7mを測る。東側の溝は若干東よりに曲がって走り、途中で道路が分岐する可能性がある。路面には、碎石を約5mの幅で敷いている。碎石は、赤褐色の軟質の特徴あるもので、鹿屋市荒平産の岩石を用いている。

2 溝状遺構と防空壕跡(第27図)

C - 6・7・8区から、近世以降のものと思われる溝跡を検出した。検出状況や埋土より、防空壕が掘られる前から存在し、防空壕が埋め戻される前に埋められていたことがわかる。

C - 7区から、溝跡を横断する形で階段状の竪穴が検出された。階段状の掘り込みが10段残存しているが、戦後の耕地整備により上部全体が削平されている。また、残存状態の良い2段目の長辺は132cmを測り、短辺は20cmを測る方形である。9段目の長辺は110cmを測り、短辺は40cmを測る。3段目から8段目にかけて長辺が次第に短くなりつつ短辺が伸びる傾向がある。最下段の10段目は他の段とは形状が異なり、上底が70cm、下底が90cmで高さが70cmの台形である。また上部は削平されているが10段目から上方に150cm超の空間が確保されていたと考えられる。3段目からは、床着で鉄片が出土した。



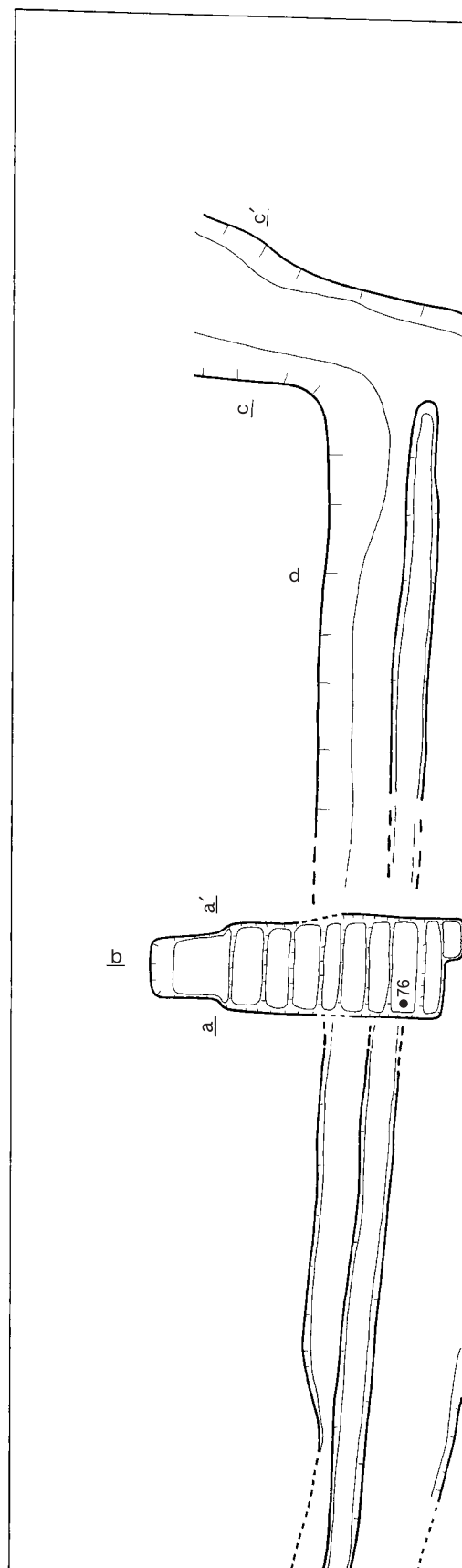
第26図 誘導路跡と溝跡実測図



D-6|D-7
C-6|C-7

D-7|D-8
C-7|C-8

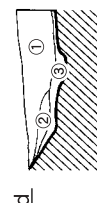
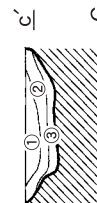
D-8|D-9
C-8|C-9



C-6|C-7
B-6|B-7

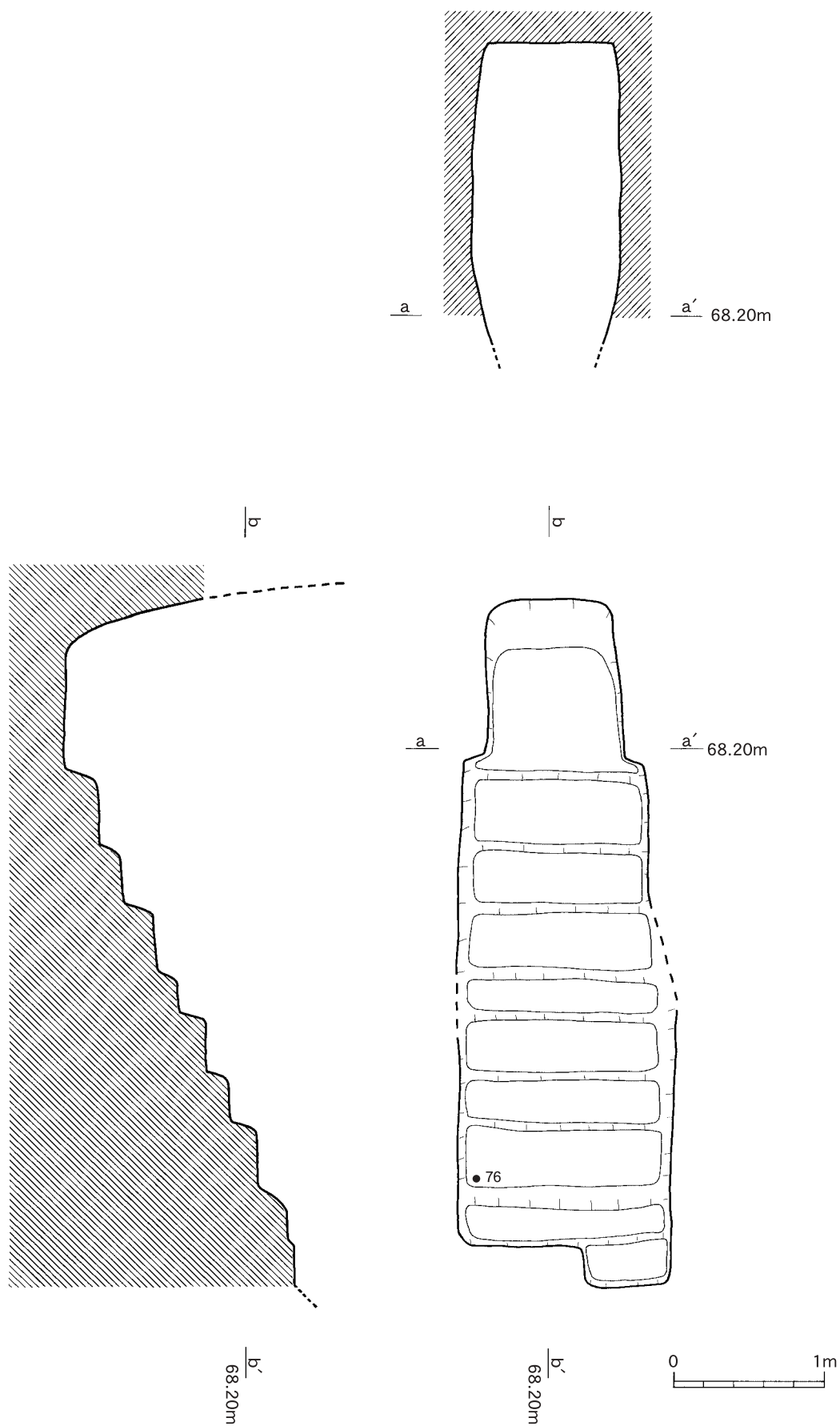
C-7|C-8
B-7|B-8

C-8|C-9
B-8|B-9

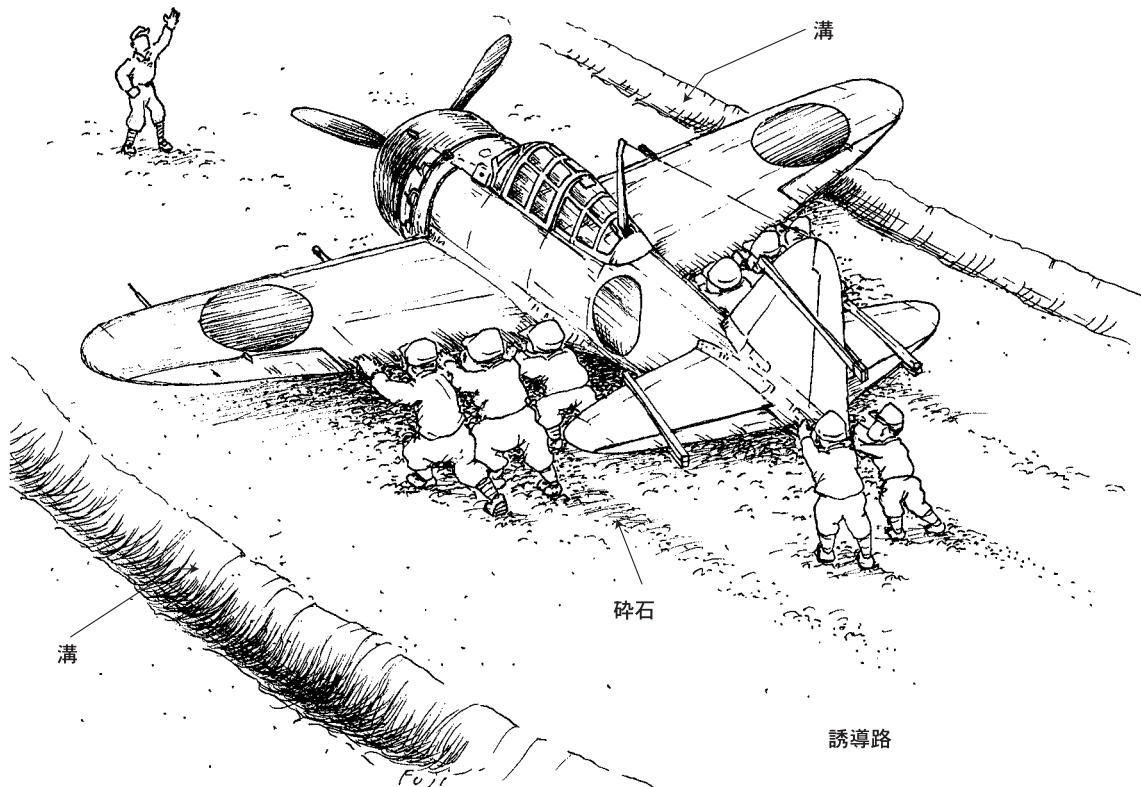


- ① シラス混じりの 層土
- ② アカホヤ混じりの 層土
- ③ , 層混じりの黒褐色土

第27図 溝状遺構と防空壕配置図



第28図 防空壕跡実測図



第29図 誘導路想像図

3 出土遺物

近代の遺物を含む 層からは、戦時中の物と考えられる、薬莢が4点、弾丸が1点、鉄片が2点、陶磁器類の破片が8点、出土した。

(1) 薬莢 (第30, 31図 70~73)

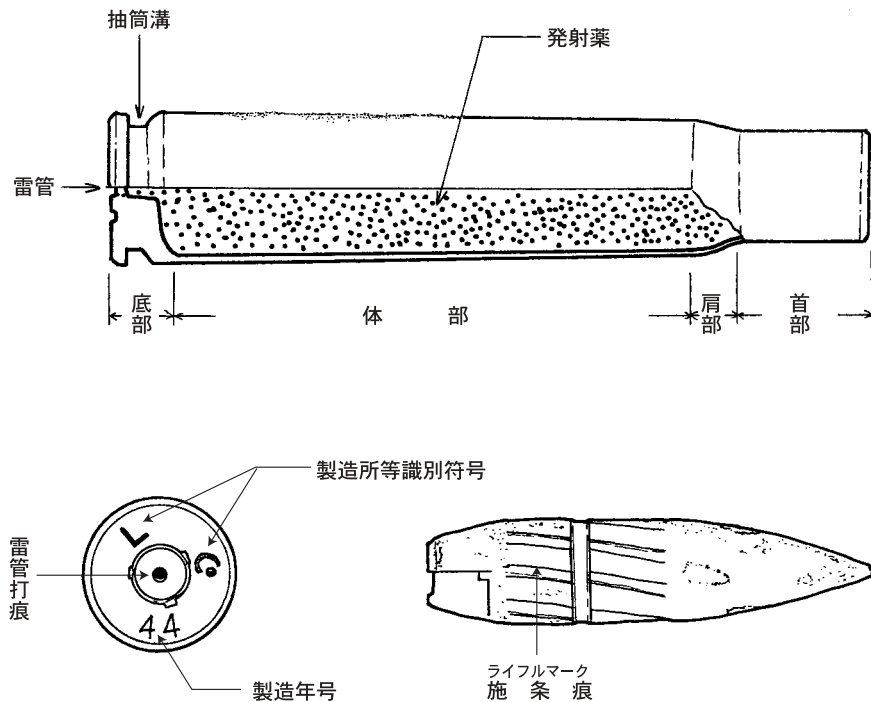
薬莢の構造は、次のようになっている。

底面の上は細くなった、抽筒溝があり、次が体部であるが中は空洞である。この分に火薬がつめられる。肩部で若干細くなり、首部は外形1.4cmを測る。製造国と使用国はアメリカ合衆国であり、使用火器は、アメリカ軍の航空機に広く装備されていた『12.7mm重機関銃』であると考えられる。

薬莢は、前回の調査で出土した小型の物「西原掩体壕跡」の区分参照が4個と、今回、更に小型の薬莢が1個出土した。小型の物(70~73)は、最大直径2.0cm、全長10cmを測る。底面は平坦で、中央には雷管とその打痕が確認できる。70については、雷管の周囲には数字やローマ字の記号は打ち込まれていないが、71の雷管の周囲には、L、C(不鮮明)、44などの記号がつけられている。製造所識別符号と製造年(44=1944年)を示す物であると考えられる。

72の雷管の周囲には、同様にM, 4などの記号がつけられている。73は、前回の調査時には出土せず、新たに出土した型である。最大直径1.3cmを測るが、ペンチかニッパーのような切断工具を用いて切断しており、全長は、計測できない。

73の雷管の周囲には記号は付けられていない。



第30図 薬莖の構造と弾丸

(2) 弾丸 (第31図 74)

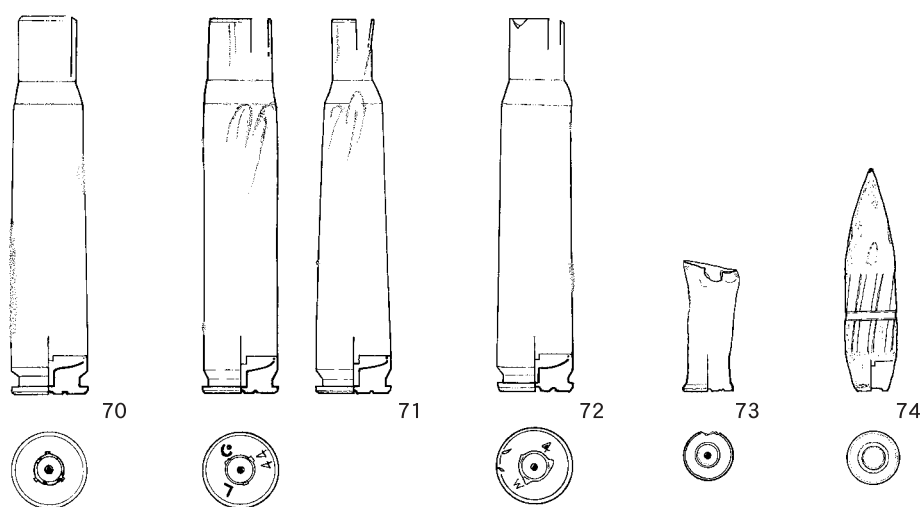
弾丸は、C - 7区の埋土中から発見された。直径1.27cm、長さ5.83cm、重さ40.93gである。先端は鋭く尖り、後ろは少し細くなり平たくおさめる。弾丸の表面の中央よりやや後ろの周囲には、弾丸が発射された時につく施条痕(ライフルマーク)が明確に確認できる。

(3) 鉄片 (第32図 75, 76)

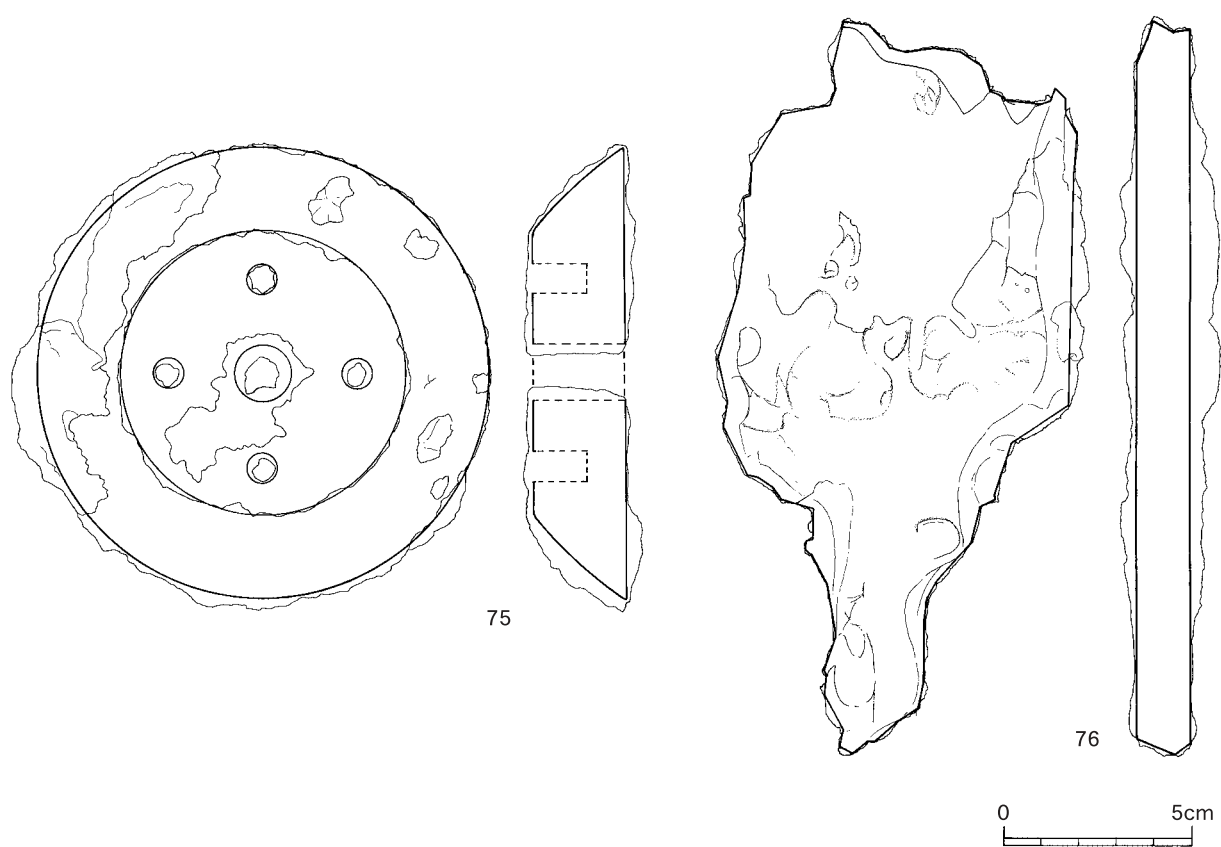
鉄片が2点出土し、爆弾片の可能性も考えられる。

75はC - 7区から一括で取り上げた。腐食が進み、錆びで覆われている。下場の直径122.4mm、上場の直径は77.2mm、厚みは24.4mmを測る円柱台状の鉄製品である。重量は1559gである。中心付近には、腐食の少ない部分で測り直径148mmの貫通する穴がけられている。また、中心付近の穴から25mm四方に4箇所ボルト穴のような貫通しない深さ15mmを測る穴がけられている。

76は防空壕と思われる縦穴の階段から床着で出土している。75と同様に、表面の腐食が進



第31図 薬莖・弾丸実測図



第32図 鉄片実測図

み錆びで覆われている。計測は比較的腐食の少ない部分を選んで行なった。191.5mm×82.0mm，厚みは13.8mmを測り，重量は948gである。

(4) 陶磁器類（第33図 77～84）

磁器（77～82）と陶器（83～84）に分けられる。

77は，底の外径が4cmを測る。高台付根から丸みをおびて口縁部へ立ち上がると思われる。

78は，口径が11.0cmを測る碗である。高台付根から丸みをおびて口縁部へ立ち上がる器形となる丸型碗である。

79は，口径が11.6cmを測る皿である。口唇部が太さ1mmの紅線で縁取られている。内面の文様の染付けが下絵のみで色づけされていない部分が残されている。

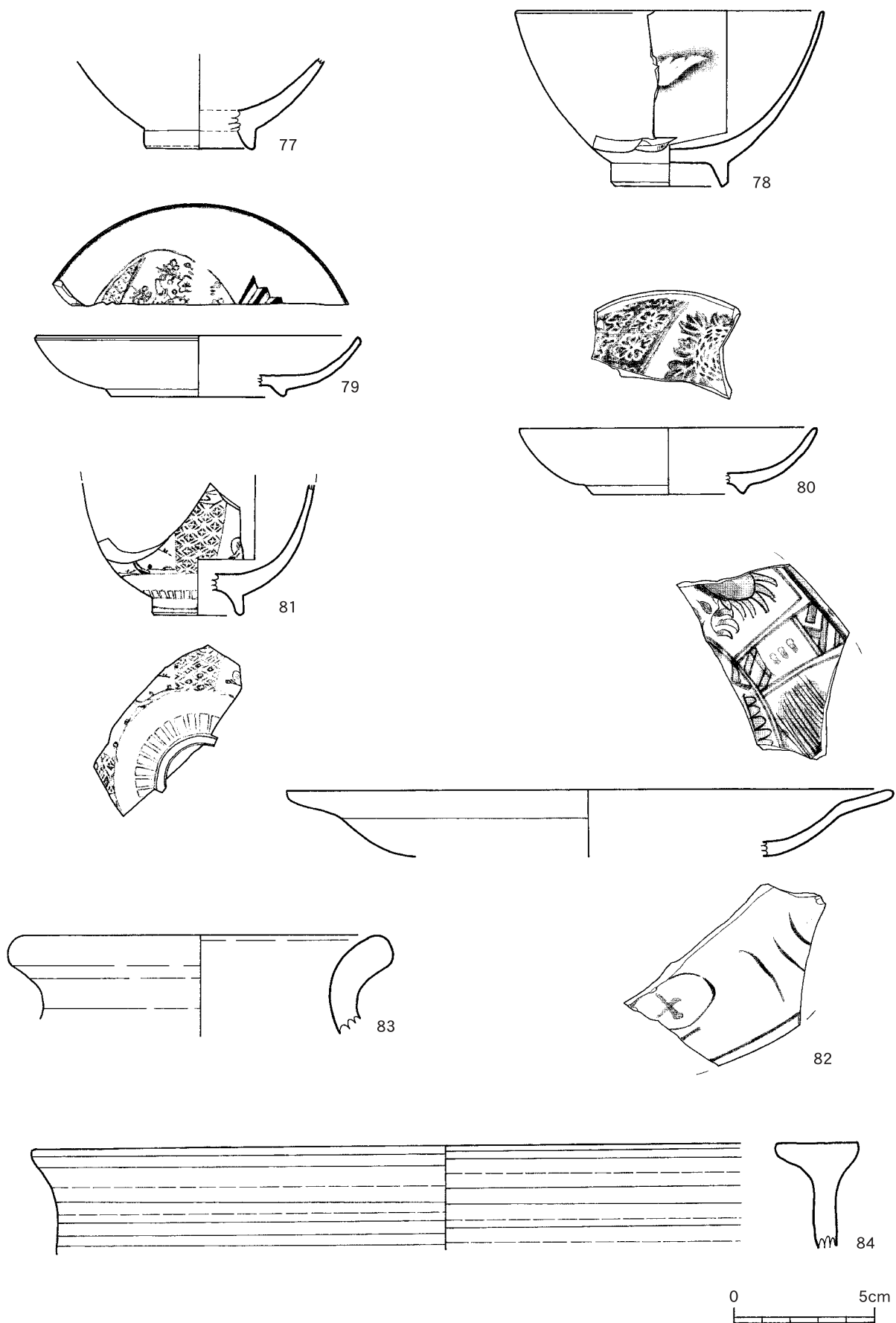
80は，口径が10.6cmを測る皿である。色絵がつけられている。

81は，口径が8.2cmを測る筒丸の小碗である。染付けで絵柄が描かれている。

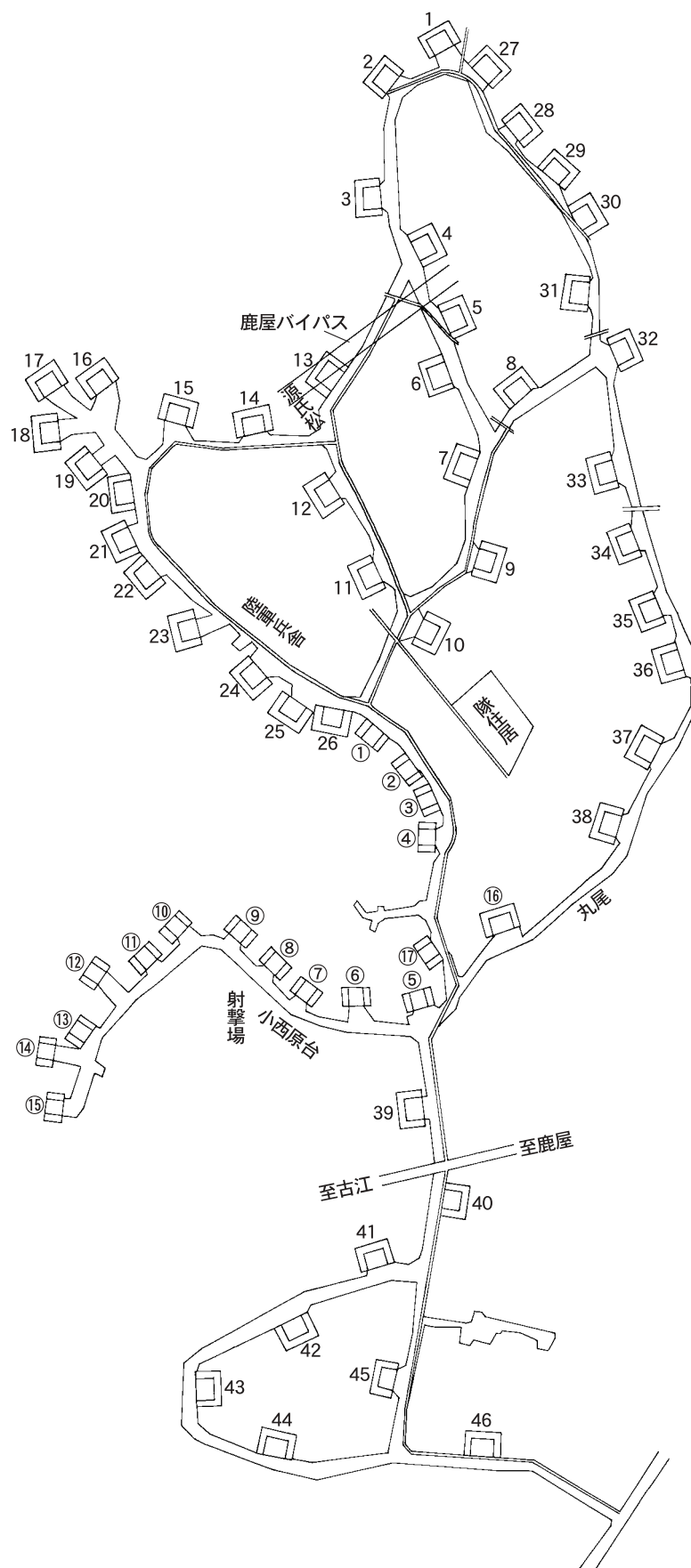
82は，口径が21.8cmを測る皿である。染付けで絵柄が描かれている。

83は，苗代川系の薩摩焼である。釉薬や口唇部の形から，近現代のものと思われる。

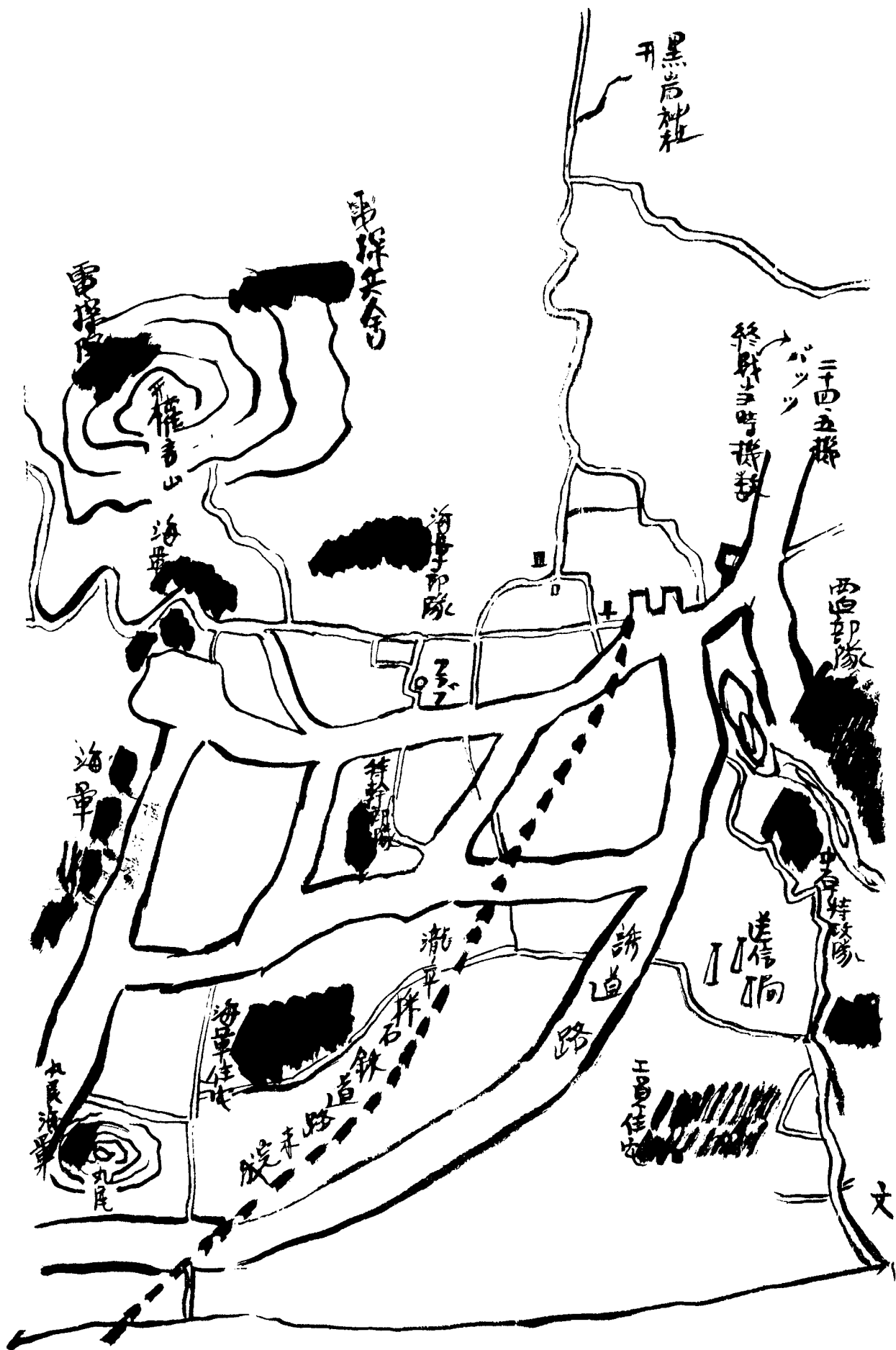
84は，苗代川系の薩摩焼である。釉薬や口唇部形から近世のものが，何らかの要因で埋土に混入したものであると考えられる。



第33図 近現代の陶磁器類実測図



第34図 西原掩体壕と誘導路配置図



第35図 郷之原地区の軍隊配置図（昭和20年1月 原田盛雄氏作成）

第Ⅳ章 まとめ

縄文時代

前回の調査で早期に該当する 層(アカホヤ火山灰層下層)と晩期に該当する 層が確認されていたが、今回は確認されなかった。よって、遺物の分布は、用地外の南側から西側の前畑遺跡側に広がるものと考えられる。しかし、新たに縄文時代前期から後期の包含層である 層(C-2・7・13・14区)から遺物が出土した。出土した土器は、包含層と土器の特徴から、前期から中期にかけての貝殻条痕文土器と思われる。

石器は、敲石が1点出土した。加工を加えないまま、その先端部を使用したものとみられる。ホルンフェルス製であることから、石器としての使用に適した石材を選んでいるものと思われる。遺物も40点あまりと少なく遺構も検出されなかった。

弥生時代

今回、掘立柱建物跡1棟と土坑5基を検出した。前回の調査では、花卉形住居跡(「中原山野遺跡」1号住居跡)が検出されていたが、掘立柱建物跡の検出は初めてである。柱穴を6基、 層上面で検出し、うち5基は掘立柱建物跡と思われ、埋土は 層の黒褐色である。主軸は、ほぼ東西方向に沿って建てられており1間×2間のものが1基検出された。隣接する前畑遺跡では、弥生時代中期後半の掘立柱建物跡が8棟検出されたが、今回検出された掘立柱建物跡と柱間がほぼ等しく、梁間の方向もほぼ平行である。

土坑5基は、 層上面で検出したが、埋土には前回の調査で報告された、1号住居跡の5層(黒色・茶褐色・黒褐色・茶褐色・黄褐色)の軽石混じりの埋土と同様に、 層の黒褐色土に 層の黄白色軽石が含まれている。掘立柱建物と花卉形住居・土坑では、埋土が異なるが、掘立柱建物が、 層の堆積部分から外れた、地盤が硬く安定した場所に建てられていた可能性があり、使用された時期の違いを示すかは検討を要する。

出土した土器は、甕形土器と壺形土器である。遺物の形態から弥生時代中期後半の山ノ口式土器と思われる。壺形土器は2種類の口縁部が出土した。口縁部上面が長く丸みを帯びているものと、口縁部が立ち上がりながら大きくラッパ状に外反し、口縁部端面は一条の沈線を廻らすことで凹んでいるものである。胴部には三角突帯とM字突帯があった。

石器は、打製石斧が2点出土した。そのうち1点は基部から柄部が残存し、柄部結束部分と刃部の間で破損している。2点とも刃部から柄部が摩滅し、使用された痕跡を残す。同様の石器は前畑遺跡や周辺遺跡で出土している。

中原山野遺跡は、丘陵を挟んで前畑遺跡と隣接している。両遺跡からは、掘立柱建物跡が検出されるなどの共通点があるが、花卉形住居跡と前畑遺跡のベッド状遺構を伴う方形の竪穴住居跡のように、時期差を示すと考えられる遺構も検出されている。このように、隣接台地上に存在する中原山野遺跡、前畑遺跡、中ノ原遺跡、中ノ丸遺跡、王子遺跡の遺構・遺物を比較検討することで鹿屋原台地における弥生時代中期後半の生活を知る手がかりが得られると思う。また、肝属川流域からは、弥生時代の遺跡が多く発掘されており、主な遺跡を地図上に掲載する。(第14表、第36図)

第14表 肝属川流域の弥生時代の主な遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	標高
1	榎木原	鹿屋市高須町	台地	弥生前期末～中期	竪穴住居跡 5 基、亀ノ甲式土器、打製土掘具、石錘	46m
2	吉ヶ崎	鹿屋市串良町吉ヶ崎	台地	弥生中期	竪穴住居跡 4 基（焼失住居跡 1 基）セットの土器群、磨製石鏃、石斧	20m
3	下堀	曾於郡大崎町持留岡別府	台地	弥生中期	大型住居跡 2 基、竪穴住居跡 5 基掘立柱建物跡（1 間 × 1 間）	60m弱
6	波見西	肝属郡肝付町高山波見西	自然堤防	弥生中期後半	竪穴住居跡 5 基、土器、軽石製品、砥石、片刃磨製石斧	3 m
5	西牟田	肝属郡東串良町川西西牟田	低地	弥生中期末～後期初頭	竪穴住居跡 1 基、土坑 1 基、壺形土器、土製勾玉、軽石製品	5 ～ 6 m
4	沢目	曾於郡大崎町益丸沢目	砂丘	弥生中期、弥生終末～古墳初頭	竪穴住居跡48基（弥生中期） 住居跡 5 基（弥生時代終末～古墳時代初頭）	7 m

A 飯盛ヶ丘 B 前畑 C 中原山野 D 中ノ丸 E 中ノ原 F 王子 については第 1, 2 表参照のこと。

近代

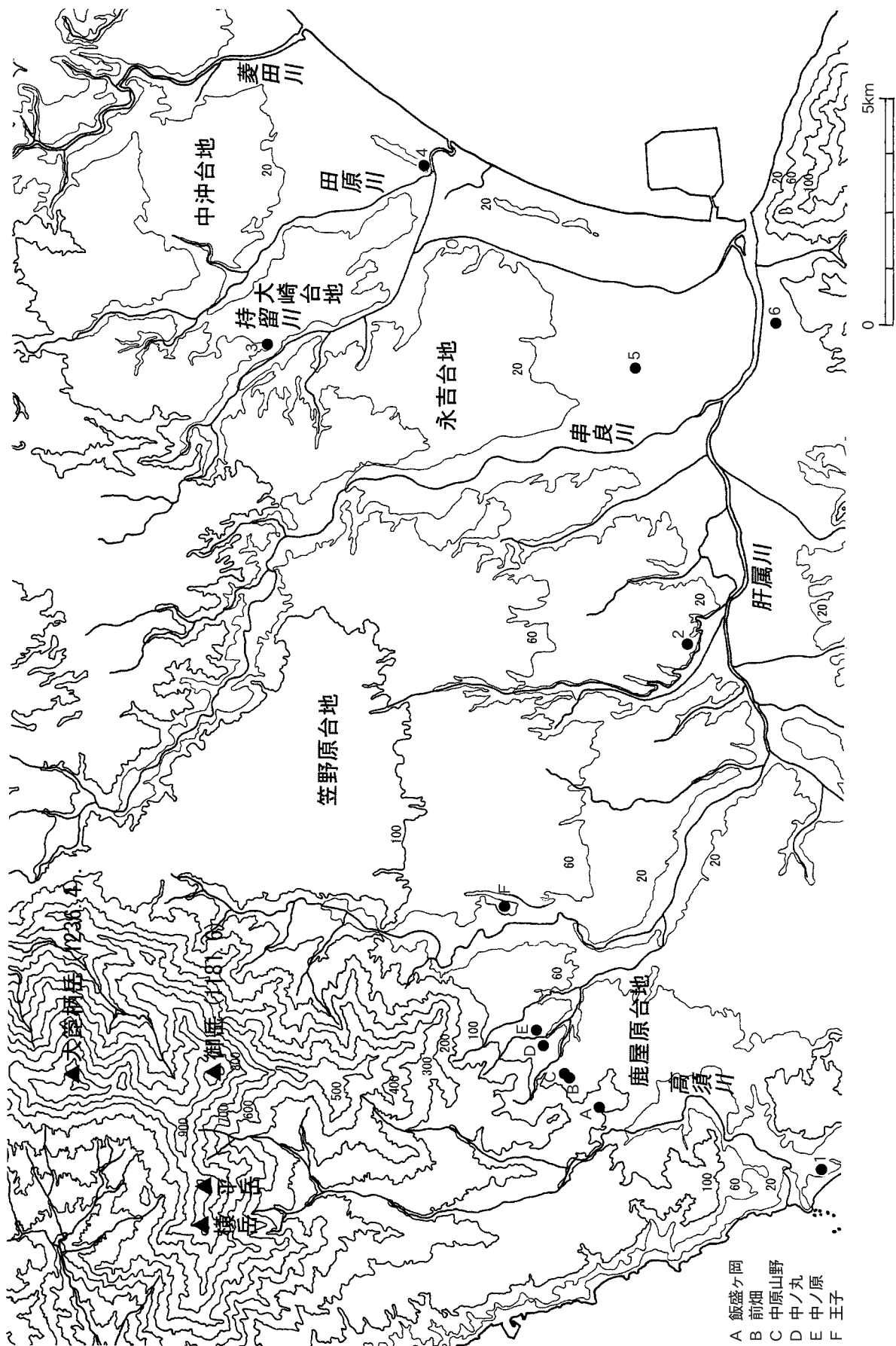
鹿屋航空隊は、昭和11(1936)年4月1日に開隊され、多くの作戦に参加している。日中戦争(1937～45)が勃発すると、昭和12(1937)年8月14日に台北基地を出撃し、広徳・徐州を爆撃した。その後、南京や上海周辺、華南方面への渡洋爆撃を敢行し、国民党政府の拠点に対する爆撃を担当した。

昭和16(1941)年に太平洋戦争が始まると、マレー沖海戦やフィリピン方面への爆撃など、南方作戦を担当した。その後、戦域の拡大によりラバウル基地を拠点に南西方面への作戦に参加し、米軍との戦闘で戦力を大きく消耗した。部隊改編により部隊名が変更され、基地もたびたび移っているが、海軍の航空作戦の最前線で戦っていた部隊であるといえよう。よって、配備される航空機にも比較的恵まれ、他の部隊が主力として九六式陸攻を使用していた時期にも、新式の一式陸攻の配備が進められていた。

航空戦力の再編により鹿屋航空隊が廃止された後に、鹿屋航空基地には、戦局の悪化と本土決戦に備えて、1945(昭和20)年に第5航空艦隊の司令部が置かれ、特攻作戦の中核の役割を担うこととなった。

このような役割を担う航空基地がある鹿屋市は、1945(昭和20)年3月18日以降、連日のごとく空襲にさらされ、52日間に268回の空襲を受けている。現在の海上自衛隊鹿屋航空基地に隣接する野里小西遺跡では、当時の激しい爆撃の様子を物語る4発の爆弾破裂痕が検出されている。連日の激しい空襲から航空機を守るため、基地周辺には掩体壕が多数建設され、掩体壕から滑走路まで誘導路で結ばれていた。前畑遺跡と中原山野遺跡を発掘調査する際に検出された「掩体壕跡」、「誘導路跡」、及び「防空壕跡」はその一部である。

また、本土最南端の太平洋側に位置する大隅半島は、10kmに及ぶ砂浜の志布志湾があり、沖縄に続く戦場になる可能性が高かったため、旧陸海軍によって本土防衛のための軍事施設が多数建設され、現存する戦争遺跡も多い。(第37図)



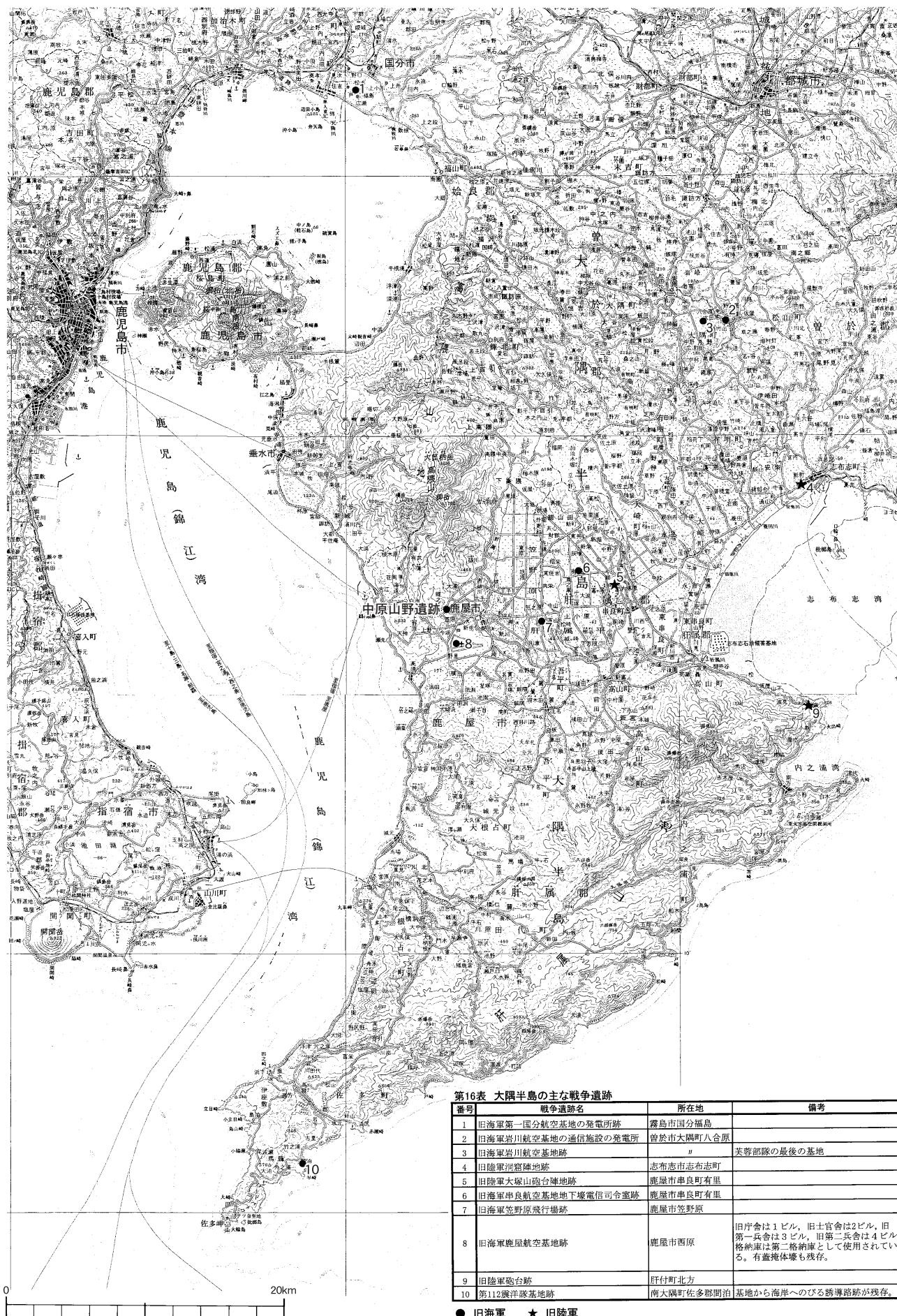
第36図 肝属川流域の弥生時代の主な遺跡

第15表 海軍鹿屋航空基地と海軍鹿屋航空隊のあゆみ

西暦（元号）	海軍鹿屋航空基地，海軍鹿屋航空隊のあゆみ	備 考
1936(昭和11)年	4月 開設	2月 2 26事件発生
1937(昭和12)年	7月 鹿屋航空隊 第1連合航空隊に編入	7月 日中戦争勃発 台湾台北基地，海南島三亜基地，サイゴン基地へ進出
1938(昭和13)年	12月 鹿屋基地に帰還し，連合艦隊に復帰	4月 国家総動員法公布
1939(昭和14)年	第15航空隊を編成し，第3連合航空隊に編入	5月 ノモンハン事件発生
1940(昭和15)年	零式艦上戦闘機配備	1月 漢口へ進出 12月 太平洋戦争開戦
1941(昭和16)年	1月 第11航空艦隊，第21航空戦隊に編入 10月 鹿屋基地に第11航空艦隊司令部設置	
1942(昭和17)年	10月 鹿屋航空隊を第751航空隊と改称 (第21航空戦隊所属)	6月 ミッドウェー海戦 ラバウル，カビエン，ブカ，テナン等の基地へ進出
1943(昭和18)年	9月 751航空隊，第25航空戦隊に編入	再びラバウル進出 ソロモン，ニューギニア方面への作戦に参加
1944(昭和19)年	3月 第26航空戦隊に編入 7月 鹿屋航空隊廃止（豊橋へ移動）	トラック島へ後退 7月 サイパン島陥落 11月 本土爆撃開始
1945(昭和20)年	2月 第5航空艦隊の司令部が設置 (特攻機70隊445機，828名が出撃)	4月 米軍，沖縄島上陸 8月 広島，長崎に原爆投下 ソ連参戦 ポツダム宣言受諾

【参考文献】

- 鹿児島県教育委員会 1985：『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（34）「王子遺跡」
- 鹿児島県教育委員会 1989：『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（48）「概要編・榎木田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・川ノ原遺跡」
- 鹿児島県教育委員会 1989：『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（52）「中ノ原遺跡（ ）・中原山野遺跡・西原掩体壕・川ノ上遺跡・前畑遺跡」
- 鹿児島県教育委員会 2005：『先史・古代の鹿児島』
- 鹿屋市教育委員会 1997：『鹿屋市埋蔵文化財調査報告書』（45）「中原山野遺跡」
- 鹿児島県教育委員会 1990：『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（52）「中ノ原遺跡（ ）」「中原山野遺跡」「西原掩体壕」
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006：『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（100）「野里小西遺跡」
- 鹿屋市史編纂委員会 1965：『鹿屋市史』
- 鹿屋航空基地資料館連絡協議会 2003：『鹿屋航空基地資料館 10周年記念誌』「魂のさけび」
- 前迫亮一 2003：「発掘された鹿児島県の戦争関連資料について - 幕末からアジア太平洋戦争終結頃まで - 」『鹿児島考古第37号』鹿児島考古学会
- 坂水茂樹 2005：「戦争遺跡に関する考察 - 鹿児島県における戦争遺跡の意義とその活用方法について - 」『研究紀要・年報 縄文の森から 第4号』鹿児島県立埋蔵文化財センター



第37図 大隅半島の主な戦争遺跡

掲載地域の市町村合併一覧

合併後の市町名	合併した日	合併前の市町村名
鹿児島市	平成16年11月 1日	鹿児島市, 吉田町, 桜島町, 喜入町, 松元町, 郡山町
錦江町	平成16年11月 2日	大根占町, 田代町
南大隅町	平成16年11月 3日	根占町, 佐多町
曾於市	平成16年11月 4日	大隅町, 財部町, 末吉町
肝付町	平成16年11月 5日	内之浦町, 高山町
霧島市	平成16年11月 6日	国分市, 溝辺町, 横川町, 牧園町, 霧島町, 隼人町, 福山町
鹿屋市	平成16年11月 7日	鹿屋市, 輝北町, 串良町, 吾平町
志布志市	平成16年11月 8日	松山町, 志布志町, 有明町

写真図版



調査風景（平成17年度 東側から）



調査風景（昭和62年度 西側から）



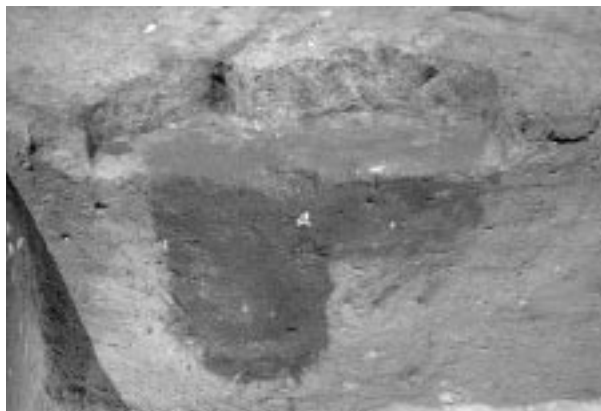
土層断面 (D-14区 東壁)



貝殻条痕文土器出土状況 (C-7区)



掘立建物跡検出状況（C・D-13区）



P 1



P 2



P 4



P 3

写真図版 4



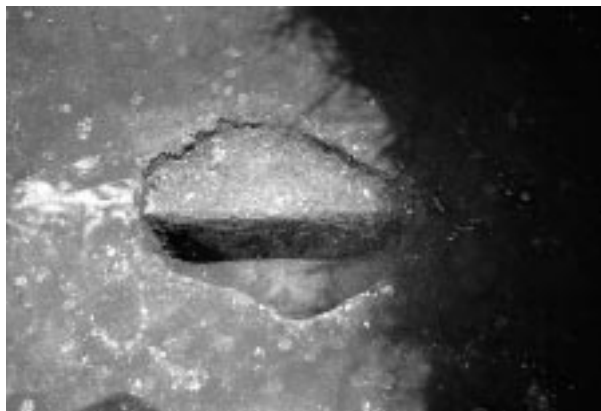
Ⅲ層 遺物出土状況（C-11・12区）



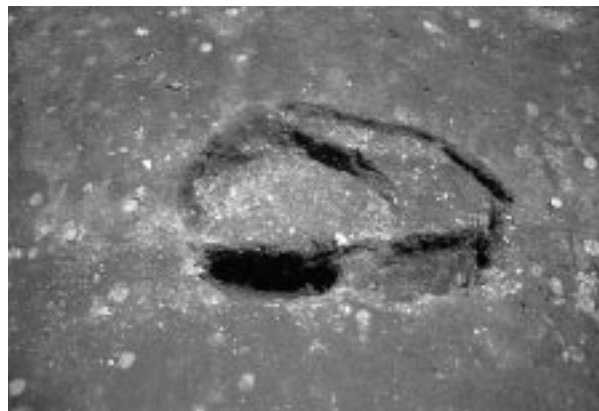
打製石斧出土状況（C-13区）



土坑 検出状況 (C・D-11・12区)



土坑 1



土坑 2



土坑 3



土坑 4



防空壕跡検出状況（C－7区 東側から）



防空壕跡完掘状況（C－7区 東側から）



溝状遺構検出状況（東側から）



葉莖出土状況



溝状遺構完掘状況（手前は防空壕跡 東側から）

写真図版 8



誘導路跡・溝跡完掘状況（西側から）



東側溝跡完掘状況と断面（北側から）



西側溝跡完掘状況と断面（北側から）



誘導路跡礫敷部分（北側から）



誘導路跡礫敷部分（南側から）



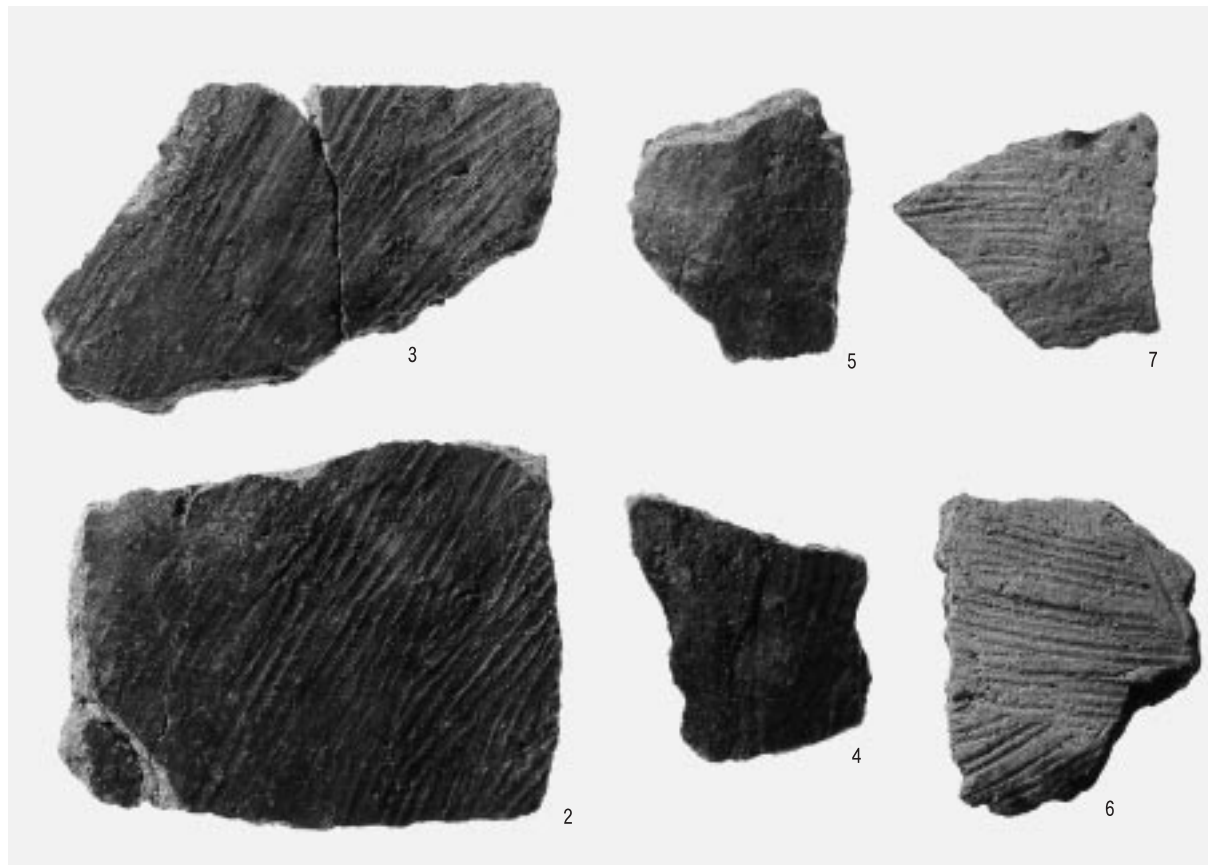
1号住居跡全景（中原山野遺跡）



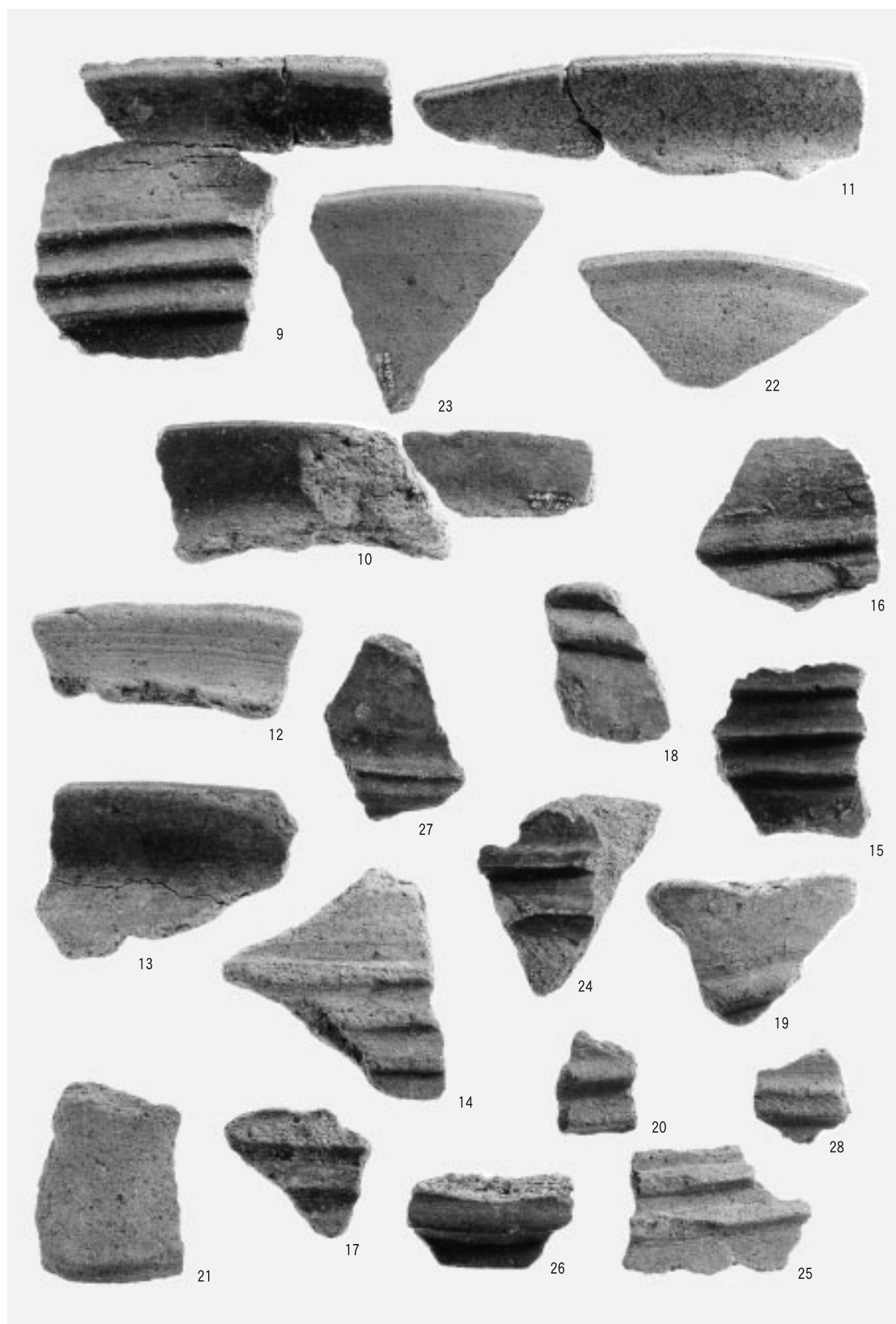
誘導路跡・溝跡（中原山野遺跡）



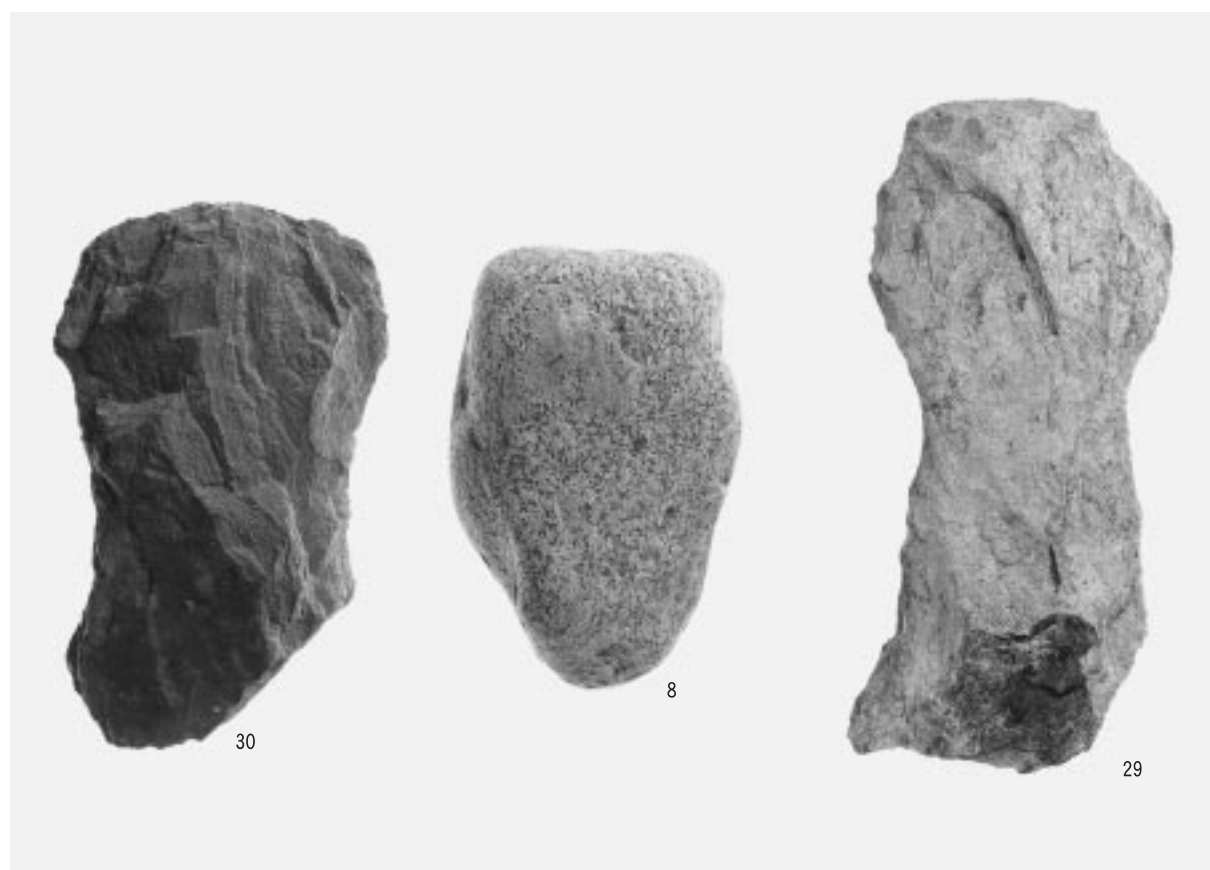
貝殻条痕文土器(1)



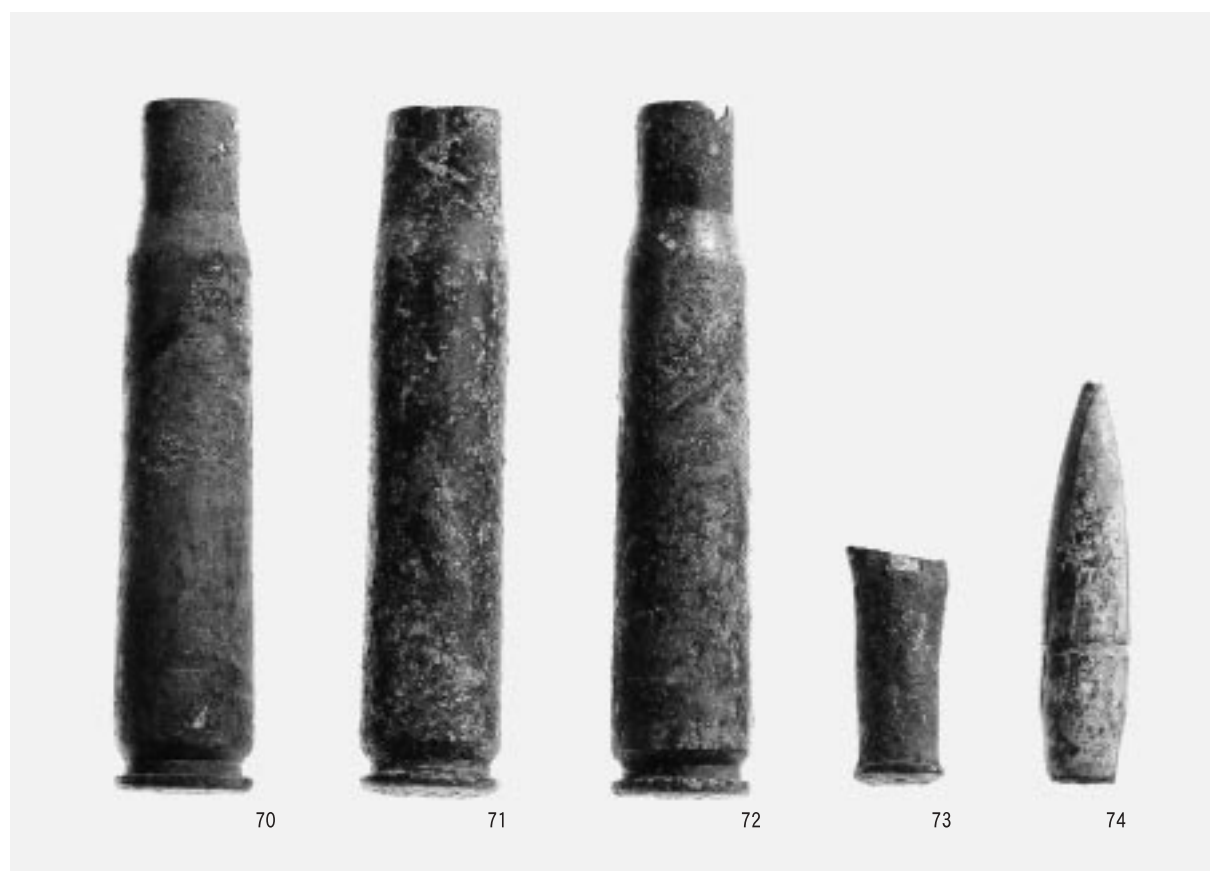
貝殻条痕文土器(2)



弥生土器



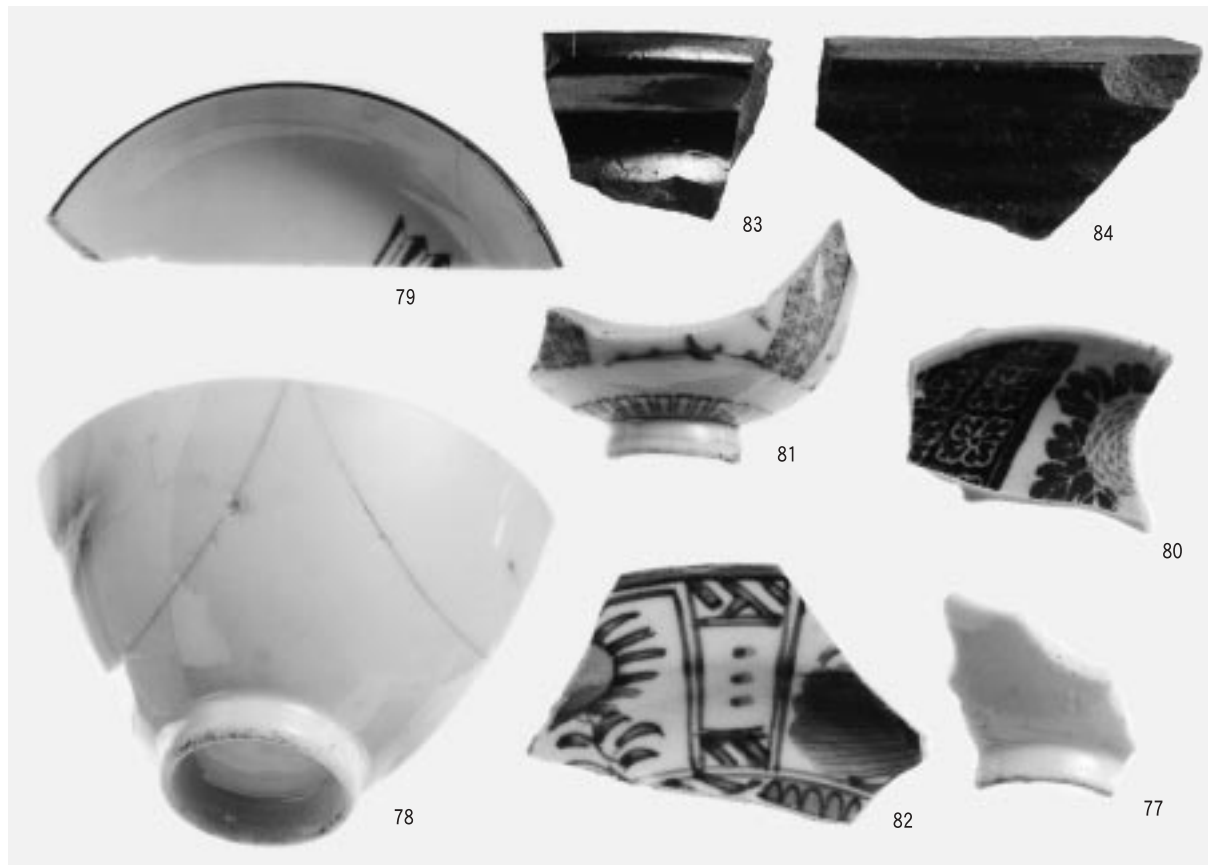
打製石斧・敲石



薬莖・銃弾



鉄片



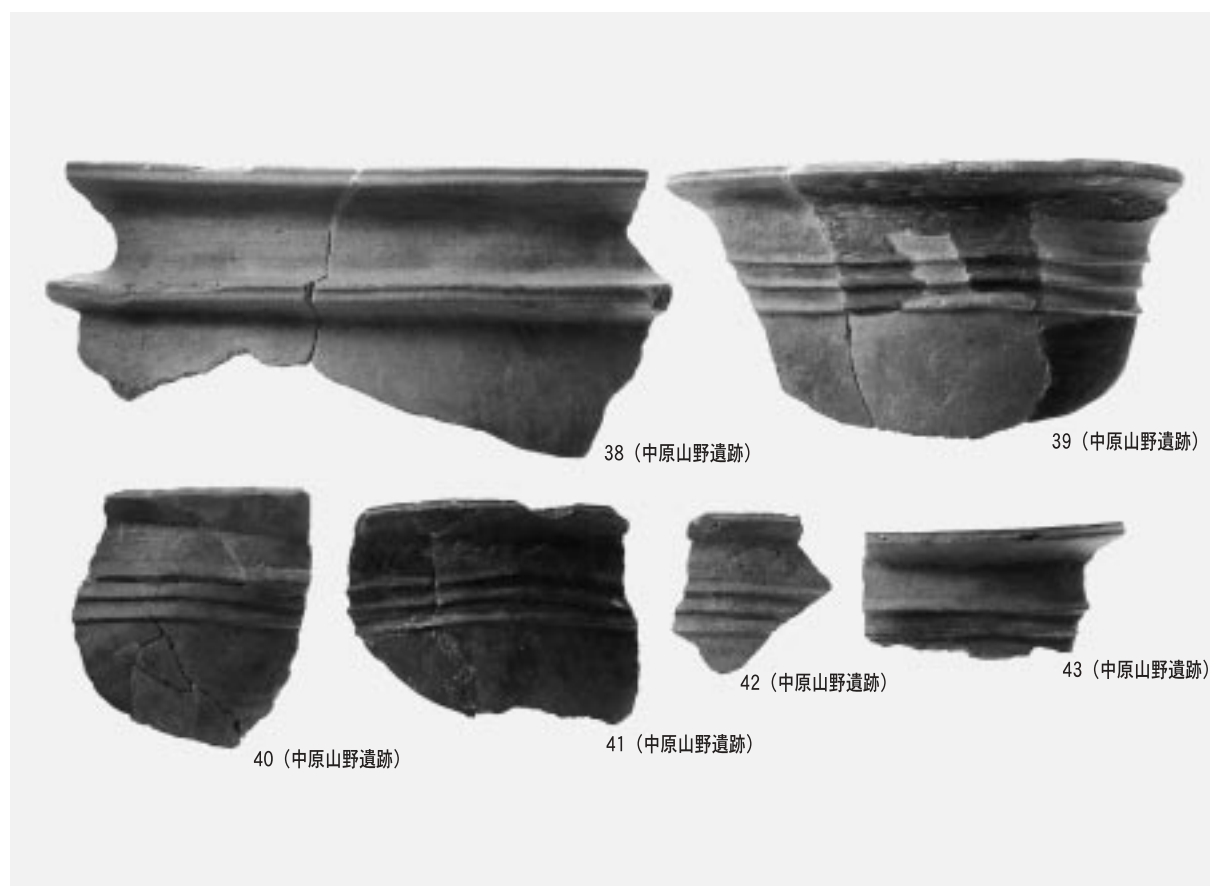
近代の陶磁器類

36 (中原山野遺跡)



37 (中原山野遺跡)

1号住居跡出土遺物(1)

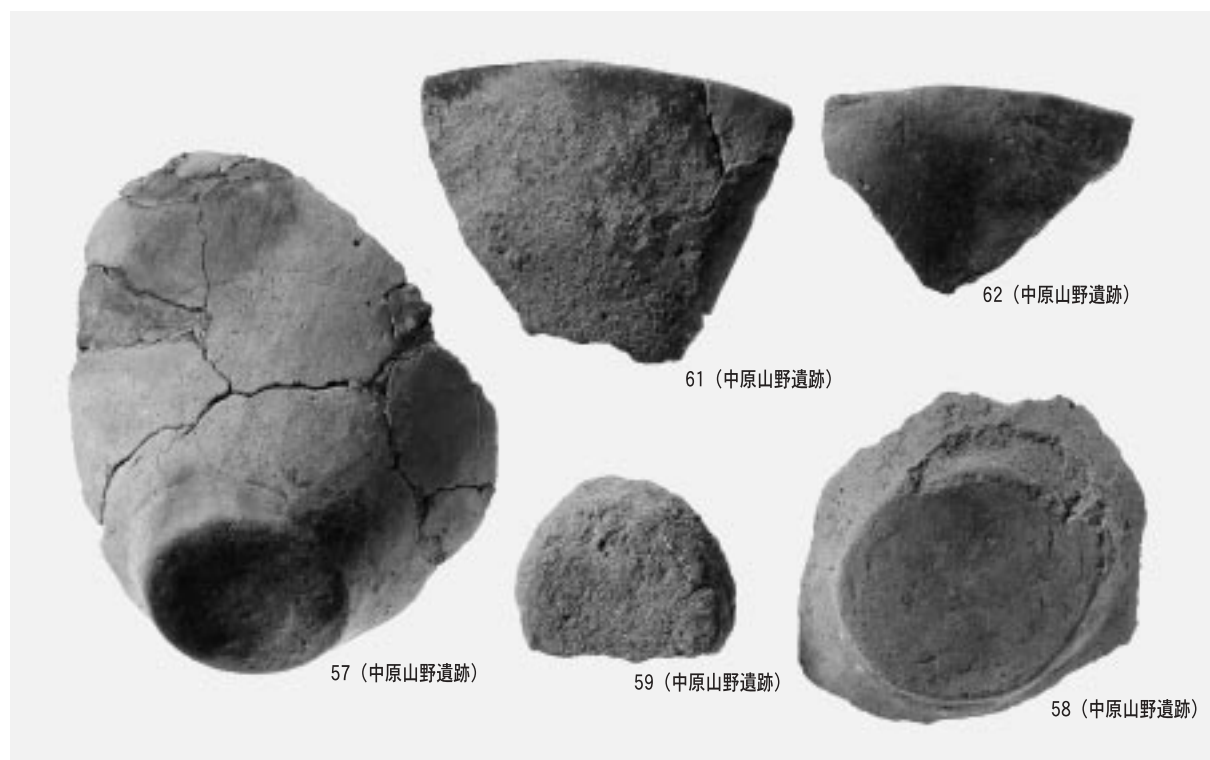
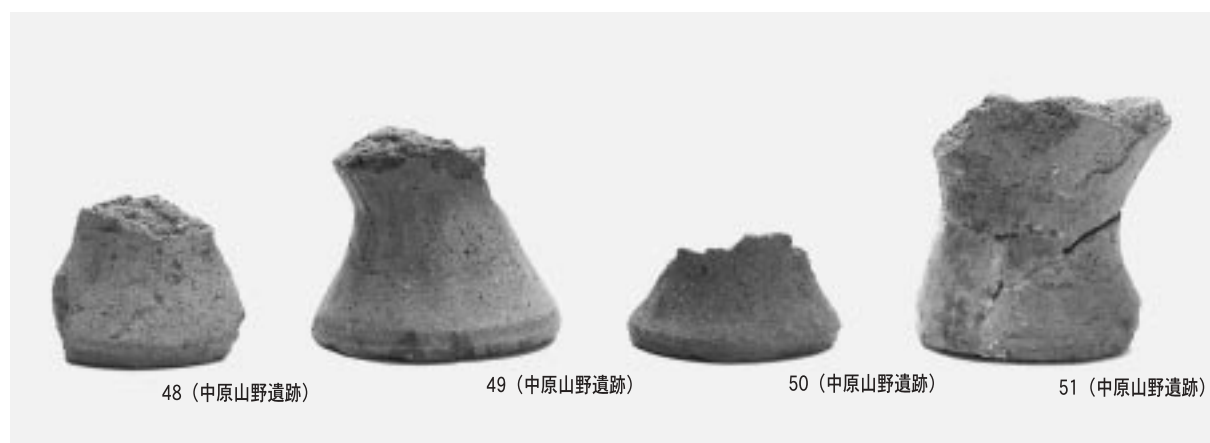
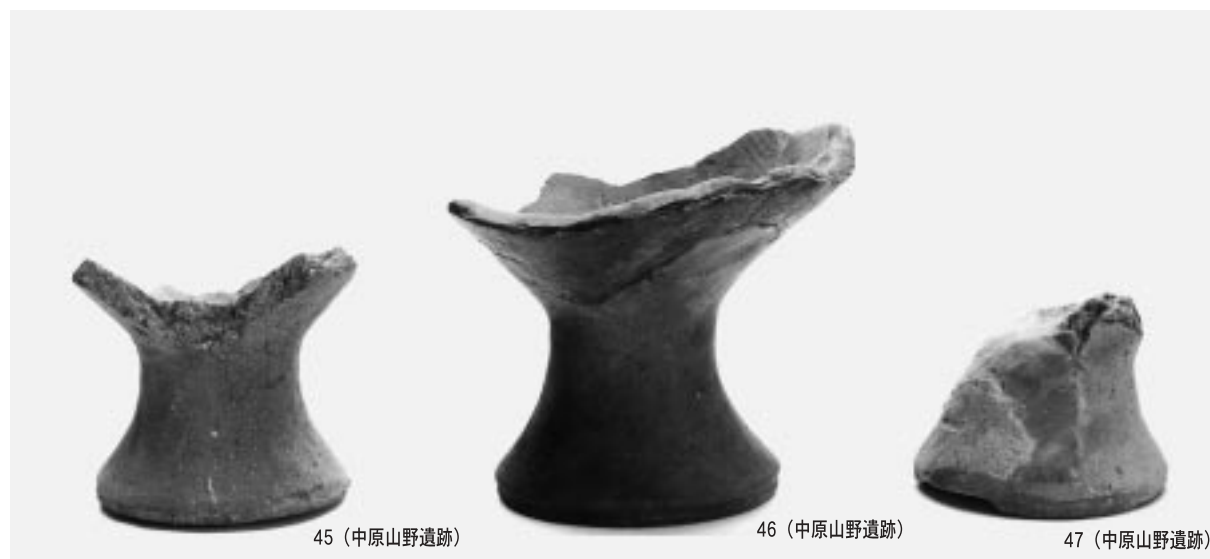


1号住居跡出土遺物(2)

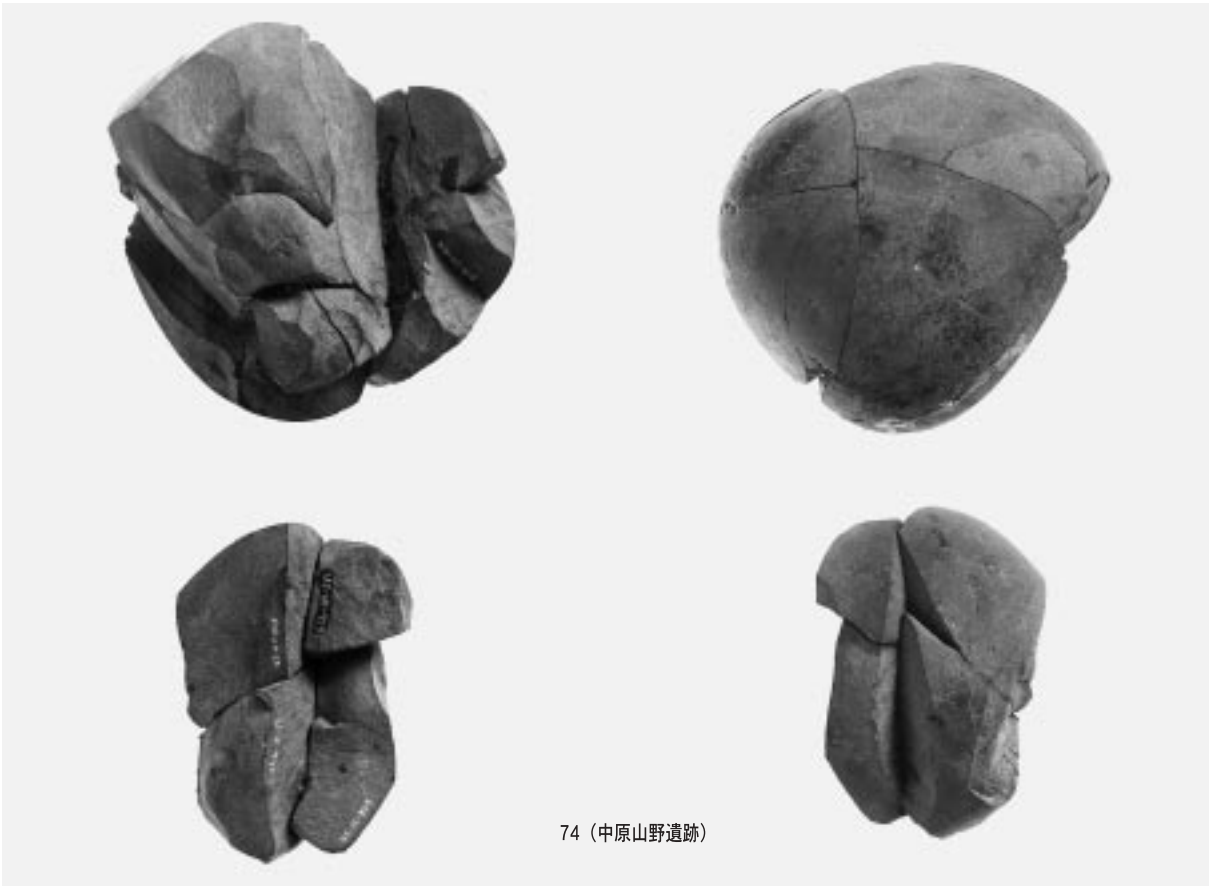
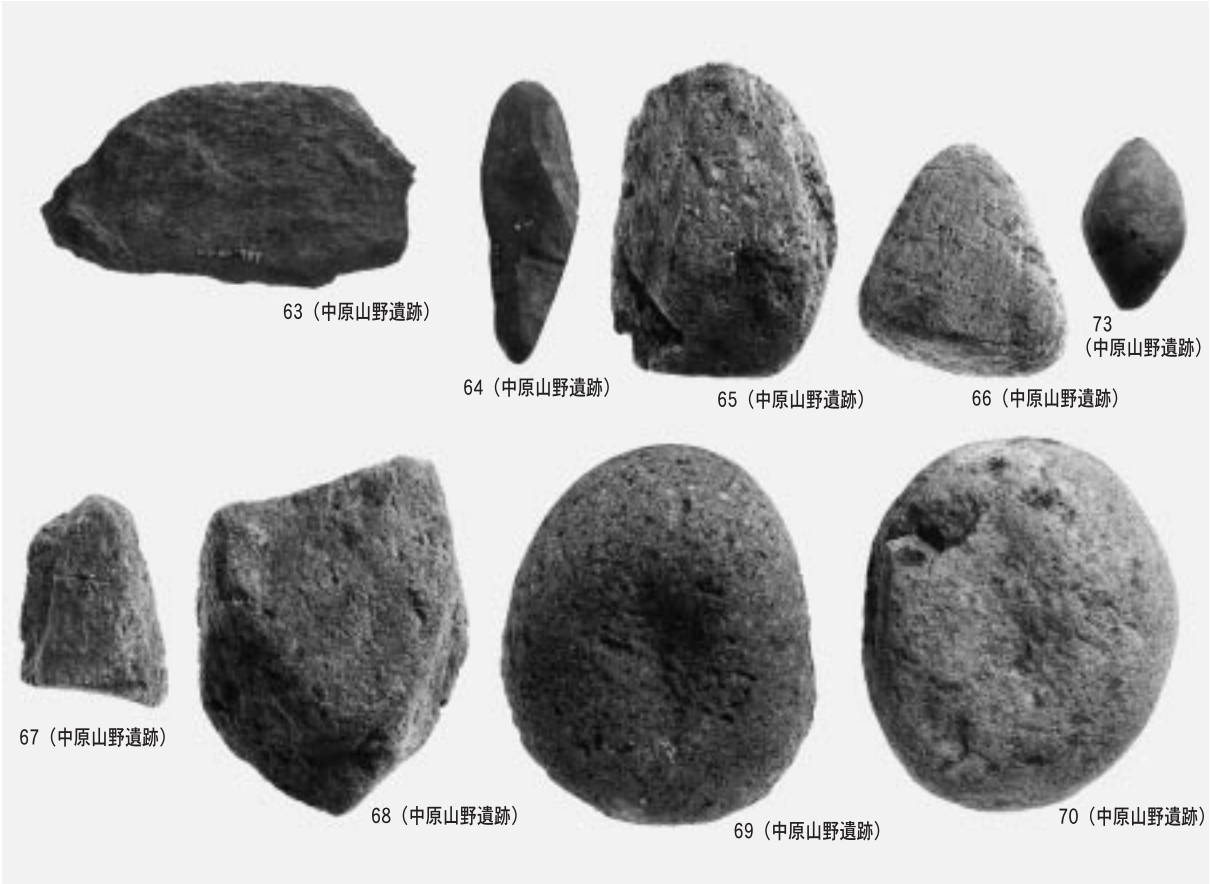


1号住居跡出土遺物(3)

写真図版18



1号住居跡出土遺物(4)



1号住居跡出土遺物(5)



1号住居跡出土遺物(6)

あ と が き

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴い、昭和60(1985)年に最初の発掘調査が行われ、平成3年に暫定2車線で全線の供用が始まってから、早いもので15年余の歳月が流れた。畑地が広がっていた場所は、その面影も次第に薄れはじめ、多くの郊外型店舗が建設されて賑わっている。

先日、子どもを連れて、自転車で鹿屋バイパスの始点から終点まで走ってみた。王子遺跡から薬師堂古墳の上空に架かる鹿屋大橋を渡り、榎田下遺跡、中ノ原遺跡、中ノ丸遺跡、中原山野遺跡、前畑遺跡を通過して、郷之原トンネルに入った。排気ガスにまみれながら急いでトンネルを抜けて、飯盛ヶ岡遺跡、榎崎A遺跡、榎崎B遺跡、西丸尾、西丸尾B遺跡を通過し、終点まで約11kmのサイクリングであった。

緩やかだが長い上り坂の途中で子どもに目をやると、遅れないように、汗をかきつつ笑顔でついてきていた。何気ない瞬間に幸福を感じた。

多くの遺跡が発掘されたこの地では、縄文の昔から数え切れないほどの家族が、ふれあい、語り合い、幸せを願い暮らしてきたのであろう。

澄んだ青空に映える高隈連山を見上げていると、鹿屋バイパスが、遺跡と遺跡をつなぐバイパス、縄文の昔から現在までをつなぐ時間のバイパスに思えてきた。

今回の発掘調査でも、縄文時代、弥生時代、近現代の貴重な資料が得られた。前回の調査で得られた資料に加えて、多くの方々に役立てていただければ幸いである。

最後に、発掘調査を行うにあたり、協力していただいた、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会、発掘調査・報告書作成に従事していただいた作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(114)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財報告書(X)

なか はら さん や

中原山野遺跡

発行年月日	2007年2月
発行	鹿児島県立埋蔵文化財センター 〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 ☎0995-48-5811
印刷	株式会社あすなる印刷 〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36 ☎099-250-7033